

# 四柳白山下遺跡 I



「田地八十」記載墨書土器 径11.9cm

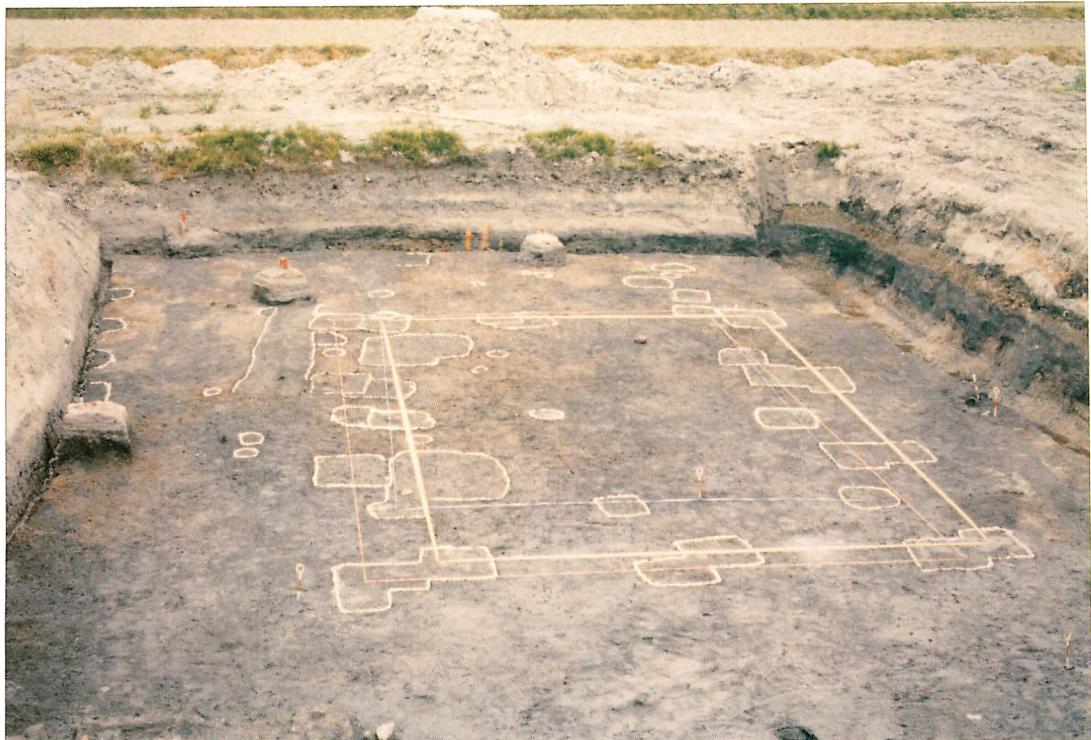
1990

羽咋市教育委員会

# 四柳白山下遺跡 I

1990

羽咋市教育委員会



(1)検出されたSB 01～03 (北から)



(2)掘りあがったSB 01～03 (北から)

# 四柳白山下遺跡発掘調査報告書 I

## 目 次

		頁
例 言	.....	V
第1章 遺跡の位置と環境	.....	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	.....	1
第2節 古代における遺跡周辺の状況	.....	1
第2章 調査に至る経緯と経過	.....	7
第1節 遺跡の発見と分布調査	.....	7
第2節 調査に至る経緯	.....	8
第3節 調査の経過（日誌抄）	.....	9
第3章 第1次調査の概要	.....	11
第1節 第1次調査区の設定	.....	11
第2節 土層の概要	.....	12
第4章 遺構と遺物	.....	14
第1節 各 説	.....	14
1 敵状遺構 [SU01~13]	.....	14
2 掘立柱建物 [SBO1~03]	.....	18
3 柱 列 [SA01·02]	.....	23
4 土 坑 [SKO1]	.....	26
5 配石遺構 [SX01]	.....	27
第5章 遺 物	.....	28
第1節 古代の遺物	.....	28
1 須恵器	.....	28
2 円面硯	.....	40
3 土師器	.....	40
4 その他の遺物	.....	44
第2節 中世から近世の遺物	.....	45
第6章 調査の成果と課題	.....	48
第1節 遺構と遺物の時期	.....	48
第2節 墨書土器の概要	.....	49
第3節 掘立柱建物の類型	.....	50
第4節 まとめにかえて	.....	51

## 図版目次

巻頭図版 (1)検出されたSB01~03(北から) (2)掘りあがったSB01~03(北から)

本文対照頁

図版1	遺跡周辺の航空写真(昭和22年撮影).....	1
図版2	(1)遺跡遠景(北から) (2)バックホーによる荒掘り(東から).....	11
図版3	(1)調査風景(南から) (2)畝状溝掘り下げ作業(南から).....	12
図版4	(1)掘りあがった畝状溝(北から) (2)掘りあがった畝状溝(南から).....	14
図版5	(1)掘りあがったSU10(南から) (2)SU10内土器検出状況(東から).....	14~18
図版6	(1)調査区全体遺構検出状況(南から) (2)調査区全体遺構検出状況(北から).....	19
図版7	(1)掘りあがった調査区全景(南から) (2)掘りあがった調査区全景(北から).....	19
図版8	(1)掘りあがったSB01~03(東から) (2)SB01・02柱穴切り合い状況(北から).....	18~23
図版9	(1)柱根が残る柱列(北から) (2)柱根検出状況(南から).....	18~23
図版10	(1)SK01・SX01検出状況(南から) (2)掘りあがったSK01(北から).....	26・27
図版11	SU01~13出土土器(第7・9図).....	14~18
図版12	SU01~13出土土器(上-第9図)、SB01・02柱穴内出土土器(下-第10図).....	14~23
図版13	SK01出土土器(第16図).....	26・27
図版14	須恵器(第18図).....	28~40
図版15	須恵器(第18図).....	28~40
図版16	須恵器(第18・19図).....	28~40
図版17	須恵器(第19・20図).....	28~40
図版18	須恵器(第20図).....	28~40
図版19	須恵器(第21図).....	28~40
図版20	須恵器(第21・22図).....	28~40
図版21	須恵器(第22・23図).....	28~40
図版22	須恵器(第23・24図).....	28~40
図版23	土師器(第25・26図).....	40~44
図版24	土師器(第27図).....	40~44
図版25	陶磁器(第29・30図).....	45~47
図版26	陶磁器(上-第30図)、その他の遺物(第13・14・17・27・28図).....	18~47
図版27	墨書文字1.....	49~50
図版28	墨書文字2.....	49~50

## 表 目 次

	頁
第1表 周辺遺跡地名表1	5
第2表 周辺遺跡地名表2	6
第3表 土層分類表	13
第4表 掘立柱建物計測表	21・22
第5表 須恵器壺蓋・標準得点による分布	28
第6表 須恵器有台壺・主成分分析による二次元散布	34
第7表 須恵器無台壺・主成分分析による二次元散布	36
第8表 墨書き土器集計表	49
第9表 建物・主成分分析による二次元散布	50
第10表 出土土器観察表1	53
第11表 出土土器観察表2	54
第12表 出土土器観察表3	55
第13表 出土土器観察表4	56
第14表 出土土器観察表5	57
第15表 出土土器観察表6	58
第16表 出土土器観察表7	59

## 挿 図 目 次

頁

第1図	位置と地形概念図(縮尺580,000分の1) .....	1
第2図	採集墨書き器実測図(縮尺3分の1) .....	2
第3図	四柳白山下遺跡と周辺の遺跡分布図(縮尺25,000分の1) .....	4
第4図	分布調査トレンチ位置図(縮尺1,200分の1) .....	7
第5図	第1次調査区グリッド割図(縮尺500分の1) .....	11
第6図	調査区土層断面図(縮尺80分の1) .....	13
第7図	SU01~13出土土器実測図1(縮尺3分の1) .....	14
第8図	調査区全体図1(縮尺80分の1) .....	15
第9図	SU01~13出土土器実測図2(縮尺3分の1) .....	17
第10図	SB01・02柱穴内出土土器実測図(縮尺3分の1) .....	18
第11図	調査区全体図2(縮尺80分の1) .....	19
第12図	SB01~03平面及び断面図(縮尺80分の1) .....	21 22
第13図	SB02柱根実測図1(縮尺3分の1) .....	24
第14図	SB02柱根実測図2(縮尺3分の1) .....	25
第15図	SK01実測図(縮尺60分の1) .....	26
第16図	SK01出土土器実測図(縮尺3分の1) .....	26
第17図	砥石実測図(縮尺3分の1) .....	27
第18図	須恵器実測図1(縮尺3分の1) .....	29
第19図	須恵器実測図2(縮尺3分の1) .....	30
第20図	須恵器実測図3(縮尺3分の1) .....	31
第21図	須恵器実測図4(縮尺3分の1) .....	33
第22図	須恵器実測図5(縮尺3分の1) .....	35
第23図	須恵器実測図6(縮尺3分の1) .....	37
第24図	須恵器実測図7(縮尺3分の1) .....	39
第25図	土師器実測図1(縮尺3分の1) .....	41
第26図	土師器実測図2(縮尺3分の1) .....	42
第27図	土師器実測図3(縮尺3分の1) .....	43
第28図	木製品実測図(縮尺3分の1) .....	44
第29図	陶磁器実測図1(縮尺3分の1) .....	46
第30図	陶磁器実測図2(縮尺3分の1) .....	47
第31図	柱穴内土器出土地点図 .....	48
第32図	遺跡の位置概念図(縮尺290,000分の1) .....	51

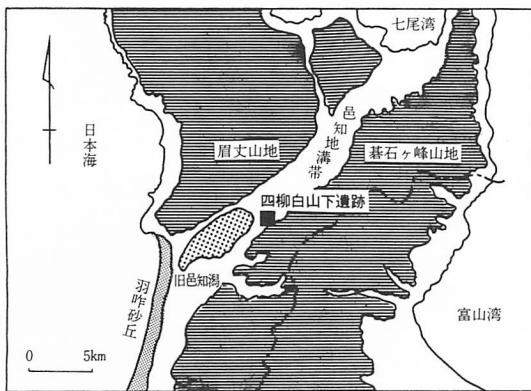
## 例　　言

1. 本書は、石川県羽咋市四柳町に所在する「四柳白山下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、個人住宅建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は国庫及び県費の補助による。
3. 調査は、羽咋市教育委員会社会教育課主事谷内碩央・同主事今井淳一が担当した。また、庶務は同係長小原慎哉があたった。
4. 試掘調査は平成元年1月18日・25日の延べ2日間、本調査は平成元年4月10日から6月2日まで延べ33日間を要した。
5. 出土遺物整理作業及び報告書作成作業は、平成元年6月から平成2年3月までの間適時に実施した。
6. 出土遺物の整理にあたっては、遺物洗浄・接合・記名作業を能山真登加・楠 みち子・森 志津・永原とき子、遺物実測・トレース作業を能山・楠・森、図版作成を今井淳一、写真撮影を谷内碩央がそれぞれ分担した。
7. 本書の執筆・編集は今井淳一が行った。
8. 遺構・遺物挿図の指示は下記のとおりである。
  - (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
  - (2) 方位はすべて磁北を表している。
  - (3) 水平基準は海拔高を示している。
  - (4) 写真図版の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
  - (5) 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
  - (6) 遺構名の略号は次のとおりである。
 

柱列〔SA〕、掘立柱建物〔SB〕、土坑〔SK〕、畝状溝〔SU〕  
その他の遺構〔SX〕
9. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあたっている。
10. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関から、御指導・御協力を賜った。以下に御芳名を記して厚く御礼を申し上げます。（敬称略・順不同）  
 浜岡賢太郎 小嶋 芳孝 垣内 光次郎 北野 博司 木立 雅朗 川畑 誠  
 石川県教育委員会 石川県立埋蔵文化財センター 石川県埋蔵文化財保存協会  
 建設省北陸地方建設局金沢工事事務所 羽咋市歴史民俗資料館 四柳町町会  
 羽咋産業建設株式会社 上田石油株式会社 セントラル航業株式会社

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 遺跡の位置と地理的環境



第1図 位置と地形概念図 (1/580,000)

能登半島の基部西側に位置する羽咋市域の地形は、南東部の碁石ヶ峰山地と北西部の眉丈山地、これらの山地に挟まれた低地のいわゆる邑知地溝帯、そして日本海と接する海岸に発達した羽咋砂丘とに大きく区分される。

山丘で覆われた半島のなかで、邑知地溝帯は羽咋市から七尾市にかけて走る大きな帯状の平野部であり、弥生時代から現代にいたるまで半島随一の穀倉地帯である。その規模は長さ約20km、幅は北東の七尾付近で狭く、南西方向に向かって次第に広がり、羽咋付近では4km以上を測る。また、地溝帯内では、急峻な断層崖をなす南東側の山系から流れ出る中小河川がいくつもの扇状地を作り出し、北西側へと緩やかに傾斜している。

四柳白山下遺跡はこの南東側山麓域にあたる羽咋市四柳町地内に所在し、碁石ヶ峰山地を開析して流れる地獄谷川によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。標高は15～18mを測り、伏流水の湧水が激しい所となっている。

一方、邑知地溝帯の南西部である本市域のほぼ中央には、典型的海跡湖として県下では河北潟に次ぐ湖沼であった邑知潟が所在していた。現在では国営干拓事業（昭和23年度～昭和43年度）などによって水田地帯と化しており、わずかに残る86haの遊水池にかつての面影を残しているに過ぎない。

しかし、本遺跡の南東約100m、標高30～40mの段丘上に立地する四柳貝塚からは、ヤマトシジミだけの貝層が確認されており、縄文時代中期には少なくともこのあたりまでは汽水性の海岸線が達していたと想定される。<sup>(1)</sup>

本遺跡は、日本海に大きく突き出た能登半島の基部を横断する邑知地溝帯の東縁で、かつ古代の良好な港であった旧邑知潟北東岸にあたる扇伏地上に展開している。

## 第2節 古代における遺跡周辺の状況

四柳白山下遺跡が所在する羽咋市四柳町周辺は、古代の行政区画では、『和名類聚抄』記載の能登国能登郡与木郷に比定される地域である。

能登国の中では能登郡は、そのほぼ中央部を郡域とし、九郷で構成されている。そのなかで与木郷は郷の南西端に位置しており、そのまま邑知地溝帯を二分していた羽咋郡と旧邑知潟北東岸付近で接する地域にあたっている。

この郷名については、平城宮跡から出土した和銅6年（713）の庸米六斗の付札に「越前国能登郡翼<sup>よき</sup>倚里」と記されているのが初見であり、この木簡によって7世紀末より実施された律令体制初期の段階には越前国に属しながらも、既に地方行政組織の末端区画として編成されていたことがうかがわれる。

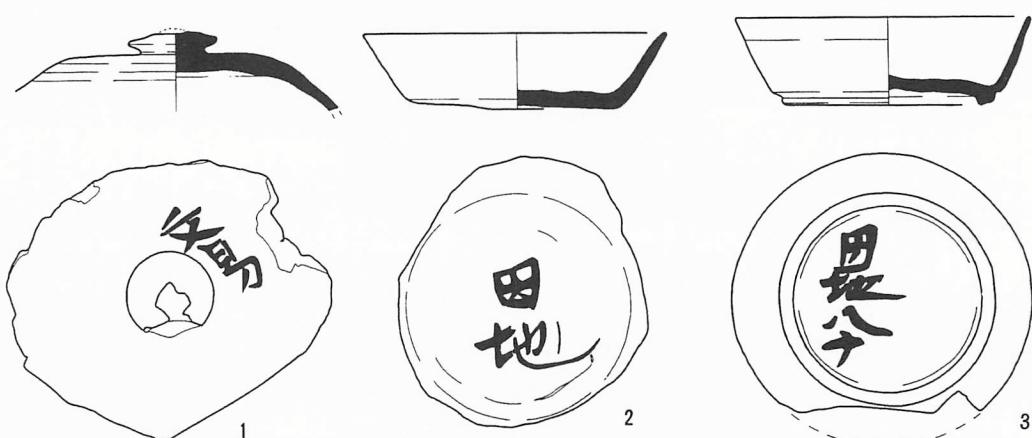
能登国全体としては、養老2年（718）に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分離独立したにもかかわらず、天平13年（741）には越中国に併合され、天平勝宝9年（757）に再び分立するという経緯をたどっているが、いずれの措置も地域の実態に即したものではなく、東北日本への支配拡大のためであったり、藤原仲麻呂政権の確立といった政局の転換によるものであったとみられている。<sup>(2)</sup>

こうした極めて集権性の強い律令体制のなかでは、在地である能登の情勢を伝える文字史料は少ないと言わざるを得ない。しかし、与木郷は逆にこの体制を維持するための古代の交通制度である「駅制」の存在によって地域史の解明に欠かせぬ素材を提供しているといえる。

「駅制」とは全国を畿内と七道に分け、すべての道を都へと通じさせ、各道には乗り継ぎ用の馬を備えた駅を設けた古代の交通網であり、最近の調査で検出された山陽道や西海道の道跡などは幅10m前後と広く、車が使用されるほど直線的で舗装されていたことが判明している。<sup>(3)</sup>

『延喜式』や前出『和名類聚抄』には、北陸道の駅として加賀国横山駅の次に能登国撰才駅が、続いて国府の近くの越蘇駅があげられており、駅名と郷名との結び付きから与木郷域内にその場所が比定されている。

また、本遺跡の北400mに鎮座する御門主比古神社（羽咋市大町）と同社に合祀されている余喜比古神社は、前出『延喜式』の神名帳に能登郡十七座の神々として登載されている。両社ともに古代における在地の有力神であり、御門主比古神社については七尾市鵜浦町に論社があるが、余喜比古神社はその名称からも、もとは撰才駅があったとされる現在の四柳町あるいは大町周辺に鎮座していたと考えられている。



第2図 採集墨書土器実測図（1/3）

こうした、文献史料としての撰才駅や余喜比古神社に加え、昭和23年の耕地整理の際、四柳町在住の四飯弥一氏が遺跡周辺で採集された第2図掲載の墨書き土器の存在は、本遺跡周辺が旧邑知潟北東岸にあって豊かな生産基盤を擁し、邑知地溝帯南東側山麓に設定された古代の官道ルートあるいは湖上交通の中継点として開発が早かったことを示唆していると言えよう。

次に与木郷を含む邑知地溝帯内の古代の主な遺跡を概観しておきたい。

まず、地溝帯南西端にあたる羽咋郡域で、旧邑知潟南岸に所在する長者川遺跡からは8世紀代を示す「生」「大」「口島家」などの墨書き土器9点が採集されており、未調査ではあるが羽咋郡衙との関係が注目されている。<sup>(4)</sup>

また、本遺跡の南西約8km、旧邑知潟と日本海を結ぶ川のほとりには、羽咋砂丘上に寺家遺跡が所在している。<sup>(5)</sup>ここでは古代を三つの画期で区分する大規模な建物群や祭祀遺跡が検出されており、その北方の段丘上に鎮座する能登一宮・氣多神社の歴史的な変遷を具体的に知ることができる。出土した祭祀行為に関係する豊富な資料や299点の墨書き土器などもひときわ目だつものであり、律令体制下での渤海交渉に関わってきた氣多神社の隆盛ぶりがうかがわれる。

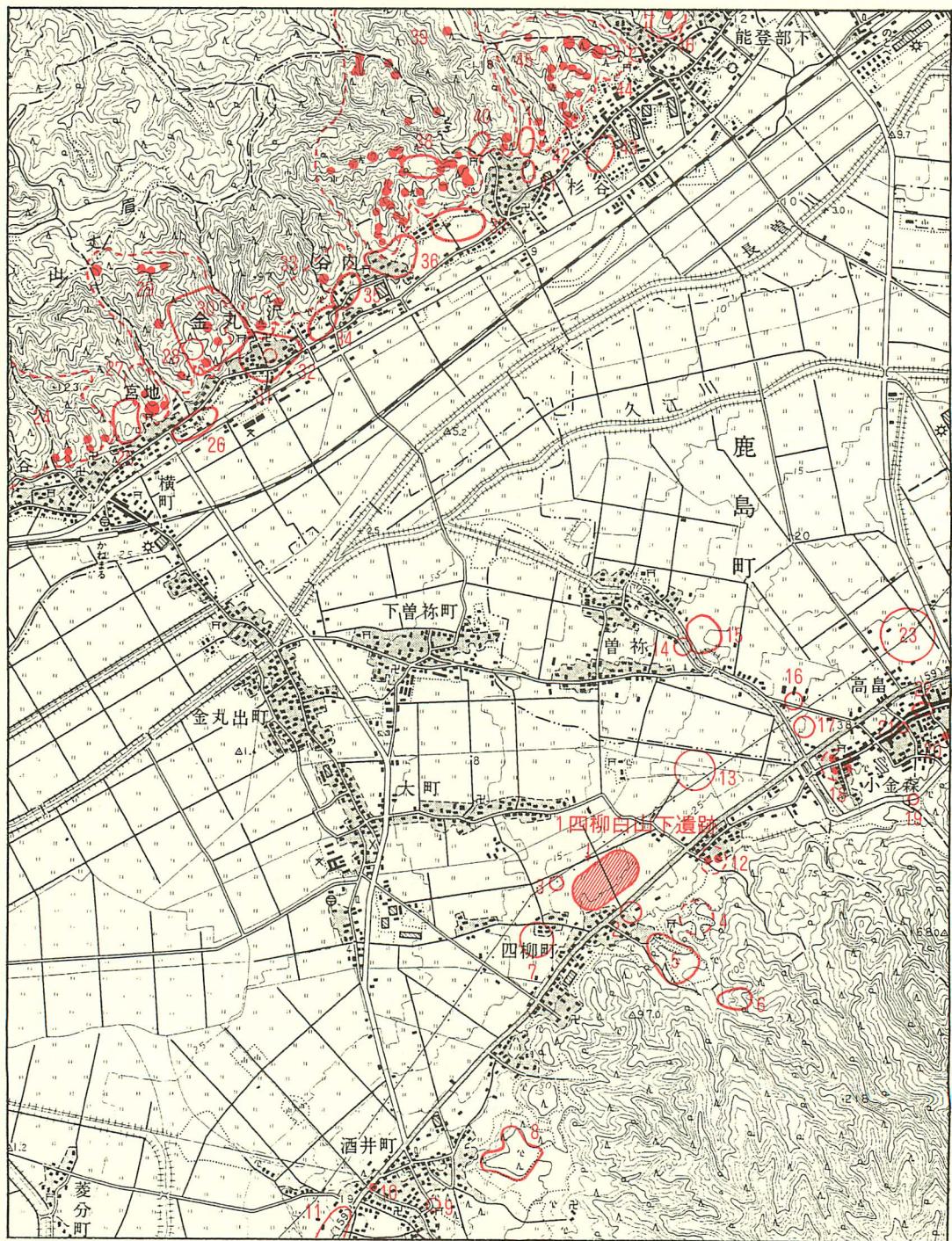
加えて、同神社の南の台地上では、奈良時代に入って三重塔を含むシャコデ廃寺が創建されており、本遺跡の主体期でもある8世紀前半には氣多神が能登の重要な神として組織的に信仰され始めたことが明らかになっている。

続いて能登郡域では、本遺跡の北東約7kmの扇状地上に徳前C遺跡が所在しており、これも8世紀前半の規格性をもった掘立柱建物8棟と井戸跡1基が検出されている。<sup>(6)</sup>

さらに、本遺跡から約14km離れた邑知地溝帯北東端、能登国府所在比定地周辺には、能登国分寺跡<sup>(7)</sup>、同尼寺とされる千野廃寺跡、15棟以上の掘立柱建物を検出した古府タブノキダ遺跡や小池川原地区遺跡などの主要な遺跡が所在しており、至近距離にある越蘇駅や鹿嶋津を含めて古代能登の政治的中枢を形成してきたことが知られる。<sup>(8)</sup>

以上、古代の邑知地溝帯内の本遺跡周辺は、地溝帯の両端に分化したそれぞれの拠点の中間点に位置しており、これまでに述べてきた地理的要因が交通の要衝としての先進性と漸進性をもたらしてきたと思われる。

註 (1) 高堀 勝喜「羽咋の縄文遺跡」「羽咋市史」原子・古代編 1973 羽咋市  
 (2) 浅香 年木「古代の上日郷と石動山」「鹿島町史」通史・民俗編 1985 鹿島町  
 (3) 高橋美久二「情報を制するものは」「古代史復元」9・金子 裕之編 講談社 1989 東京  
 (4) 浅野 幸雄「長者川遺跡」「羽咋市史」原始・古代編 1973 羽咋市  
 (5) 小嶋 芳孝「寺家遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」石川県立埋蔵文化財センター 1986・1988 金沢市  
 (6) 湯尻 修平「徳前C遺跡」「鹿島町史」資料編(続) 1982 鹿島町  
 (7) 土肥富士夫・木立 雅朗・清水 宣義・善端 直・平川 南「史跡 能登国分寺跡」七尾市教育委員会 1989 七尾市  
 (8) 垣田 修児・宮下 栄仁・橋本 澄夫「七尾市古府タブノキダ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター 1983 金沢市



第1表 周辺遺跡地名表1

No.	名 称	所 在 地	種 別	時 代	出 土 品	備 考
1	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	包含地	奈 良	須恵器・土師器多数、墨書き土器 22点、円面鏡	一部平成元年、羽咋市教委、発掘調査
2	四柳貝塚	〃 〃	貝 塚	繩 文	土器片50、石器（石匙1、石鏃3、磨製石斧1、石斧3）	
3	四柳宮の越古錢遺跡	〃 〃	包含地	不 詳	珠洲焼カメ（宋、明錢36貫）	通称名は「倉ノ腰」
4	四柳1号横穴	〃 〃	古 墳	古 墳		7号まであるとのことであるが2号から7号未確認
5	四柳中の堂遺跡	〃 〃	包含地	〃	壺、高坏、器台、塊、台付塊、土錘等20	
6	大町中世墓群	〃 大町 (オハカ)	墳 墓	不 詳	板碑、五輪塔多数（下より四耳壺2）	
7	四柳やちだ遺跡	〃 四柳町	包含地	〃	壺、高坏、器台	
8	酒井東古墳	〃 酒井町	古 墳	古 墳		2基以上
9	酒井中世墓	〃 〃	墳 墓	不 詳	五輪塔、板碑	
10	酒井古墳	〃 〃	古 墳	古 墳		横穴式石室
11	酒井国道遺跡	〃 〃	包含地	〃	高坏脚部3	
12	大町1号横穴	〃 大町上野 (オハカノ上)	古 墳	〃		
〃 2号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		
13	大町なつだ遺跡	〃 〃	包含地	不 詳	長頸壺1、破片	(地点不明)
14	曾祢遺跡（A）	鹿島町曾祢	〃 弥 生	土器		昭36耕地整理により発見
15	曾祢弥生遺跡	〃 〃 (道田の池)	〃	〃	壺、高坏、土器	昭34 〃
16	小金森仏教遺跡	〃 小金森	〃	鎌 倉	鏡	耕地整理により出土
17	曾祢遺跡（B）	〃 曾祢	〃	古 墳	平瓶、甕	耕地整理により発見
18	曾祢1号古墳	〃 〃	古 墳	古 墳 後 期	蓋坏、台付長頸壺、瓈、壺、環頭太刀	明41山下家新築により発見、消滅、円墳、横穴式石室
〃 2号 〃	〃 〃	〃	古 墳	〃		円墳径約7m、高0.5m
〃 3号 〃	〃 〃	〃	〃	〃		円墳径約5m、高1.5m 周は削られ、原形より小型化
19	高畠ケカッショ遺跡	〃 高畠 (ケカッショ)	包含地	繩 文	磨製石斧	
20	高畠経塚古墳	〃 〃	古 墳	古 墳 後 期	坏、圭頭大刀、瓈、刀、高坏	円墳、横穴式石室、径10m 水口家新築の際発見消滅
21	高畠稻荷社跡遺跡	〃 〃	包含地	古 墳		
22	高畠弥生遺跡	〃 〃 (キクヤ小跡)	〃	弥 生 後 期	壺	
23	高畠遺跡	〃 〃	〃	古 墳	壺、小形丸底壺、壺、高坏	昭35耕地整理により発見
24	正部谷古墳群	鹿西町正部谷	古 墳	古 墳		円墳10基以上

第2表 周辺遺跡地名表2

No.	名 称	所 在 地	種 別	時 代	出 土 品	備 考
25	生国玉比古神社横遺跡	鹿西町金丸宮地 (カナマリヅカ)	包含地	中 世	土師器	
26	金丸宮地遺跡	〃 〃	〃	古 墳	壺、高坏	
	〃	〃 〃	〃	奈 良	环皿、須恵器、長頸瓶	
27	金丸鳥屋塚古墳	〃 〃	古 墳	古 墳		横穴式石室(両袖式)
28	仏性山天平寺跡	〃 金丸沢	寺院跡	鎌 倉		
29	沢古墳群	〃 〃	古 墳	古 墳		円墳8、方墳1基以上
30	金丸城跡	〃 〃	城 跡	鎌 倉		
31	金丸地頭館跡	〃 〃	館 跡	〃		
32	専願寺跡	〃 〃	寺院跡	鎌 倉 室 町		
33	谷内古墳群	〃 金丸谷内	古 墳	古 墳		円墳3基以上
34	沢遺跡	〃 〃 沢	包含地	奈良・ 平 安	土師器、須恵器	
35	谷内コショウジ遺跡	〃 〃 谷内 (コショウジ)	〃	〃	〃	
36	谷内ブンガヤチ遺跡	〃 〃 〃 (ブンガヤチ)	〃	〃	須恵器	
37	金丸杉谷川遺跡	〃 〃 杉谷	包含地	平 安	土師壺、須恵坏、隆平永 宝11枚	耕地整理中出土
38	金丸杉谷古墳	〃 〃 〃	古 墳	古 墳	提瓶	盗掘のあとがある
39	杉谷古墳群	〃 〃 〃	〃	〃	鉄鎌	一部、昭和61、62年石川 県立埋蔵文化財センター 発掘調査
40	金丸杉谷川遺跡	〃 〃 〃	包含地	弥 生	石鎌	杉谷川より採集
41	杉谷ヒガシ遺跡	〃 〃 〃 (ヒガシ)	〃	不 詳		
42	杉谷遺跡	〃 〃 〃 (コトミ、セチ シンカイ)	〃	〃		
43	杉谷ヤサカ遺跡	〃 〃 〃 (ヤサカ)	〃	〃		
44	能登部下遺跡	〃 能登部下	〃	繩 文	磨製石斧	
	〃	〃 〃	〃	古 墳	埴形土器、壺	
45	能登部姫塚1号古墳	〃 〃	古 墳	古 墳	須恵器、玉	径27m、高さ4.5m
	〃 2号 〃	〃 〃 (〃)	〃	〃		径18m、高さ2.5m
	〃 3号 〃	〃 〃 (〃)	〃	〃		径22m、高さ3m
46	能登部城跡	〃 〃	城 跡	鎌 倉		

## 第2章 調査に至る経緯と経過

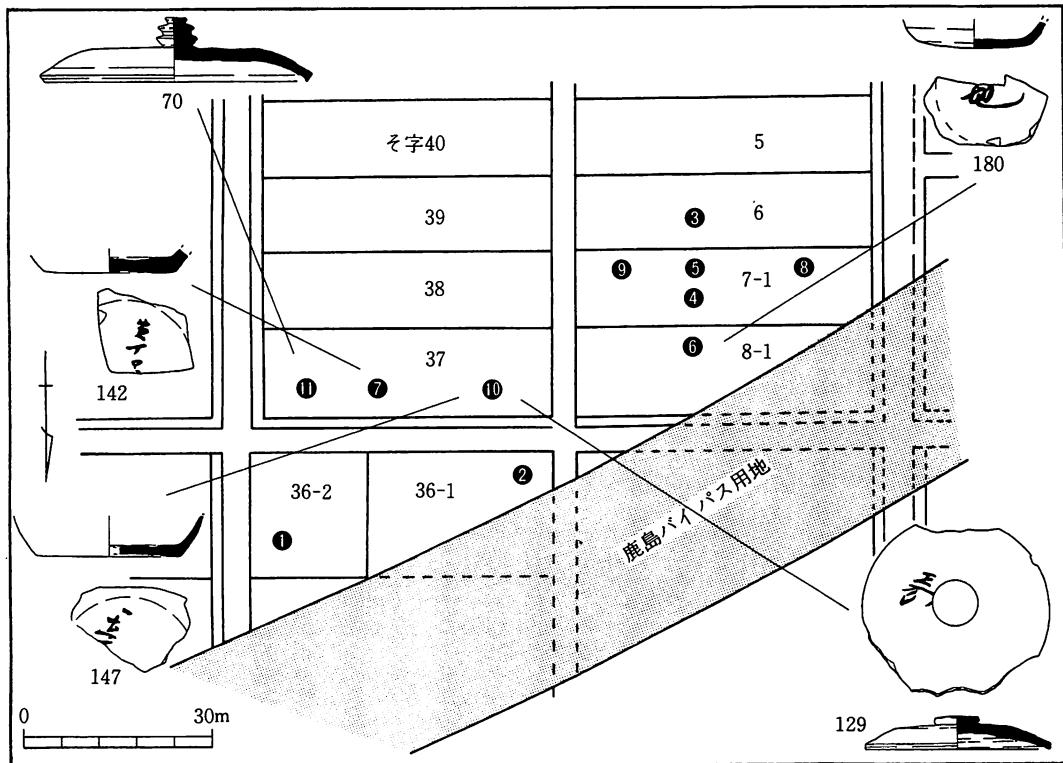
## 第1節 遺跡の発見と分布調査

平成元年1月17日、上田石油株式会社（以下：上田石油）より鹿島バイパス予定地に隣接する羽咋市四柳町そ字6・7-1・8-1・36-1・36-2・37番地の現況地目田に対して、個人住宅及び給油所建築を目的とした開発計画が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

これを受けた市教委では、開発の規模（約3,000m<sup>2</sup>）と周囲に四柳貝塚（第3図No.2）四柳宮の越古銭遺跡（第3図No.3）が所在する点などから、同年1月18日、開発予定地にバックホーで計7カ所（試掘面積合計70m<sup>2</sup>）の試掘孔を設ける形で埋蔵文化財の分布調査を行った。

その結果、第4図に示したように最も低地にあたる第1・2トレンチでは遺物包含層を確認できなかったものの、残りのトレンチでは良好な遺存状態を保つ包含層が認められた。また、その際出土した墨書き器を含む須恵器・土師器などの遺物により、この開発予定地内が既に知られている周辺の遺跡とは時代が異なる新たな遺跡であることも同時に判明した。

ただちに上田石油側と発掘調査に関する協議に入っていた市教委は、25日に二度目の分布調査を行った。これは前回の分布調査が高低差のある南北方向を中心に包含層の有無を確認したのに対して、第5・7トレンチを基にそれぞれ東西方向に遺跡としての包含層の広がりを再確認するためのものであった。前回同様バックホーで4カ所（試掘面積合計106m<sup>2</sup>）の試掘孔を



第4図 分布調査トレンチ位置図 (1/1,200)

設け断面観察を行った結果、包含層は第5から第8トレーナーへ向かうにつれて薄くなり、最も西側では層序の変化が認められたが、全体としては広範囲にわたる遺跡の存在を確認した。

## 第2節 調査に至る経緯

調査の直接原因である開発計画は、鹿島バイパス建設に伴うバイパス用地内からの既存の住宅及び給油所移転によって生じている。この移転問題と埋蔵文化財の問題が当初別々に存在していたことによって、調査の経緯はやや複雑であった。

1月19日 隣接のバイパス予定地にも遺跡の広がりが予想されるため、第1回の分布調査結果をもとに、石川県立埋蔵文化財センター(以下:埋文センター)において、今後の発掘調査に関する取扱いについて協議を行う。同席上、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(以下:建設省)と連絡を取り、上田石油の既存の住宅に関しては既に建設省と移転契約が締結されており、来年中に移転を完了しなければならないこと。また、給油所に関しては未契約である旨を再確認する。その後、埋文センターでの話しを受けた形で市教委内の協議を行い、時間的制約のある個人住宅に重点を置いて調整に臨むことを決定する。

1月24日 建設省金沢事務所において、建設省・埋文センター・市教委間の経過説明及び発掘調査に関する協議を行う。

1月25日 二度目の分布調査によって遺跡の範囲を確認。

1月26日 埋文センターでこれまでの経過説明を行う。

1月31日 石川県教育委員会文化課(以下:県教委)において26日までの経過説明及び個人住宅部分の発掘調査に係る費用の捻出について協議。原因者負担の軽減をはかるため個人住宅部分の発掘調査費用に関する積算書を作成するよう指導を受ける。

2月7日 羽咋市役所において、建設省・市建設課・市教委間の協議。市教委からは分布調査の経過と発掘調査の必要性についての説明を行い、建設省側はバイパス建設に関する用地買収の現状を説明してもらう。協議後、建設省は上田石油へ。

2月9日 県教委との間で、個人住宅建設に伴う発掘調査の調整・協議を行う。

2月16日 上田石油側との協議。給油所予定地についても引き続き発掘調査の調整を行う。

3月15日 上田石油及び四柳町会長宅へ赴き、市教委による4月からの発掘調査の確認と調査作業員の斡旋依頼を行う。

以上の経緯を経て、個人住宅部分の発掘調査は4月10日から6月2日まで延べ33日間にわたって実施した。今回の調査は開発計画を受けた段階から常に時間的な制約を受けながらのものであり、開発の計画段階での十分な協議・調整を痛感させられた調査であった。また、上田石油側からすれば、ようやく移転用地を確保した矢先の思いもかけぬ遺跡の発見であり、計画の大幅な変更等といふんとご迷惑をおかけした。それにもかかわらず、埋蔵文化財への理解を示され終始協力下されたことに対して、敬意と感謝の意を申し述べておきたい。

### 第3節 調査の経過（日誌抄）

4月10日 (月) 曇り

本日より現地調査開始。住宅の計画図面を基に調査区域を設定。バックホーによる荒掘りを行う。

4月11日 (火) 晴一時雨

荒掘り作業と同時に発掘用機材を運び込む。

4月12日 (水) 曇り一時雨

発掘調査員によってベルトコンベアを設置し調査区全域の第4層の掘り下げ作業を行う。

バイパス予定地のセンター杭を基準にグリッドを設定する。

4月13日 (木) 晴

第4層及び第5層の掘り下げ作業を行う。

4月14日 (金) 晴

J～H区間の第5層の掘り下げ作業を行う。墨書き土器が2片出土する。

4月17日 (月) 曇り

バックホーによる排土の除去作業に加え、湧き水の多い地帯なので、水はけ用の溝を設ける。

4月18日 (火) 曇り

第5層の掘り下げ作業の結果、南北方向に走る溝状遺構を数条検出。

4月19日 (水) 晴

溝条遺構の平面図取りとレベル記入を行った後調査区全体の整理清掃作業、写真撮影を行う。

4月20日 (木) 晴

第6層の掘り下げ作業に入る。J～I区間で粘土面の広がりを、F～H区間で新たな溝状遺構を確認する。

4月21日 (金) 晴

遺構検出作業及び写真撮影。新たに検出した溝状遺構の平面図取りとレベル記入を行う。

4月26日 (水) 晴

調査区全域で第6層の掘り下げ作業を行う。G～F区間でも溝の続きを確認。余喜公民館山岸主事他1名来跡。

4月27日 (木) 曇り後雨

第6層の掘り下げを続行。発掘面が乾燥のため固い。聞き取りの結果、調査区周辺の通称が白山下と判明。遺跡名を四柳白山下遺跡とする。

(社)埋文保存協会山本・藤田氏他1名来跡

4月28日 (金) 晴

第6層の掘り下げ作業を続行。



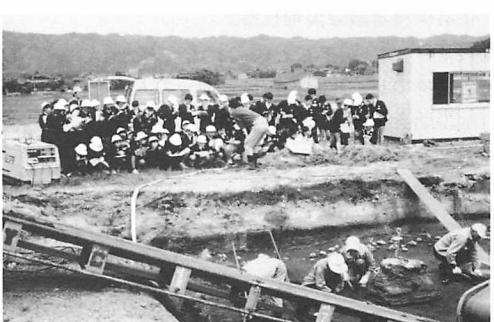
4/12 調査前の供養



4/18 遺構検出作業



4/19 検出した畝状溝を掘る



5/16 小学生の遺跡見学

5月1日(月)～9日(火) 晴 (内作業4日)

第6層の掘り下げ作業を続行。

5月10日(水) 曇り

北側壁面の配石周辺及び粘土面土坑の整理作業と写真撮影を行う。第6層の掘り下げも続行。

5月12日(金) 小雨

I3区内で溝内のまとまった土器群を検出。10号溝とする。

5月15日(月) 晴

10号溝の掘り下げ作業と平面図取り及びF～H区間の遺構検出作業を行う。

5月16日(火) 晴

調査区壁面の整理作業及び全体の写真撮影を行う。金沢市浅ノ町小学校70名遺跡見学。

5月17日(水) 曇り

遺構検出作業で掘立柱建物の柱穴と思われる遺構がいくつか認められる。

5月18日(木) 晴

調査区全域の遺構検出作業を続行。二間×三間の掘立柱建物を検出。

5月19日(金) 曇り

精査の結果、ほぼ同一面で三つに重なり合う建物跡であることが判明。検出時の全体写真撮影を行う。1～3号建物と呼称する。

5月22日(月) 晴

検出遺構の掘り下げ(半掘)作業を行う。

5月23日(火) 晴

平面図取りとレベル記入作業。2号建物柱穴に柱根の残存を確認。

5月24日(水)・25(木) 晴

各遺構の全掘作業と建物間の切り合い関係を確認。清掃作業の後、全体の写真撮影。

5月30日(火) 晴

各遺構の平面図取り及び配石のレベル記入。市文化財保護審議会現地視察。

6月1日(水) 晴

各遺構のレベル記入の後、地元の人達を対象に現地説明会を開催。50名参加。

6月2日(木) 晴

発掘機材撤収。本日をもって現地調査を終了する。



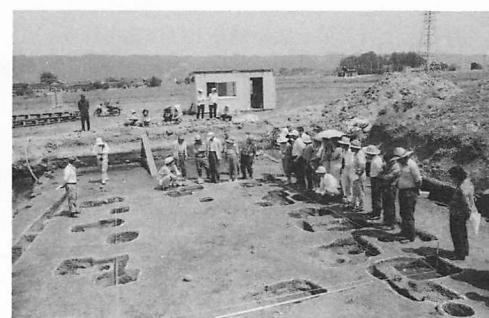
5/19 検出した柱穴を石灰で縁取りする



5/22 規則的に並ぶ建物柱穴を掘る



5/30 取りあげた建物の柱根



6/1 現地説明会

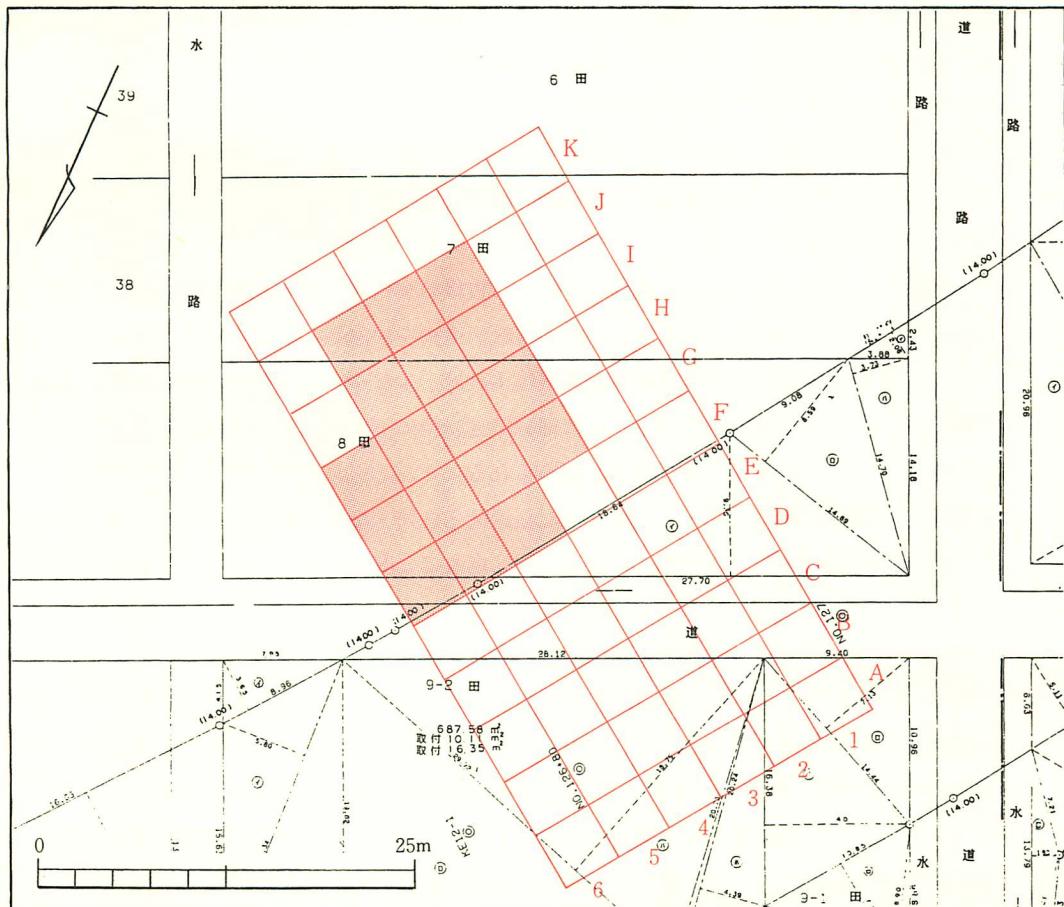
## 第3章 第1次調査の概要

### 第1節 第1次調査区の設定

分布調査対象区域において、第1次調査区（個人住宅建設予定地・四柳町そ字6・7-1・8-1番地）にあたる第3～6・9トレント周辺を中心として発掘調査を実施した。ただし、周囲が農道と農水路で囲まれていたために区域外となる所が多く、また排土及び湧き水対策もあって、実質調査面積は約200m<sup>2</sup>となった。

発掘調査区の設定には、バイパス予定地内のセンター杭（No.126・127）を基準に4m×4m方眼のグリッドを割り付けた。これは調査時点において、第2次調査年度（給油所建設予定地）が未定であり、両調査区を一括資料として扱いやすいように選んだものである。

第5図に示したように、南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を付して呼称している。この座標が交差する点の名称を交点の東北側のグリッド名とした。実際には、まず現地表下約80cmの表土及び第3層面までをバックホーによって除去した後で、グリッド用の杭を打ち込んでおり、第5図網掛け部分が第1次調査地域である。



第5図 第1次調査区グリッド割図 (1/500)

## 第2節 土層の概要

本遺跡の層序は、基本的に礫や鉄分を含む茶褐色土（第1a層）、礫を含む褐色土（第1b層）、淡青褐色細砂質土（第2層）、黒茶褐色粘質土（第3層）、茶褐色砂質土（第4層）、黄茶灰褐色砂質土（第5層）、黒灰色粘砂質土（第6層）、黄褐色砂質土（第7層・基盤砂層）の順に堆積している。

現在の耕作土である第1a・1b層は搅乱気味であり、過去の耕地整理の際に一括して投棄されたと思われる礫石群を部分的に含んでいた。またこの中からは、第28・29図に掲載した中・近世の陶磁器類がほとんど出土しており、断面観察の状況では、次に述べる第3層の遺物包含層中にあったものが削平・投棄の結果、上層まで移動したものと推定される。

第3層の堆積状況は一様ではなく、調査区南端J列でやや厚い層として認められるが、全体的には5～10cm前後の薄いものであった。調査時は湧き水の多さとも相まって面的な把握は難しく、遺物包含層としての位置付けしかできなかった。しかし、並行して行った聞き取り調査では、調査区周辺の通称名「白山下」は、白山神社のご神体が掘り出された所からの由来であるとされており、その他まわりにも「倉ノ腰」「左近殿（サコダゴ）」「的場」というように、一般の集落ではない生活を連想させる小字名が残っている。

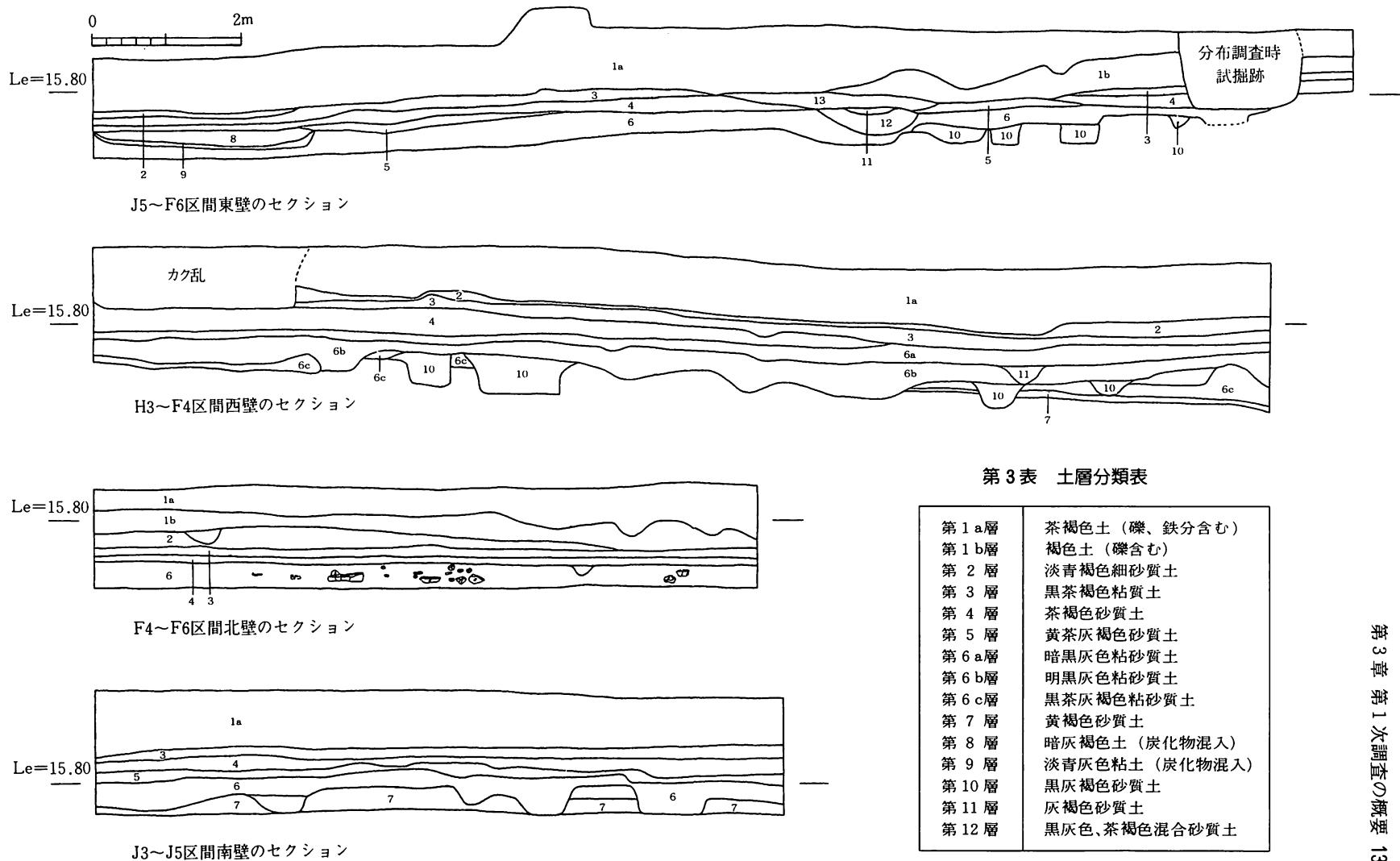
特に、調査区の北西約100mに所在する通称「倉ノ腰」からは昭和15年（1940）大甕に納められた古銭約40貫余りが出土したことが記録に残っており、その近くに井戸跡と考えられる木組みの遺構が土中に現存しているという情報も聞き取りの際に入手できた。現在四柳神社に奉納されている古銭の他は、想像あるいは未確認の範囲であり、今後も中・近世の文化層に関しては慎重な対応が必要であろう。

続く砂質層である第4層を挟んで第5・6層は、古代の文化層である。第5層を掘り下げた第6層の上面では13条の南北に走る溝、いわゆる畝状遺構を検出している。（第8図）

黒色系の第6層は、調査区各地点の断面観察によれば、少なくとも上層に暗黒灰色系の粘砂層、下層に明黒灰色系の粘砂層というように細分でき、特に下層ではその上面及び基盤砂層を掘り込む形でいくつもの遺構の落ち込みが認められる。

この面では、掘立柱建物3棟・土坑1基・配石遺構・柱列・小穴を検出しており、（第11図）なかでも掘立柱建物（SB01～03）がほぼ同じ場所で3度建て替えられている事実が判明している。

第6層全体の堆積状況は、調査区の東西方位にあたるJ3～J5区間南壁のセクションで、標高15.8～16.0m、F4～F6区間北壁で標高15.2～15.3mと、それぞれ平均的な厚さ40～50cmでほぼ水平に堆積している。これに対して南北方位にあたるJ5～F6区間東壁のセクションでは南側で標高15.8m、北側で15.3mと約16m間隔で約50～60cmの落差をもって堆積している。H3～F4区間西壁での傾向も同様であり、当時の生活面が邑知地溝帶南東山麓側から地溝帶中央部潟側に向かって緩やかに傾斜する平坦面であったことが復元できる。



第3表 土層分類表

第 1 a 層	茶褐色土 (礫、鉄分含む)
第 1 b 層	褐色土 (礫含む)
第 2 層	淡青褐色細砂質土
第 3 層	黒茶褐色粘質土
第 4 層	茶褐色砂質土
第 5 層	黄茶灰褐色砂質土
第 6 a 層	暗黑灰色粘砂質土
第 6 b 層	明黑灰色粘砂質土
第 6 c 層	黒茶灰褐色粘砂質土
第 7 層	黄褐色砂質土
第 8 層	暗灰褐色土 (炭化物混入)
第 9 層	淡青灰色粘土 (炭化物混入)
第 10 層	黑灰褐色砂質土
第 11 層	灰褐色砂質土
第 12 層	黑灰色、茶褐色混合砂質土

第6図 調査区土層断面図 (1/80)

## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 各 説

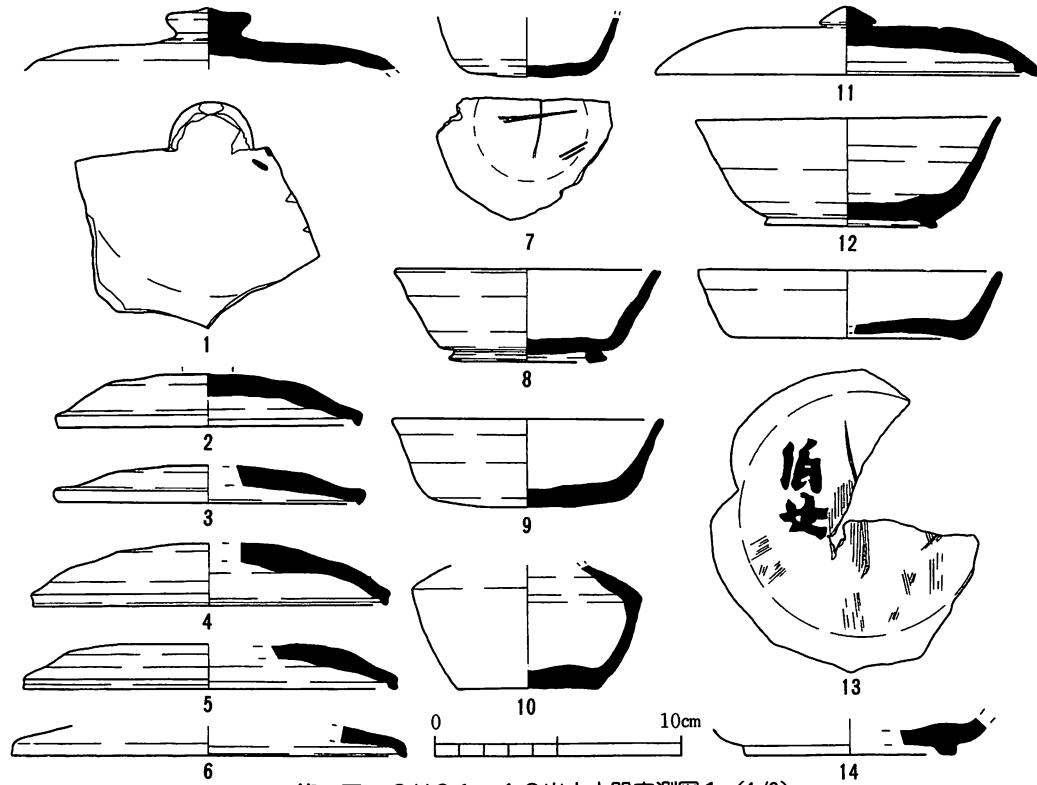
#### (1) 敵状溝 [SU 01～13]

第5層まで掘り下げていくと、調査区全体にわたってほぼ南北に平行する幅20～50cm前後、深さ5～20cm前後の浅い溝が12条走っているのを検出している。遺跡の主体期である古代の包含層（第6層）上面にそれぞれが掘り込まれており、覆土は、ほとんどのものが灰褐色砂層の単一層であった。検出面では途中で途切れたものもみられるが、比較的良好な遺存状態を保っていた調査区東側部分で判断するならば、もともと40cm前後の等間隔で平行して走っていたものと推定される。

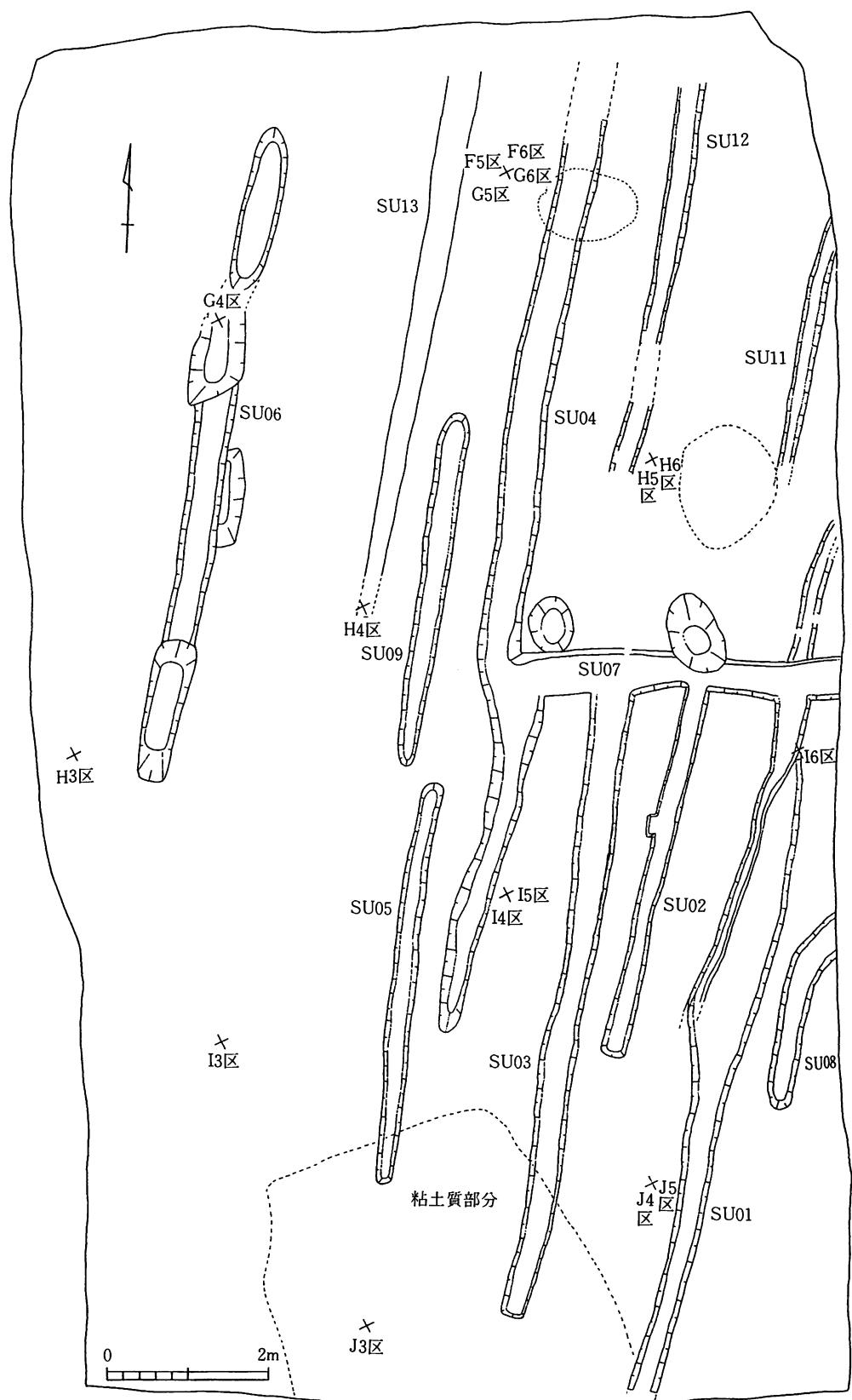
また、1条（SU 07）のみではあるが、H 5～6区にかけて前述した南北方向を走る溝と直交する形で、東西方向に走る溝を検出している。

覆土中より出土した遺物のなかには、包含層出土のものと接合できる個体が多く、さらに後述する掘立柱建物の建て替えと出土土器の整理により設定した3期にわたる遺跡の変遷期全般を通した遺物が認められる点などから、生活面としての建物などが廃絶したあとに、その方向性を利用してつくられた畠の敵に伴う溝状の遺構であると思われる。

ただ、その中でもH 3区北東端からF 4区へと流れるSU 10の場合、最終的な検出面の標



第7図 SU 01～13出土土器実測図1 (1/3)



第8図 調査区全体図1 (1/80)

高が他と比して低く、掘立柱建物などの面と同様であった。さらに、まとまって土器が出土したH 3 区間での状況を考慮に入れると、初期の段階での建物に伴う雨落溝あるいは区画溝としての性格をもっていた可能性も考えられる。

続いて、S U 0 1 ~ 1 3 より出土した土器を一括して報告しておきたい。出土状況は前述したS U 1 0 の土器群を除き、調査区全域から多量に出土した包含層のそれと同様であった。

1 ~ 6 • 18 • 19は須恵器の坏蓋で、形態差及び胎土などにより、後述する各類に分類できる。（第5章参照）S U 1 0 の溝底部から出土した19は最も先行的な要素をもつもので、本遺跡第I期に位置付けられる。ヘラ削りを施された天井部外面からなだらかに口縁端部へと移行する扁平気味の笠形で、口縁端部は個性的な断面三角形を呈している。S U 0 5 出土の1は逆に最も後出的なIII期のもの。扁平な天井部には中央部に突起のある高いボタン形のつまみがつき、同一個体と思われる包含層出土No 152 から、口縁端部を外屈させる器形であることが知られる。天井部内面には墨書及び墨痕が認められる。墨書は大部分を欠いているため判読は困難である。

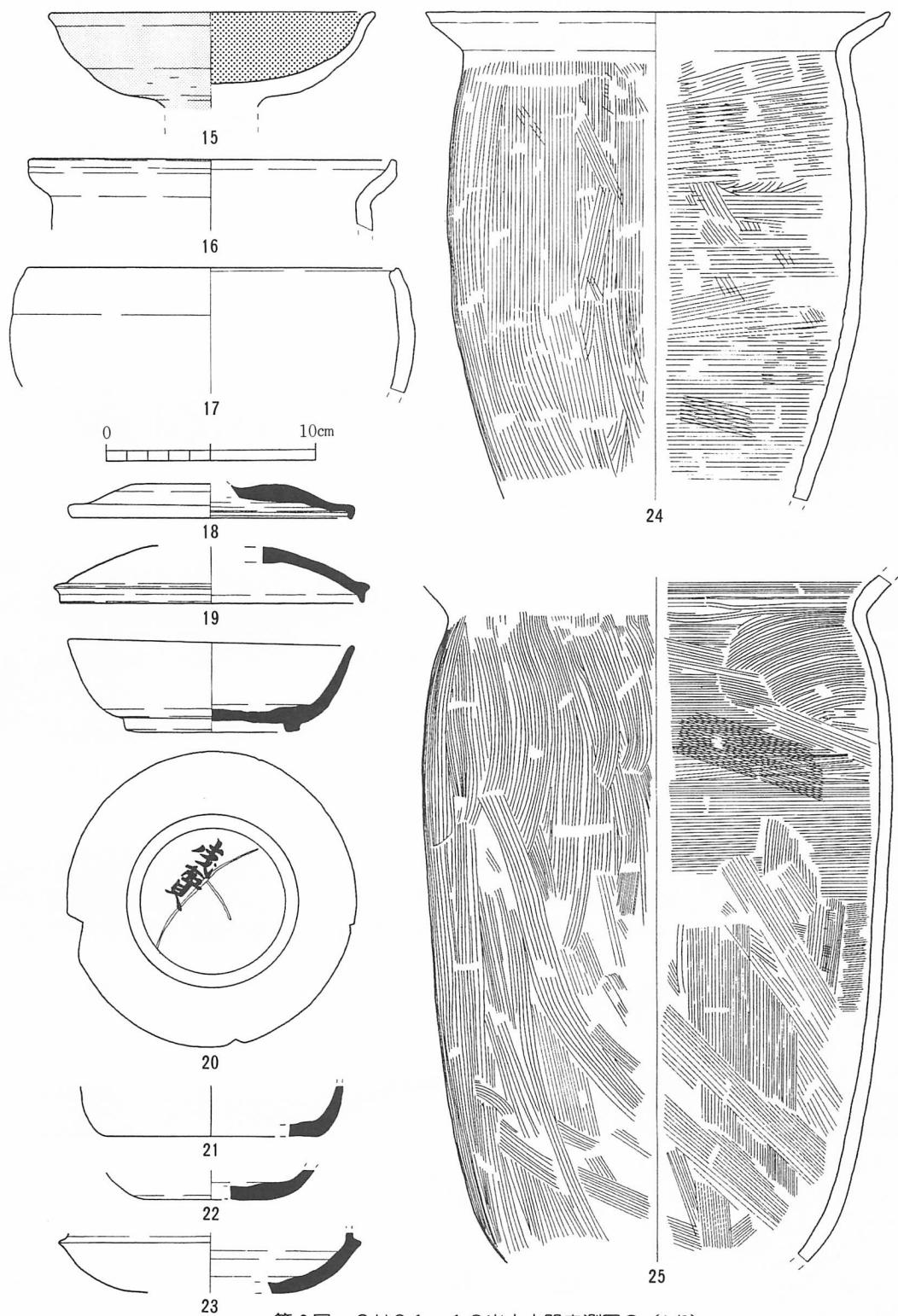
その他の特徴として、2 ~ 5 • 18の内面にも墨痕が残っている点は、本遺跡II • III期に須恵器坏蓋が転用硯として再使用されたことが多かったことを物語っている。

8 • 14 • 20は須恵器有台坏。S U 0 9 出土の8は胎土・焼成が特に精良、堅緻な一群のひとつで、口径 10.8 cm、高台径 5.5 cm、器高 3.7 cmを測る。底部外面を含め全体に入念な仕上げナデ調整が施されているI期の製品。S U 10 からほぼ完全な形で出土した20は口径 13.6 cm、高台径 8.2 cm、器高 4.2 cmを測る。底部外面には「×」印のヘラ書きと、判読できない二文字の墨書が認められる。II期の製品。

9 • 13は須恵器無台坏。9はS U 0 1 の出土で、口径 11 cm、底径 7 cm、器高 3.5 cmを測る。2 ■前後の砂粒や長石を含む胎土は出土土器全体の傾向と共に通だが、焼きの甘い製品でIII期に位置付けた。底部と体部の境が丸みをもち、口縁端部がやや肥厚気味に丸く収まる。13はS U 0 6 出土で、口径 12.2 cm、底径 9.4 cm、器高 2.7 cmを測る。皿状に近い低平な器形で、薄めの底部から体部が直線的にのびる。色調は淡青灰色を呈し、砂粒・長石を含む胎土・焼成は良好。外面には「-」印のヘラ書きと「酒女」と読める二文字の墨書が記されている。II期。

23は今回確認できた須恵器のなかで最も古い形態をとるもので、細部を欠損しているが、坏の立ち上がりが上方ないしやや斜めにのびていたものと推定される。底部外面には回転ヘラ削り、他の部分には回転ナデ調整が施されている。色調は暗灰色を呈し、胎土・焼成は緻密で独特である。

土師器では15•17•24•25がS U 1 0 のH 3 区内からまとった状態で検出したものである。なかでも24•25の甕はともに底部を欠いてはいるが、ほぼ1個体分の分量が出土している。24は口径 21.7 cmを測る大形甕で、ヨコナデ調整を施された口縁部は大きく外反し、口唇部外面の斜位の面取りによってやや小さくつまみ出される形態をとる。体部最大径は中位にあり 19.6 cmを測るが全体の張りは弱い。外面は縦位、内面は横位のハケ調整が施され、胎土には砂粒の他に雲母・海綿骨片を含む。25の体部最大径は 22 cm で上位にあるが、中位までは計測値の変わらな



第9図 SUO 1~13出土土器実測図2 (1/3)

い筒形を呈しており、口径も体部径とそう大差のないものになると思われる。体部外面は、縦位あるいは斜位のハケ目、内面は上部が横位で下部が縦位のハケ目調整である。胎土は砂粒と海綿骨片・赤褐色粒を含んでいる。15は内面を黒色処理、外面赤彩を施した高壙の壙部で、口径は15.6cmを測る。皿状を呈し、内湾気味に立ち上がる体部から口縁部が丸みをもつ面をとる。外面はナデ、内面はミガキ調整が施され、胎土には砂粒及び雲母を含む。16はS U 0 6 出土で口径17.6cmを測る中形甕の口縁部片。くの字状に外反し、口唇部がさらに上方につまみ出されている。

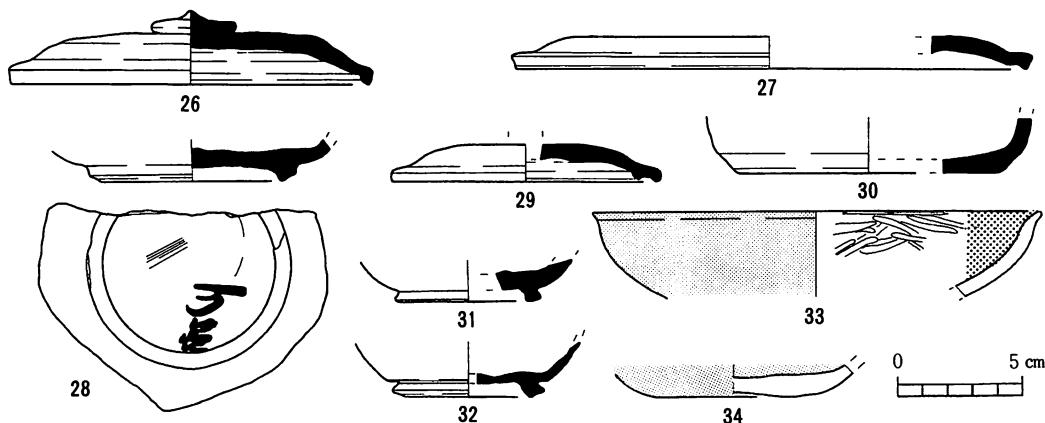
## (2) 掘立柱建物〔SB 0 1～0 3〕

今回の調査で確認できた掘立柱建物は3棟である。(第11・12図) 200m<sup>2</sup>弱という非常に狭小な発掘面積であったが、その中央部G～I列グリッド内にそれぞれが重なり合う形での検出となり、多量の土器類の出土とも相まって遺跡の主体期を探るうえで貴重な資料となっている。建物の柱穴については、寺家遺跡の例にならい梁間をイロハ列、桁行を1 2 3列で呼称した。

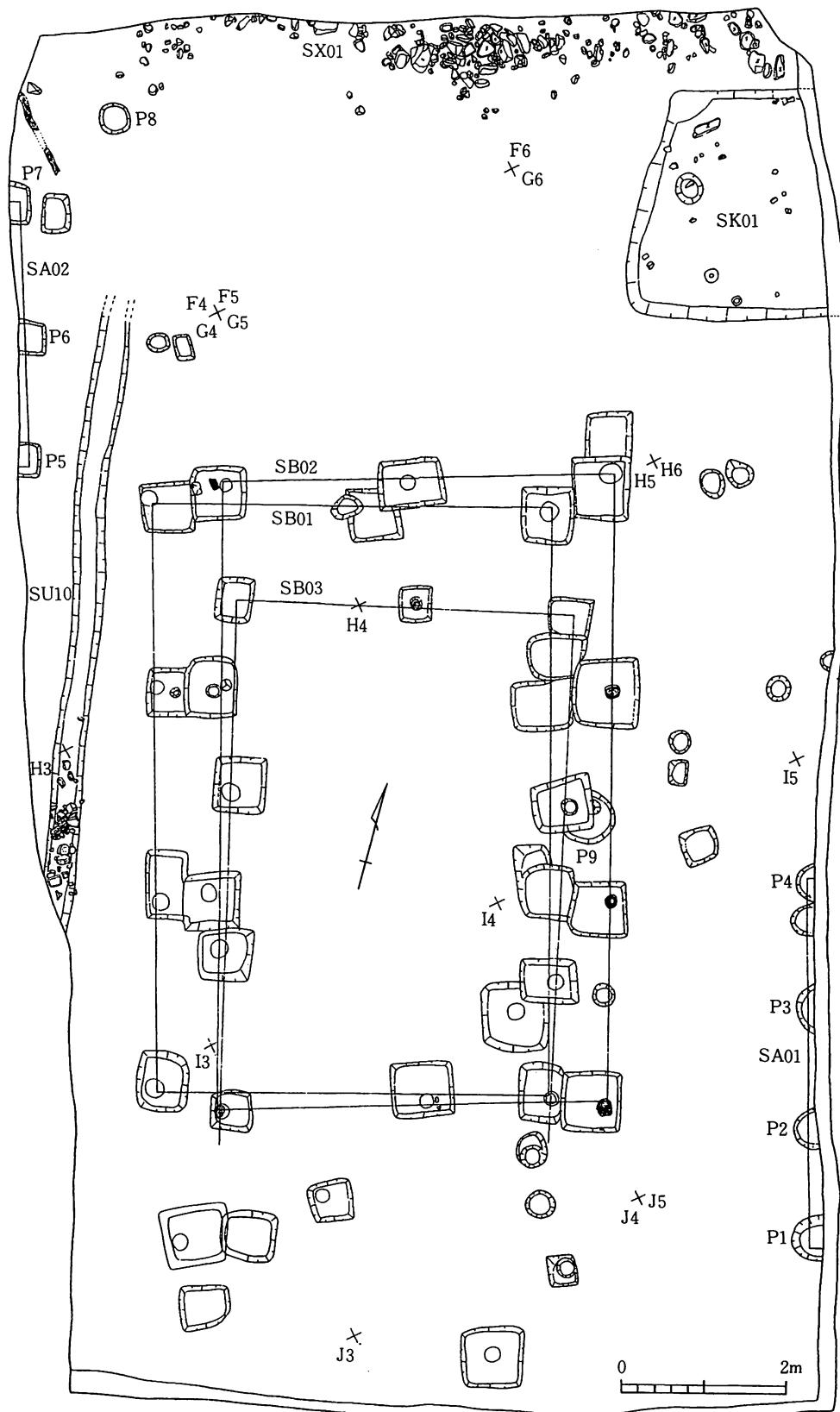
### SB 0 1

標高15m前後、2度の角度で南から北へ傾斜する緩斜面上に位置する。梁間2間(4.9m)×桁行3間(7.2m)の規模で、推定床面積は35.28m<sup>2</sup>である。建物の主軸はN-16°-Wを測る南北棟で、柱筋、柱間寸法ともに比較的そろっている。

桁行東側柱列で北より230cm、260cm、230cm。梁行は北側柱列で西より260cm、230cmである。柱穴の掘り形は、平均65×65cmの方形である。遺物はすべての柱穴より土師器、須恵器小片を中心に出土しており、6点(第10図26・29・31・32・33・34)を図示した。なかでも26はほとんどの遺物が柱穴の掘り形部分に混在した状態であったのに対し、柱痕部分から完形で出土している点が注目される。色調は酸化焰焼成のため赤茶褐色を呈しているが、形態や成形技法等は一般的な還元焰焼成のそれと同じであり、須恵器壙蓋として扱った。口径14.5cm、器高2.9cm、重量220gを測る。ヘラ削りされた天井部には扁平ではあるが径3.4cmで、中央に突起のあるボタン形つまみがつき、口縁端部が屈曲して垂下する平笠形を呈している。内面全体には墨痕が認められる。本遺跡出土須恵器の壙蓋B 2類、変遷期ではⅡ期に属するもので、口2柱



第10図 SB 0 1・0 2柱穴内出土土器実測図(1/3)



第11図 調査区全体図2 (1/80)

穴の穴底から正位で水平状態のまでの出土であった。

29・31・32の須恵器はそれぞれ柱穴イ4・イ2・ハ3の掘り形から出土したもので、色調は青灰色、胎土・焼成は堅緻で精良、割れ口断面内部の酸化層がクリーム色を呈するといった共通性をもっている。29は口径10.9cmを測る坏蓋で内面返りをもつ。外面は降灰を被り、内面は中心部から返りにかけて全面が摩耗によると思われる滑らかな面となっており、部分的にはかすかに墨痕が認められることから転用硯として使用されたものと推定される。高台径5.2cmを測る32の有台坏も高台内面に同様の使用痕と墨痕が認められる。滑らかな面は特に中心部ほど顕著であり、ナデ調整痕が消滅している。

33は柱穴イ2出土で、内面を黒色処理、外面赤彩が施されている。口径18cmを測り、口縁端部が短く外反する。ヘラミガキを施された内面の黒色処理は丁寧で、銀色を呈するほどである。34は内外面に赤色顔料を塗布した碗の底部で、隣り合う柱穴イ4・ロ4掘り形からの出土品が接合されたものである。底径6.6cmを測り、残存する底部から体部下半にかけてはヘラ削りが施され、胎土は砂粒・海綿骨片を含んでいる。

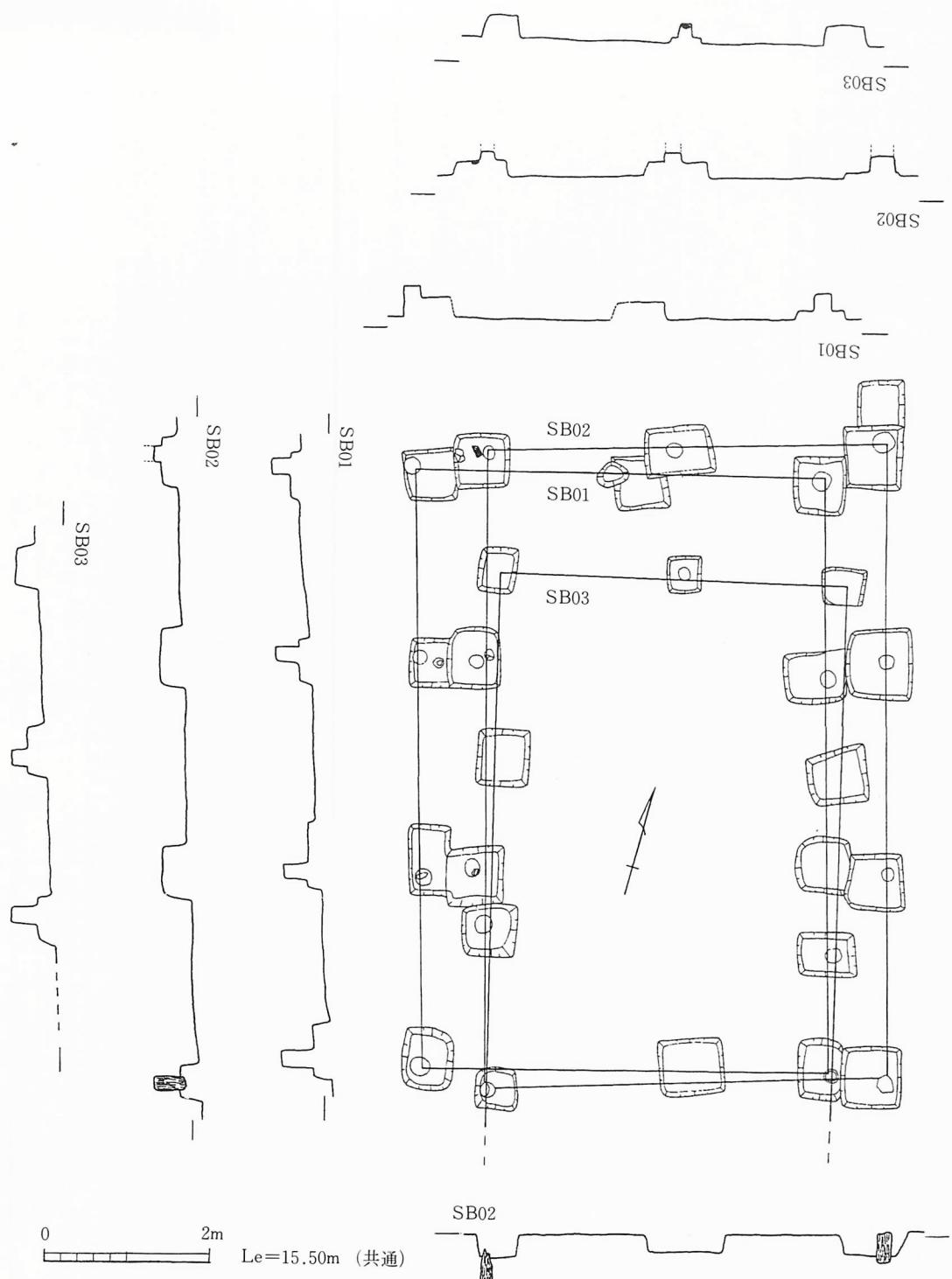
その他の柱穴内からの遺物としては、図化できなかったが長軸8.5cm、短軸2.0cm前後を測る木片が焼けた状態で出土している。

## S B 0 2

S B 0 1と建物の主軸方位は同じまま、東へ75cm前後平行移動した形で検出された。梁間2間(4.8m)×桁行3間(7.6m)で、推定床面積は36.48m<sup>2</sup>と桁行がのびた分だけS B 0 1よりもわずかに大きい規模となっている。桁行東側柱列で北より260cm、250cm、250cm。梁行は北側柱列で西より230cm、250cmとなり、基本的な構造は変わらないと思われる。柱穴の掘り形は平均70×70cmの方形で、柱穴イ1・イ2・イ3・ハ1には柱根をもっていた。(第13・14図)残存する長さ及び幅はイ1が35.4cm、16.4cm、イ2が31cm、15.6cm、イ3が28.9cm、20.6cm、ハ1が38.8cm、16.5cmをそれぞれ測る。いずれも両側面から加工されており、底面は広く平坦面をなしている。

遺物はすべての柱穴掘り形から土師器片を中心として出土しており、そのなかで図示できたのは柱穴イ1内よりの27・28と柱穴イ2の30であった。(第11図)27は口径20.5cmを測る須恵器坏蓋口縁部片で、端部を極端に屈曲させてある。色調は青灰色で胎土・焼成は堅緻。割れ口断面が紫色を呈している。内面には油煙状の痕跡が認められる。28は須恵器有台坏の底部片。低く外展する高台径は8.4cmを測り、断面形が内から外に向けて斜めになるものである。色調は淡灰褐色で、胎土・焼成は砂粒・長石を多く含み、軟質といった印象を与える。高台内には墨書が認められる。判読できる部分は二文字分の「万呂」であるが、その上位にもかすれた墨痕状の箇所があり、本遺跡出土墨書を整理・分類した限りにおいて、「玉万呂」と書かれていた可能性が高い。また、この墨書の左上にも墨痕の部分が確認できるが、別の墨書であるかは不明である。

その他の遺物としては、木製品(第30図1)と植物遺体がある。1は柱穴ハ4からの出土で、



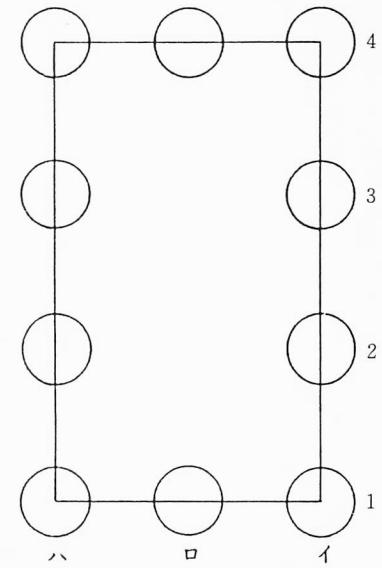
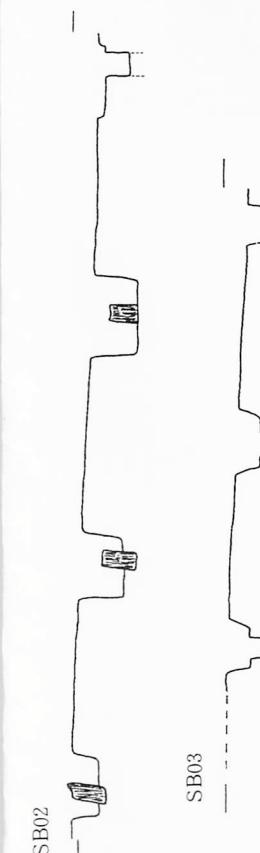
第12図 SB01～03平面及び断面図 (1/80)

第4表 掘立柱建物計測表

(単位:m)

建物 番号	柱 間 (梁×桁)	柱間寸法		桁長	梁長	床面積	方 位	掘り方 の 形と規 模
		桁行	梁行					
0 1	2×3	(2.4)	(2.45)	7.2	4.9	35.28	N-16°-W	方形0.65
0 2	2×3	(2.53)	(2.4)	7.6	4.8	36.48	N-16°-W	方形0.70
0 3	2×2以上		(2.1)		4.2		N-14°-W	方形0.45 0.65

( )内は概数値



掘立柱建物柱穴概念図

最大長 12.8 cm、長軸 6.3 cm、短軸 4.8 cmを測る。板目材で断面長方形を呈し、上端が斜位に面取りされている。植物遺体は柱穴イ4・ハ3・ハ4から種子を、柱穴ロ4から刺状の断片を検出している。同定は行っていないが、種子に関しては大きさ及び先の尖った卵形で表面に深いしわがある点などの形態的特徴からモモの核かと思われる。

### SB 03

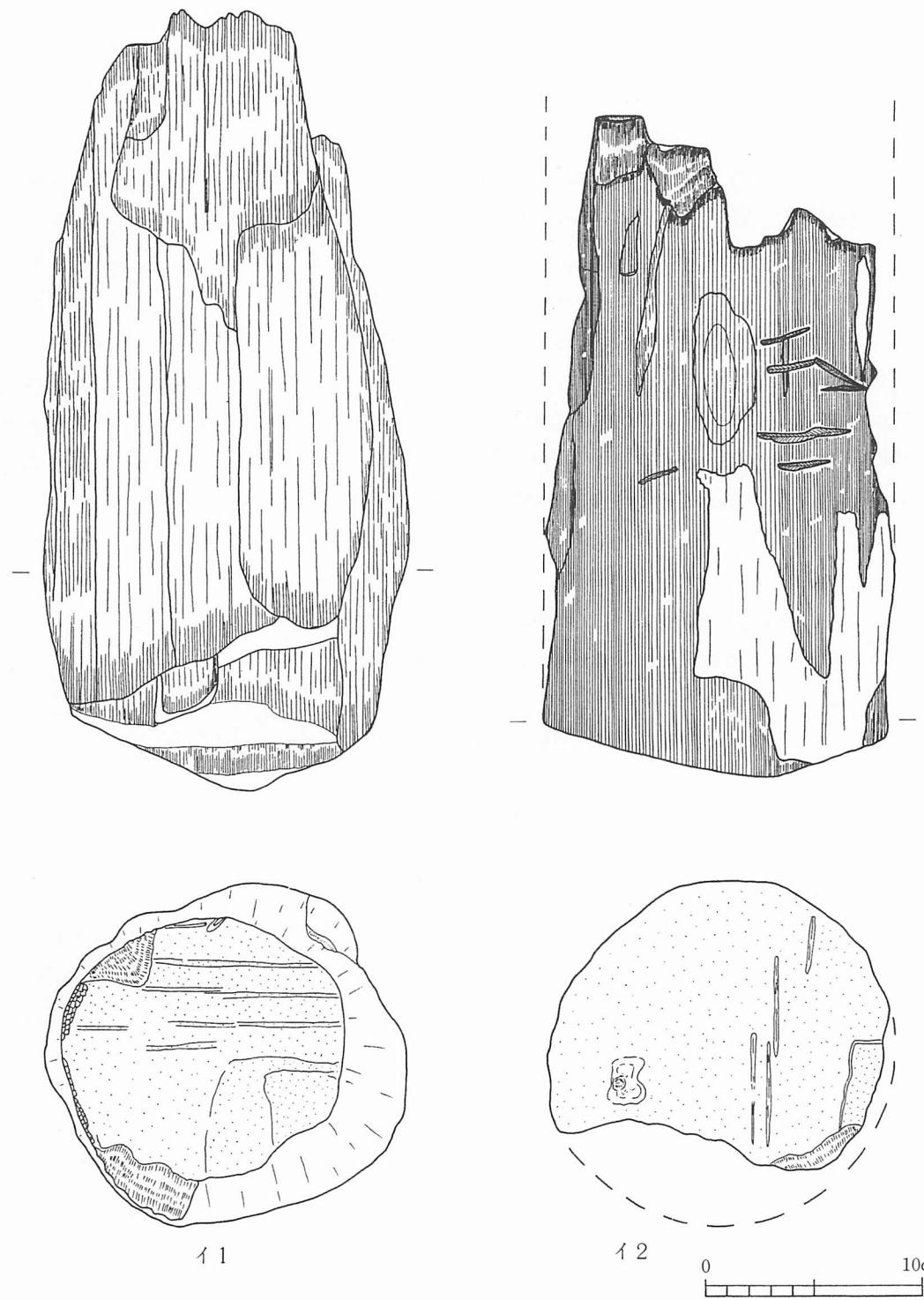
重複し合う SB 01・02の間にさらに割り込む形で SB 03が位置している。SB 01 梁行の北側柱列から南に約 120 cm 離れて同じく梁長 4.2 m の北側柱列を検出したが、桁行は北から 2 間分を確認したにとどまった。SB 01・02 の建物の主軸が N - 16° - W であるのに対し、SB 03 は N - 14° - W とわずかに北方向へ振っており、梁行は北側柱列で西より 210 cm、210 cm、桁行は東側柱列で北より 230 cm、210 cm、西側柱列で北より 210 cm、210 cm を測る。柱穴掘り形は方形で、大きさは平均して 45 × 45 cm と 65 × 65 cm のものがある。現段階では建物全体の規模はわからないが、出土土器の整理から比較的短い期間での建物の移行が判明しており、ほぼ同一地点に主軸規制の働いた 3 棟の建物が建てられている点で判断するならば、SB 03 も 梁間 2 間 (4.2 m) × 桁行 3 間 (7 m 前後) の南北棟となる可能性が高いと考えられる。

出土遺物はほとんど確認できなかったが、柱穴ロ4の柱痕部分の穴底から 15 cm 程度の礫を検出している。

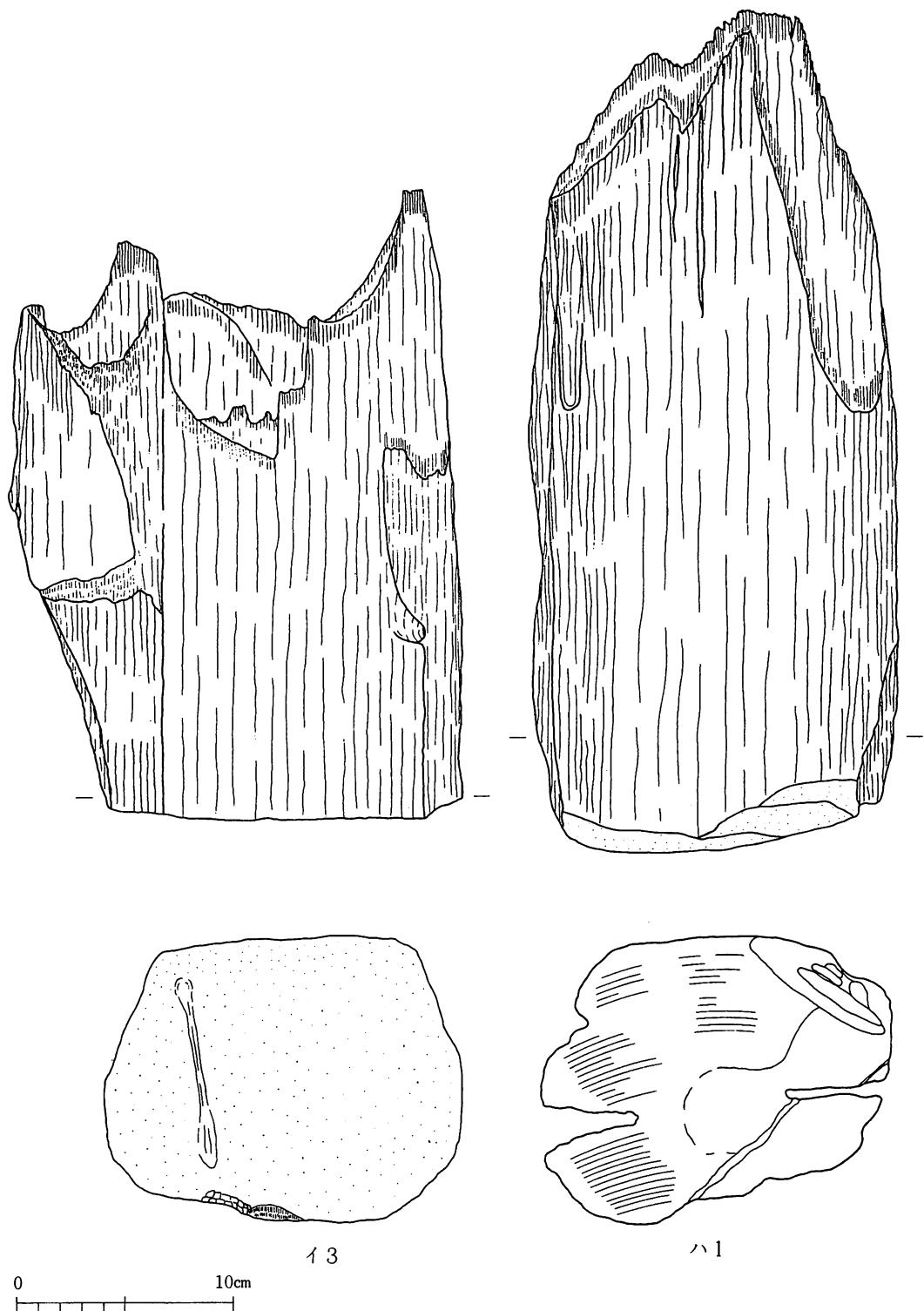
以上、3 棟の掘立柱建物は各柱穴間の切り合い関係及び出土遺物の検討から、SB 01 → SB 02 → SB 03 の順に変遷をたどっていることが判明している。

### (3) 柱列 [SA 01・02]

I 5～J 5 区間東端で検出された径 50 cm 前後を測る円形の P 1～P 4 間及び F 4～G 4 区間西端の径平均 45 cm を測り、方形を呈する P 5～P 7 間は、各柱穴が一線に並んでおり、それぞれの主軸方向が N - 17° - W と建物の主軸に近似していることから、調査区外で検出できなかった別の建物の一部あるいは板塀となる可能性をもっている。特に P 7 からは酸化焰焼成により橙褐色を呈した、内面返りをもつ蓋 (第 9 図 11) が出土しており、P 5 からさらに柱列が西方向にのびると想定した場合、SB 02 梁行北側柱列のライン上にのっている点も注目される。

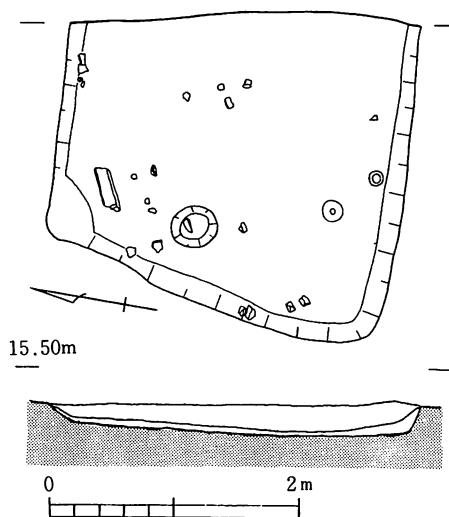


第13図 SB02柱根実測図1 (1/3)



第14図 SB02柱根実測図2 (1/3)

## (4) 土坑 [SK01]



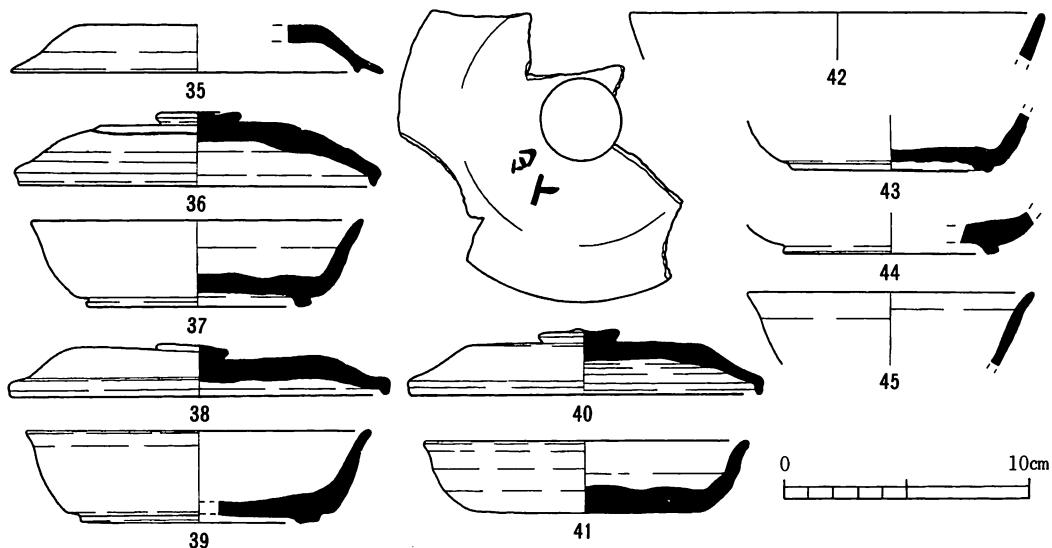
第15図 SK01実測図 (1/60)

17図) を検出している。35は内面返りをもった壊蓋口縁部片。36・40は天井部に平坦面をもつ平笠形、38は扁平なものというように器形区分できるが、口径値は14～15cmの間に分布している。36は粘土面に正位の状態で完形の出土であった。つまみ径3.4cm、口径14.3cm、器高2.9cm、重量272gを測る。口縁端部は短く鋭く屈曲し、断面三角形を呈する。内面中央部には墨痕が認められる。40はつまみ径3.2cm、口径14.1cm、器高2.7cmを測り、天井部外面にはかすかではあるが、二文字程度の墨書、内面中央には墨痕が残っている。38もほぼ完形に近いもの

G6区内で検出された土坑であり、調査区東側壁面に遺構未検出部分を遮られる形となった。平面プランは判然としないが、南北径280cmを測り、未検出の東西径も同程度か若干長くなると思われる。地面を深さ25cm前後で隅丸方形に掘り下げ、厚さ10～20cmの青灰色粘土を貼り付けて、そのまま壁面としているようである。この粘土及び埋土である暗灰褐色土には全体的に少量の炭化物が混入していたが、焼土面や高温に伴う変色面は認められなかった。

また、土坑内西側部分には径35cm、深さ18cmの円形ピットも検出している。

出土遺物は粘土面で須恵器(第16図)及び長軸39cm、短軸15cmを測る石、ピット内から砥石(第



第16図 SK01出土土器実測図 (1/3)

で、つまみ径 2.9 cm、口径 15.1 cm、器高 1.5 cm を測る。以上の 3 点はいずれも扁平なボタン形つまみをもち、色調が青灰色、胎土・焼成は砂粒・長石を多く含み、堅緻である。

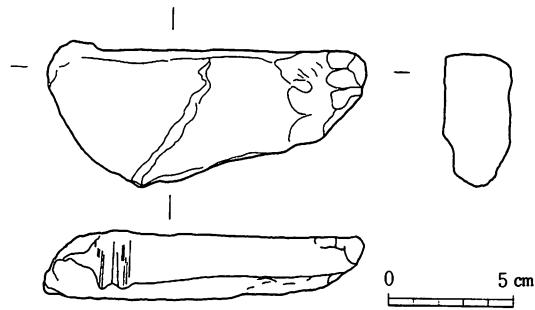
37・39・43・44 は有台坏で、全形の知られる 37・39 から法量差はあるが、口径に対して器高が低く、高台径が大きい扁平な器形を抽出できる。37 は高台径 8.8 cm、口径 13.4 cm、器高 3.5 cm を、39 は高台径 8.2 cm、口径 14 cm、器高 3.4 cm をそれぞれ測る。37・43 の底部外面にはヘラ切りの渦状痕が明瞭に残っている。色調・胎土・焼成は前述坏蓋と同様であるが、断面内部の酸化層が紫色あるいはクリーム色を呈するものも認められる。41 は無台坏で口径 13.1 cm、底径 9 cm、器高 2.9 cm を測り、扁平な器形は先の有台坏に類似している。口縁部内面の一部には墨痕が認められる。

第17図は SK 01 内ピットから出土した砥石で、平滑な 3 面に研ぎ面が認められる。なかでも長軸 10.5 cm、短軸 1.5 ~ 2 cm を測る側面の摩滅が顕著で、短軸方向にくぼみが生じている。

遺構の性格に関しては、ピット内からの砥石や隣接する配石遺構 (SK 01) 内出土のフイゴ羽口 (第27図 263) などから鍛冶関連の施設といった可能性も指摘できるが、遺構自体部分的な検出であり不明な点が多い。今後の資料の増加をまって総合的な判断を下していきたい。時期は伴出した土器の整理から、SB 02 と併存していたものと考えられる。

##### (5) 配石遺構 [SK 01]

検出された位置は F 4 ~ F 6 区間、調査区北壁際である。(第11図) 湧き水対策のためバックホーによって壁際を深く掘り込んだ時に取り上げられた部分が多いが、遺存状態の良好な F 5・6 区境の拡幅から、約 1.5 m 幅で SK 01 や SB 01 ~ 03 梁行方向に対応した東西方向に走る帯状の配石であると思われる。その範囲内には径 10 cm 前後の礫や人頭大の石が大半を占めるが、須恵器・土師器片も相当量含んでおり、その他円面鏡、フイゴの羽口も 1 点ずつ出土している。遺構としての確認が遅れたため、出土遺物は一括して掲載していない。また、その時期・性格については不明な点が多いが、G 6 区間で隣接する前述 SK 01 との関係には留意すべきであろう。



第17図 砥石実測図 (1/3)

## 第5章 遺物

### 第1節 古代の遺物

#### (1) 須恵器

今回の調査で出土した須恵器の器種には壺・甕・壺・瓶などがあるが、出土量の多い壺・蓋は原則的に口縁部現存1/4以上のものを実測し、その他の器種を含め現存量がそれ以下のものでも必要に応じて図化した。また、青灰色を呈する須恵器の他に形態や成形技法等は同じであるが、焼成や色調の異なる一群の土器も須恵器として扱っている。

さらに、同じ器種の分類に際しては、巻末の土器観察表に掲載した計測値を基に行った分析（多変量解析）結果等から器形を中心に大きく分類し、胎土観察や調整技法などの特徴から細分化した。

#### 壺蓋A類（第7図11、第10図29、第16図35、第18図46～50・52）

内面返りをもち、回転ヘラ削りが施された天井部外面には擬宝珠形のつまみがつく一群で、今回確認できた壺蓋のなかでは最も古い形態をとる。口径11～15cmの間に分布し、天井部が丸みを帯びたものから口径が大きくなるにつれ扁平化する傾向がみられる。29・46は内面に残る痕から転用硯としての使用が考えられる。

#### 壺蓋B1類（第9図19、第10図27、第18図54～64・70～76）

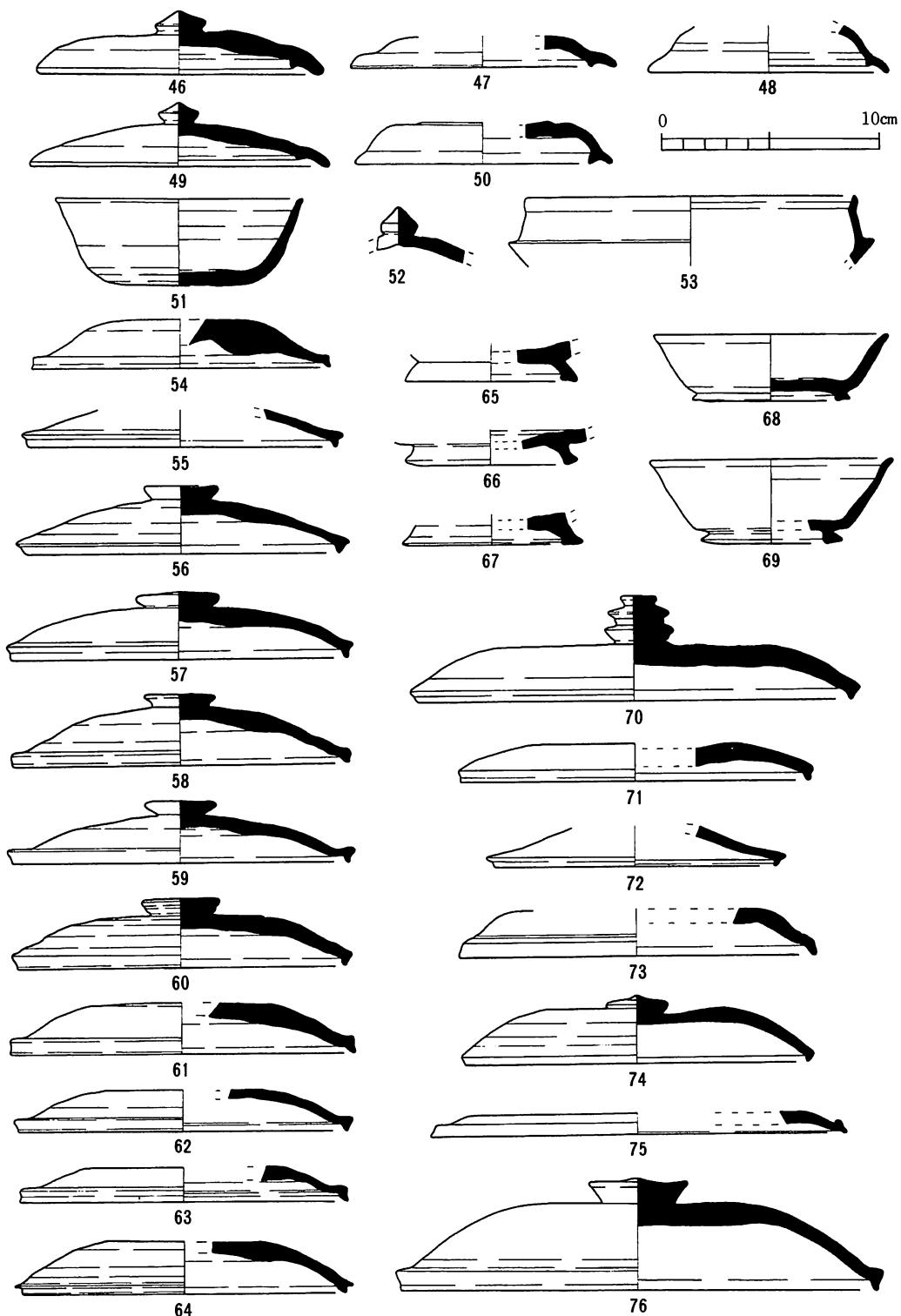
形態的にまとまっており、出土量も多い。器形は天井部からなだらかに口縁端部へ移行する笠形と天井部が平坦面をもつ平笠形に分かれるが、ここでは口径分布と胎土によって次の4つに細分した。B1a類（56～64他）のつまみは扁平なボタン形で径3cm前後、器高、口径はそれぞれ2.9～3.2cm、14.6～15.8cmの間に分布し、1/2程度をヘラ削りされた天井部外面には降灰しているものが多い。口縁端部は春木3号窯にみられる独特の断面三角形を呈している。色調は青灰色であるが、割れ口断面内部の酸化層はしっとりとしたクリーム色であり、胎土は砂粒を多く含み、長石粒の吹き出しも認められる。B1b類（74）は1点のみの出土で、つま

み径2.8cm、口径15.7cm、器高3.1cmを測る。つまみは擬宝珠形で外面には緑色系の降灰を被る。色調は明灰白色で、胎土・焼成は壺蓋A類49に近似している。

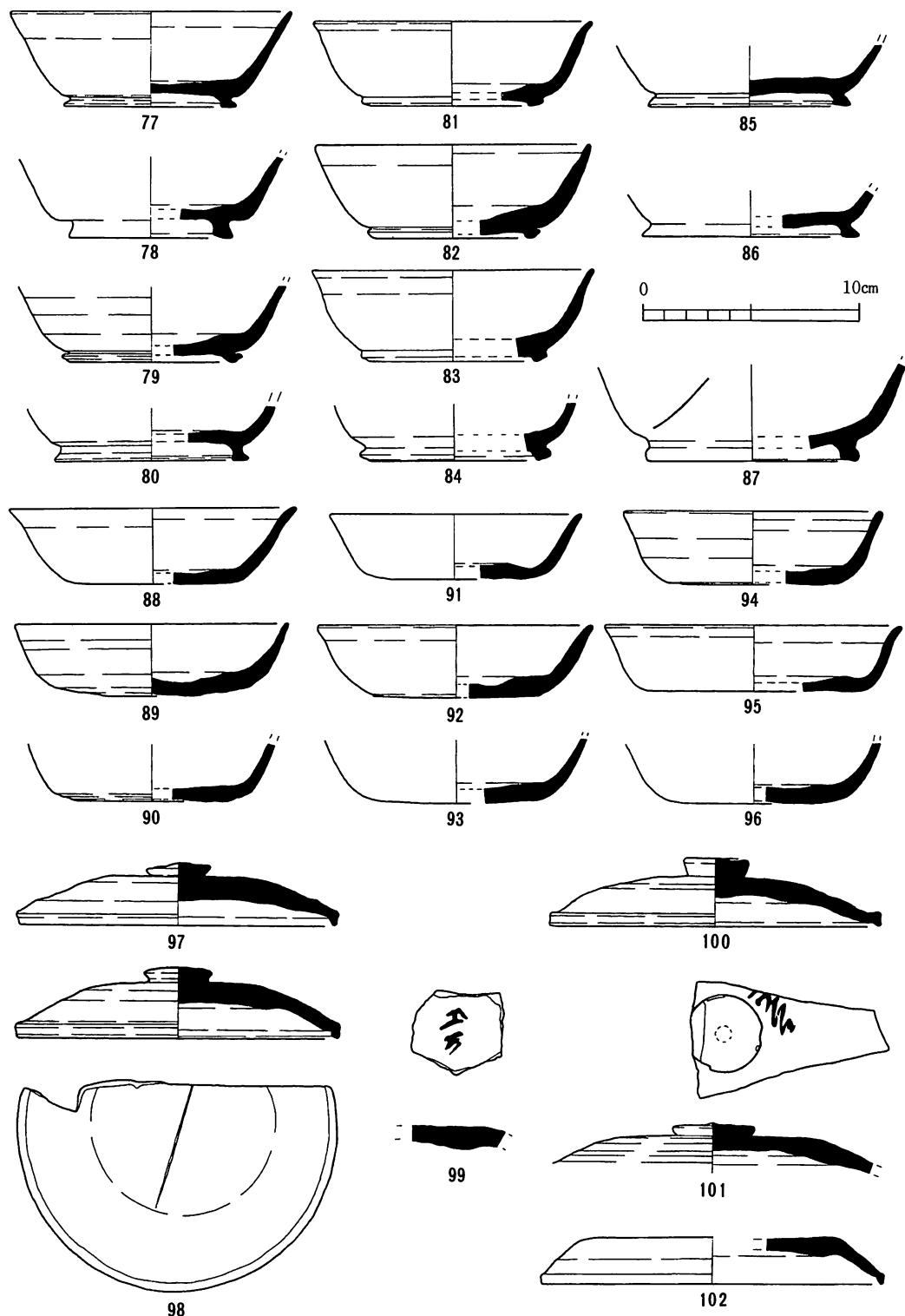
続いてB1c類（73）も1点のみであるが、明らかに胎土・焼成の異なる製品で、棒状の海綿骨片を含み、ボソボソとした質感を与える。口径16.4cmで、図示はしなかったが、同一個体と思われるボタン形のつまみ

第5表 須恵器壺蓋・標準得点による分布表

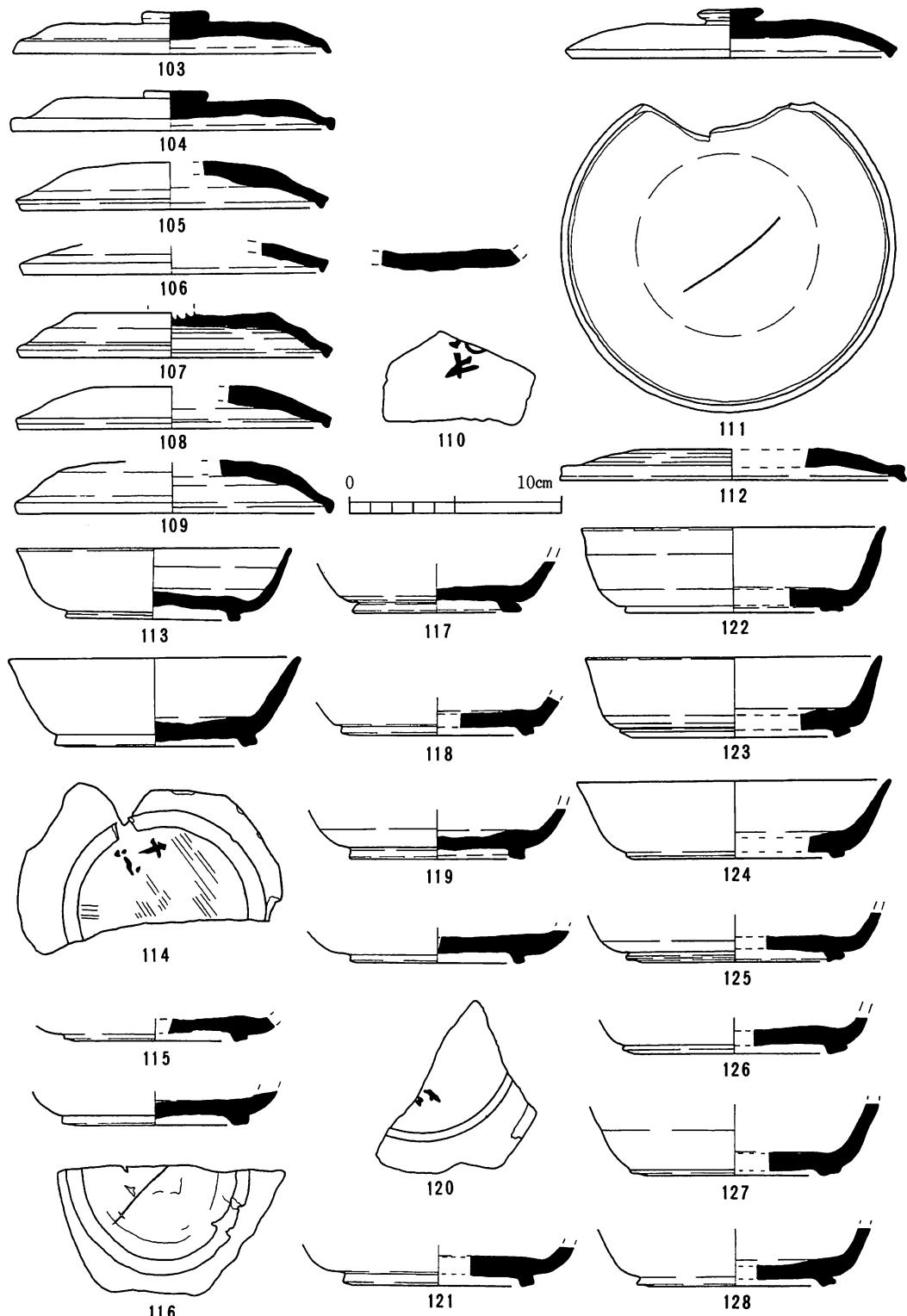
以上 / 未満	(ss) 0	10	20	30度数
9.989530 / 10.466100	-3.00:	.	.	0
10.466100 / 10.940800	-2.70:	.	.	0
10.940800 / 11.416400	-2.40:***	.	.	3
11.416400 / 11.892000	-2.10:*	.	.	1
11.892000 / 12.367600	-1.80:*	.	.	1
12.367600 / 12.843200	-1.50:***	.	.	3
12.843200 / 13.318800	-1.20:*****	.	.	10
13.318800 / 13.794500	-0.90:*****	.	.	6
13.794500 / 14.270100	-0.60:*****	.	.	18
14.270100 / 14.745700	-0.30:*****	.	.	18
14.745700 / 15.221300	0.00:*****	.	.	25
15.221300 / 15.696900	0.30:*****	.	.	6
15.696900 / 16.172500	0.60:*****	.	.	11
16.172500 / 16.648200	0.90:*	.	.	2
16.648200 / 17.123800	1.20:***	.	.	4
17.123800 / 17.599400	1.50:*	.	.	2
17.599400 / 18.075000	1.80:***	.	.	3
18.075000 / 18.550500	2.10:*	.	.	1
18.550500 / 19.026200	2.40:*	.	.	0
19.026200 / 19.501900	2.70:*	.	.	1
19.501900	3.00:*	.	.	1



第18図 須恵器実測図1 (1/3)



第19図 須恵器実測図2 (1/3)



第20図 須恵器実測図3 (1/3)

は径 3.2 cm を測る。口縁端部の屈曲は緩く、外へ開いている。

B 1 d 類は口径 20 cm 前後に分布しており、口縁端部を極端に屈曲させるもの (27・75) と前出 B 1 a 類の大形化した製品 (70・76) とにさらに分けられる。特に 70 のつまみは三段状をなす特殊なもので、下段のつまみ径 3.2 cm、つまみ高 2.3 cm、口径 20 cm、器高 4.9 cm を測る。76 は酸化焰焼成による製品で赤褐色を呈する。口径 22 cm を測り、盤につくものと思われる。

**坏蓋 B 2 類 (第 7 図 4・5、第 10 図 26、第 16 図 36・40、第 19 図 97~102、第 20 図 105~109、第 21 図 129・139)**

口径は 14 cm 代に集中しており、B 1 類と同じく出土量は多い。形態的に B 1 a 類の後出と思われる B 2 a 類 (4・6・36・40・97・98・100 他) の他は全形を知り得る製品がなく、便宜的に口径によって B 2 b 類 (129~139 他) と B 2 c 類 (101・102) に区分した。B 2 a 類はつまみ径 3 cm 前後、器高、口径はそれぞれ 2.7 ~ 3.2 cm、14.1 ~ 15.3 cm の間に分布し、B 1 a 類からの連続的な推移傾向を示しているが、胎土及び割れ口断面観察ではまとまった特徴をもたない。口縁形態においても端部の屈曲はさほど鋭くはなく、断面もやや丸みをもった三角形となっている。その他の特徴としては、天井部外面に墨書をもつもの (40・129) や内面に墨痕をのこすものが認められる。B 2 b 類は基本的に器高が低く扁平で、口縁端部が外屈する器形であるが、胎土観察では、今回確認できたほとんどのタイプがそろっており、さらに細分化していくと考えられる。B 2 c 類の出土は少ないが、口径 16 cm 前後に分布すると思われる。101 は径 3.8 cm を測るボタン形のつまみをもち、ヘラ削りされた天井部外面の平坦部に墨書をもつ。色調・胎土は割れ口断面も含めて青灰色で精良。

**坏蓋 C 類 (第 7 図 6、第 16 図 38、第 20 図 103・104・111・112)**

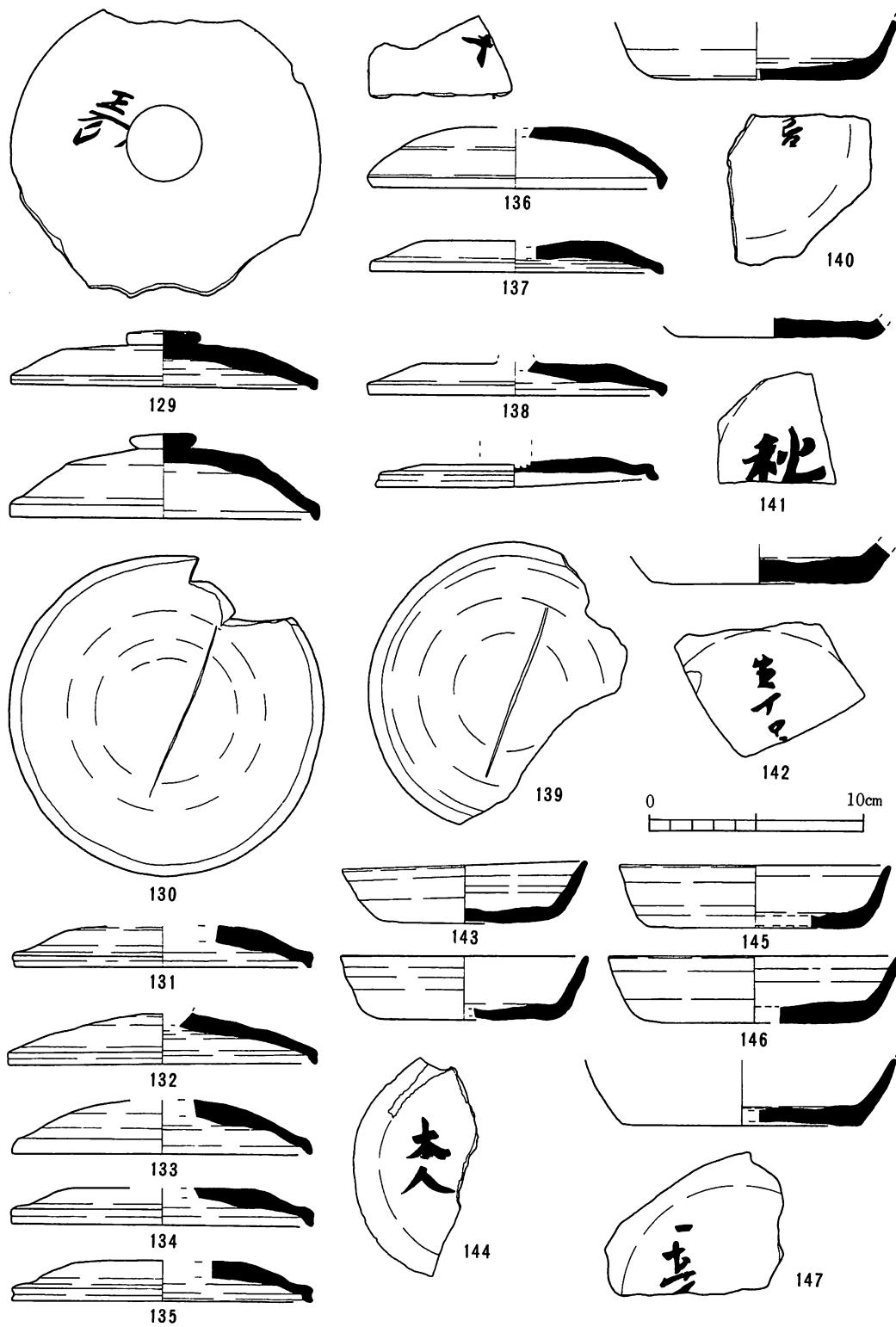
ボタン形のつまみも体部も扁平なタイプで、つまみ径 3 cm 前後、口径 14.8 ~ 16 cm、器高 1.8 ~ 2.2 cm の間に分布している。色調は割れ口断面も含め淡青灰色から青灰色、砂粒・長石を通有量含んでおり、焼成は堅緻。

**坏蓋 D 類 (第 7 図 1、第 22 図 148~152・155)**

擬宝珠形に近いが上面が平坦なボタン形のつまみをもち、口縁端部を短く外屈させるタイプで、口径により二つに分類した。D 1 類 (1・151・152) のうち、全形を知り得る 151 はつまみ径 2.8 cm、口径 18.1 cm、器高 3.7 cm を測り、内面には部分的ではあるが墨書が認められる。1 と 152 は同一個体と思われ、内面全体に墨痕及び部分的な墨書が残る。いずれも割れ口をみると還元層に挟まれた酸化部分が何層も縞状に凝縮したような断面を呈している。これに対して D 2 類 (148~150・155) は乾いた質感で淡青灰色を呈し、砂粒・長石を多く含むものである。つまみ径 2.2 ~ 2.8 cm、器高 2.2 ~ 2.9 cm、口径 13 ~ 14 cm の間に分布している。また、150・155 の内面には確認でき、特に 155 の場合は「玉万呂」と読める。

**坏蓋 E 類 (第 7 図 2・3、第 16 図 40、第 22 図 154・156・157・159~165)**

口縁端部を段状に屈曲させ、先端を浅く折り曲げるものと、強く巻き込む感じで内屈させるものとがあるが、ここでは口径によって 3 区分した。E 1 類 (2・3・154・156・157) は口径 12 cm 以下の小形の製品で、転用硯として使用されたものが多いようである。E 2 類 (40・159~164)



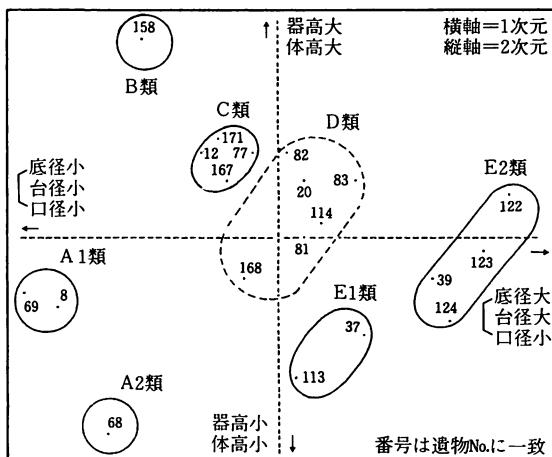
第21図 須恵器実測図4 (1/3)

は口径14~16cmの間に分布するものをまとめたが、全形を知り得るものはない。E3類(165)は口径17.8cmを測り、全面にわたって入念なナデ調整が施されている。

#### 有台坏

第6表は今回図化した有台坏のうち、高台径・底径・口径・台高・体高・器高・角度が計測可能であった20点を分析(主成分分析)し、その結果を2次元散分図としてプロットしたものである。横軸には主な因子である底径・高台径・口径(第1主成分)が、縦軸には体高・器高(第2主成分)が抽出されている。これに胎土・焼成の特徴などから次の7つに分類した。

第6表 須恵器有台坏・主成分分析による二次元散布



#### 有台坏A類 (第7図8、第10図32、第18図68・69)

胎土・焼成ともに堅緻で精良。口径11cm前後、高台径6.6~6.8cm前後に分布する小形の一群。底部外面には入念なナデ調整が施され、外展する断面方形の低い高台がつく。器高差により3.8cm代に分布する8・32・69と3.1cmの68に細分できる。

#### 有台坏B類 (第22図158)

1点のみの出土で、口径10.1cm、高台径7cm、器高4.5cmを測る。口径に対して器高の割合が高く、体部角度82度とやや直立気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反し端部を丸く収めている。底部外面には「-」印のヘラ書きとかすかな墨書きが残っている。

#### 有台坏C類 (第7図12、第19図77~80、第23図167・171・172)

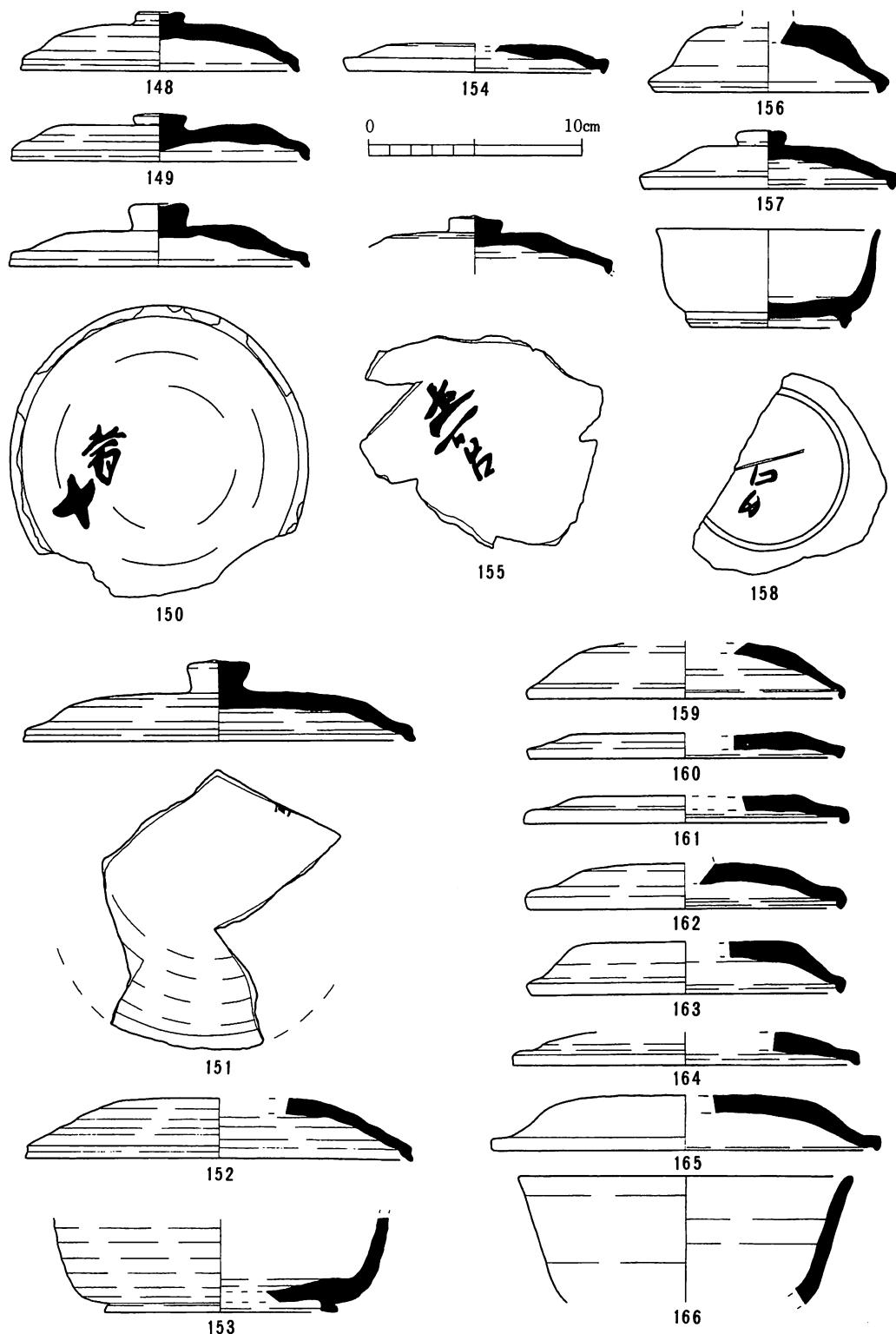
底部と体部との境が丸みを帯びて直線的に立ち上がる器形。口径11.4~13.1cm、高台径6.7~8.1cm、器高3.7~4cmの間に分布する。高台形態や胎土・焼成の違いによって先行的要素をもつC1類(12・77他)と後出的なC2類(167・171他)に分けられる。C1類は砂粒や長石を多く含む胎土で割れ口断面内部の酸化層がクリーム色を呈するものが多い。ふんばりの強い高台の貼り付けや面取りが丁寧でしっかりしている。C2類の体部の立ち上がりはC1類よりもやや強くなっている。167の底部外面には「田地」の田と思われる右側部分の墨書きが残存している。

#### 有台坏D類 (第9図20、第10図28、第19図81~84、第20図114・115・117・121・127・128、第23図168・173)

底部には高さ4mm前後の外展する高台がつき、口縁部形態にはやや外反するものと直線的に立ち上がる体部からそのまま丸く収まるものとがある。口径12.2~13.2cm、高台径8~9.2cm、器高3.3~4cmの間にばらつきをもって分布しており、資料の増加によってさらに細分できると思われる。

#### 有台坏E類 (第16図37・39・43、第20図113・116・118・119・122~126)

口径に対して器高が低く、高台径が大きい一群で、今回抽出できた器形のなかでは最も扁平



第22図 須恵器実測図5 (1/3)

なものである。器としてのサイズの違いにより、E1類 (37・43・113他) と E2類 (39・122～124他) に細分される。E1類は口径13cm代、高台径8.5～9.4cm、器高2.9～3.1cmの間に分布する。色調は青灰色系、断面が紫色を呈するものが多く、胎土は砂粒を比較的多く含んで長石の吹き出しが認められる。E2類は口径14cm代、高台径10.2～11cm、器高3.3～3.6cmの間に分布し、E1類よりもひとまわり大きくなっている。

#### 有台坏F類 (第18図65～67)

底部のみで全形を知り得るものはないが、高台径7cm代で外に大きくふんばる独特の形態から、ひとつのまとまりとして区分した。つくりは丁寧で、胎土・焼成は前出有台坏A類やC1類に類似している。

#### 有台坏G類 (第19図85～87、第22図153・166、第23図169・170)

これも断片的な資料の出土でしかないが、高台径10cm代で深身の器形が予想される一群。胎土・焼成の観察などにより、G1類 (85～87) と G2類 (153・166・169・170) に区分した。G1類は堅緻で胎土も先行的な特徴を示している。G2類も砂粒や長石を含む胎土であるが、軟質といった印象を与えるものが多く、153・169のように腰が張り、口径15.4cmを測る166のように直線的にのびる体部をもつ器形になると思われる。

#### 無台坏

第7表は今回図化した無台坏のうち、底径・口径・器高・角度が計測可能であった17点を分析（主成分分析）し、その結果を2次元散布図としてプロットしたものである。横軸には主な因子である底径・口径・器高（第1主成分）が、縦軸には角度（第2主成分）<sup>(4)</sup>が抽出されている。これに胎土・焼成の特徴などを加え、次の5つに分類した。

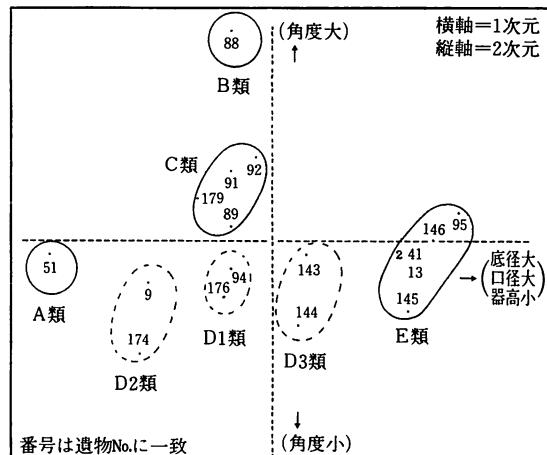
#### 無台坏A類 (第18図51)

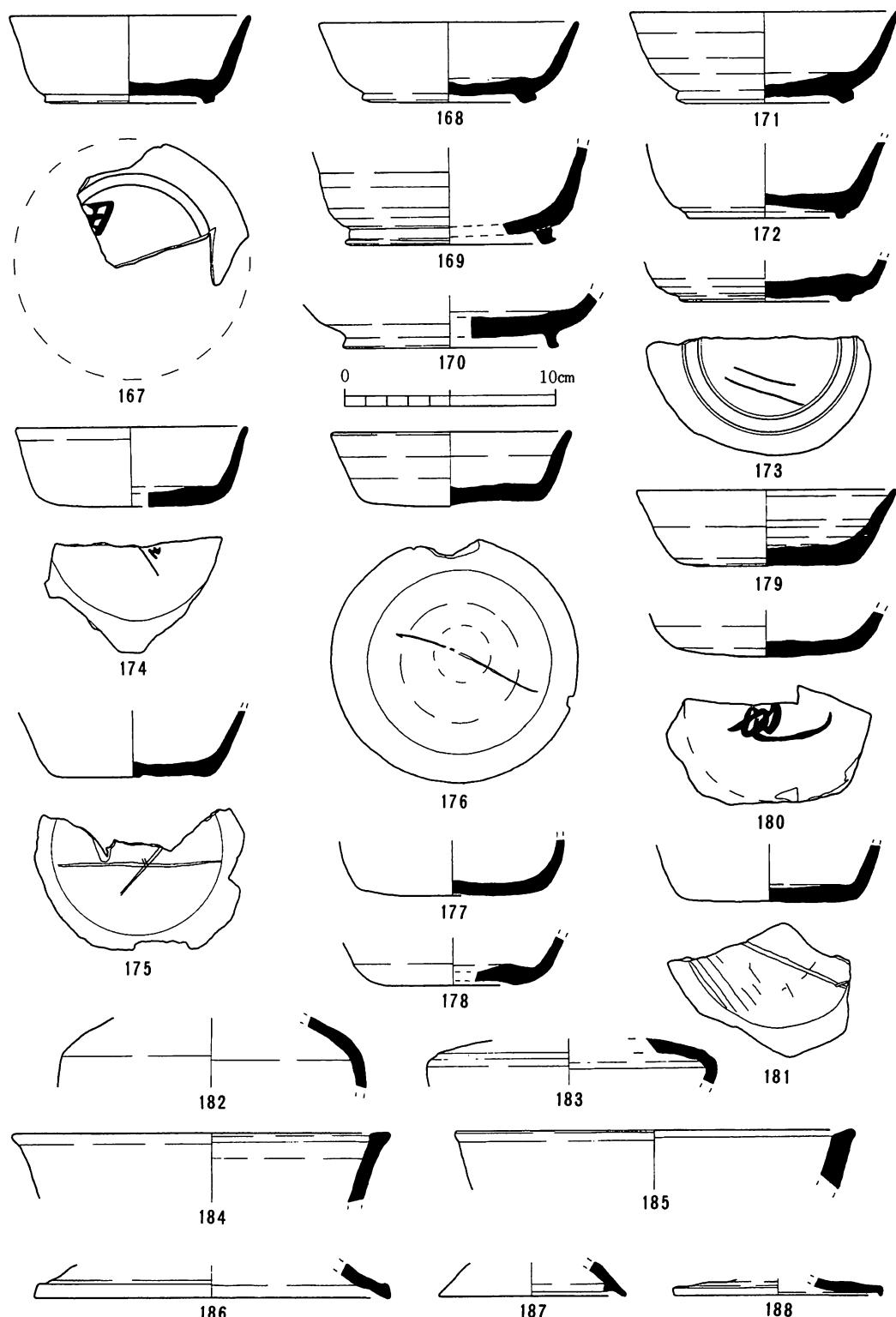
1点のみの出土であるが、抽出できた器形のなかでは口径に対する底径の割合が最も小さく、器高の高い一群が予想される。51は口径11.6cm、底径5.3cm、器高4cmを測る。ヘラ切りの渦状痕を残す底部外面から丸みをもって体部へと移り、直線的にのびる。外面は降灰を被り、内面は明灰白色を呈する。胎土・焼成は砂粒を含むが堅緻で精良である。

#### 無台坏B類 (第19図88)

これも1点のみの確認で、最も体部の外傾化が進んだ器形である。88は口径13.3cm、底径6.8cm、器高3.5cmを測り、口径に比してやや小さめの底部から大きく開くように体部が立ち上がり口縁部が外反する。くすんだ灰色を呈しており、胎土には砂粒や長石を多く含む。

第7表 無台坏主成分分析による2次元散布





第23図 須恵器実測図6 (1/3)

### 無台杯C類 (第19図89~92・179)

口径 11.9~12.9cm、底径 6.6~7cm、器高 3~3.3cm の間に分布し、底部と体部の境が不明瞭で、丸みをもって立ち上がり、そのまま外傾する器形。色調は割れ口断面も含めて淡青灰色を呈し、胎土は白色砂粒や長石を通有量から多めに含む。

### 無台杯D類 (第7図9、第19図94~96、第21図143~144、第23図174~178・180・181)

口径 11~12cm の間に分布しており、器高によって D1類 (94~176 他)、D2類 (9~174 他)、D3類 (143~144 他) に細分した。D1類は器高 3.4~3.5cm で細部形態及び胎土・焼成の観察では砂粒や長石を通有量含む共通性はあるが、割れ口断面が紫色を呈し堅緻なものから軟質な感じで黄灰色ないし赤灰色を呈する還元不良のものまで多様性を示す。D2類の胎土も半透明の長石や砂粒を多く含むが、黄灰色を呈するものや焼きの甘いものが多い。器高が 3.5~3.6cm とやや高めであり、丸みを帯びた底部から直線的に立ち上がる。D3類は器高 2.7~2.9cm の間に分布する低い器形で、胎土・焼成は堅緻で割れ口断面が紫色ないしクリーム色を呈する特徴をもつ。143 の内面は底部から口縁部にいたるまで、墨痕が明瞭に残っている転用硯である。また、144 の底部外面には判読できない二文字の墨書が書かれている。

### 無台杯E類 (第7図13、第16図41、第19図95、第21図140~145~147)

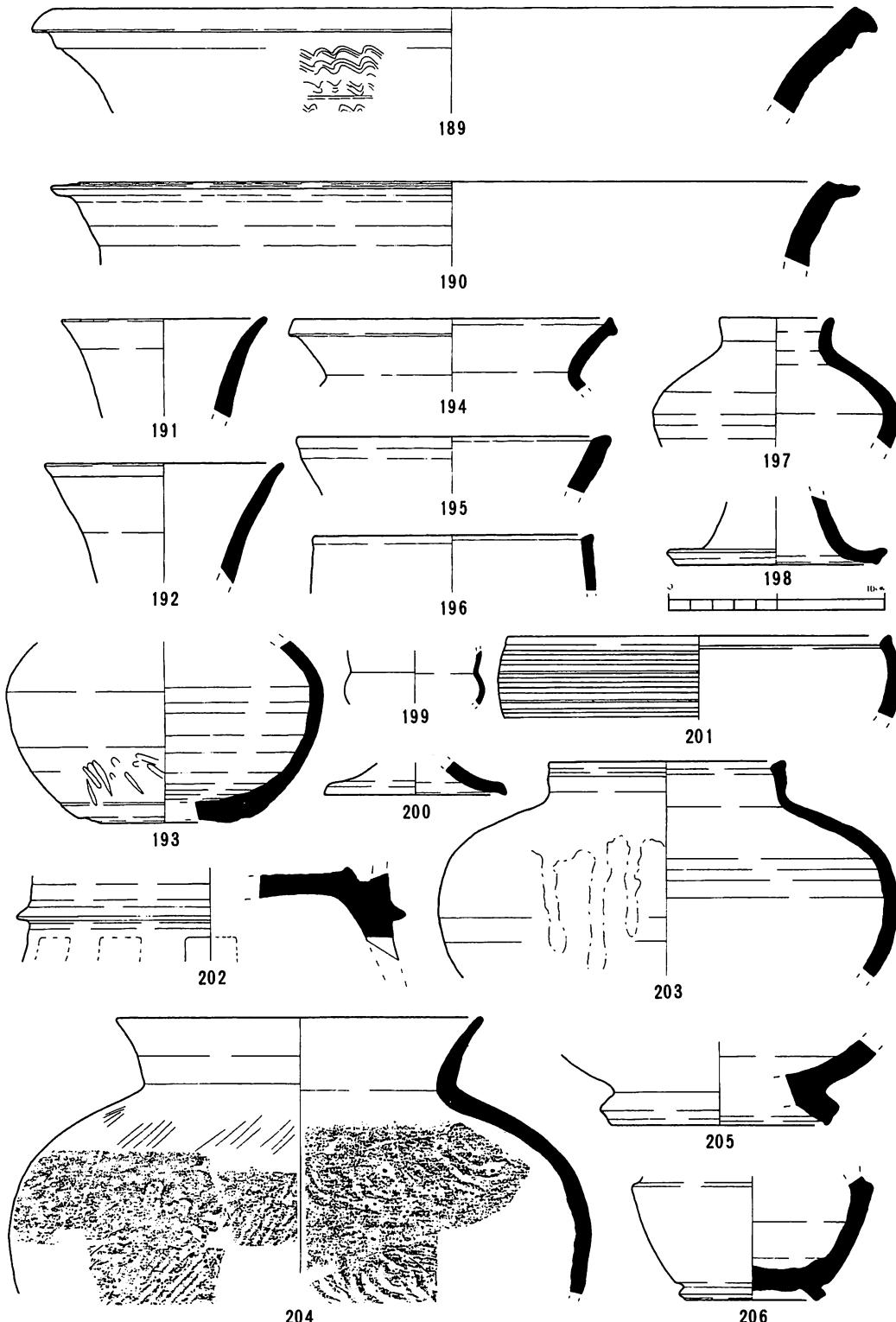
口径 (12.2~13.8cm) と底径 (9~10cm) との差が他の器形と比して小さく、器高 (2.7~3.1cm) が低い一群である。胎土は長石や砂粒を通有量から相当量含む共通性をもつが、堅緻で青灰色~暗青灰色を呈し、口縁端部が外反するものと焼きが軟質で淡青灰色を呈し、直線的にのびるのに分かれるようである。また、底部外面に墨書をもつ個体が一定量認められるのも特徴である。

### 甕 (第24図189~190、第27図264)

局部的な破片が多く、ここでは口縁部片を 3 点図示した。189 は口径 37.6cm を測る中形の甕である。外反した口縁端部の内外面をつまみだすように成形されており、その下方に一条の突帯と三条の波状文、さらに凹線と波状文の順に加飾してあるのが認められる。190 も口径 35cm を測る中形甕で、口縁端部をやや長く外屈させてある。今回出土の須恵器のなかでは量的に少ない海綿骨片を含む胎土が特徴的である。264 は口径 57cm を測る大形甕で、やや肥厚した幅広の縁帯をなし、内面にも稜をもつ。頸部には波状文が巡っていると思われる。長石を多く含み、割れ口断面がクリーム色の酸化層を呈する特徴をもつ。

### 壺・瓶類 (第23図183~185、第24図191~200・203~206)

壺・瓶も前出甕と同様に口縁から体部へと続く資料が少ない。その中で 197~204 はそれぞれ口径 5.2cm、17cm を測る短頸壺で、肩の張りの弱い球形の体部が復元できる。口径 11cm を測る 203 も短頸の口縁部が立ち上がる壺で、降灰を被った球形の体部下半から、205 のように外展し、断面形が内から外へ向け斜めになる高台がつくと思われる。193 は不定型な平底で、底側部に削り調整が加えられている。胎土の類似した 191~192 のような筒状の口頸部を取り付けた長頸壺となる可能性がある。



第24図 須恵器実測図7 (1/3)

その他（第23図 182・183・186～188、第24図 201）

天井部が平坦で、直角気味に折れる口縁部をもつ 183 や扁平な器形で口径 9.6 cm を測る 188 などは壺・瓶類に伴う蓋として扱った。201 は口径 17.4 cm を測る鉄鉢で内湾気味に立ち上がる深い口縁部をもつ。

### （2）円面硯（第24図 202）

F 6 区の S X 0 1 内から出土したもので、小片のため全形を知り得ないが、硯部は復元面径 17 cm 前後を測る有堤式である。台脚部との境に突帶を有し、台側面には長方形の透し孔がいくつか入ると思われる。水平な硯面には墨痕が認められ、海を形成する内堤と外堤では、欠損している外堤の方がやや高くつくられていたものと推定される。色調が青灰色、胎土・焼成は砂粒や長石を含み堅緻で、断面が紫色を呈する点は、本遺跡出土須恵器の先行的要素をもつ一群の特徴と同様である。

### （3）土師器

#### 甕（第25・26図）

本遺跡出土土師器の主体をなす甕であるが、そのほとんどが小さな破片であり、全形を知り得るものは少ない。ここでは図化可能であった口縁部の形態及び胎土・調整技法などをもとにして、次の 3 種に分類して報告する。なお、現段階での大きさの基準として便宜上、口径 15 cm 以下を小形、15～20 cm を中形、20 cm 以上を大形品として扱った。

#### 甕A類（第25図 207～211・213～215、第26図 228～230）

口縁部がくの字状に外反し、そのまま口唇部が丸く収まる一群。胎土に海綿骨片を含むものが多いが、長石や雲母を特徴的に含む個体も一定量認められる。器形としては 213 のように最大径が体部上半にあるものが多いようである。口縁部内外面を横ナデ、体部外面を縦位のハケ目、内面が横位のハケ目調整を施す場合が主流を占めており、大きさは中形のものが多い。

#### 甕B類（第25図 216、第26図 218～224・227）

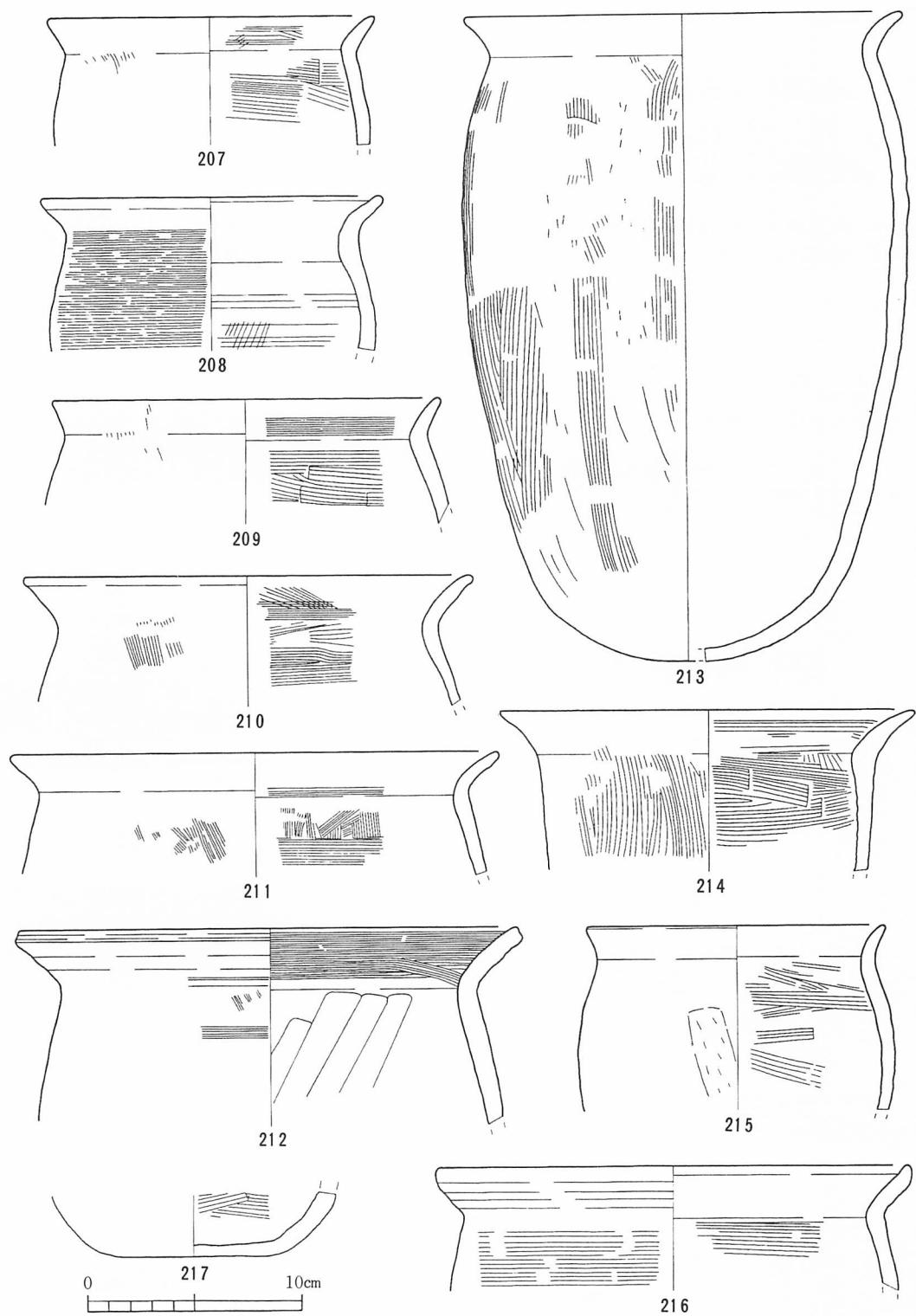
口縁部がくの字状に外反し、口唇部がさらに上方につまみ出される一群で、胎土に雲母、長石を特徴的に含んでいる。口縁部内外面を横ナデ、体部上半をカキ目ないし縦位のハケ目で調整するものが多い。器肉は全体的に薄く、中形と大形に分かれる。

#### 甕C類（第25図 212、第26図 226）

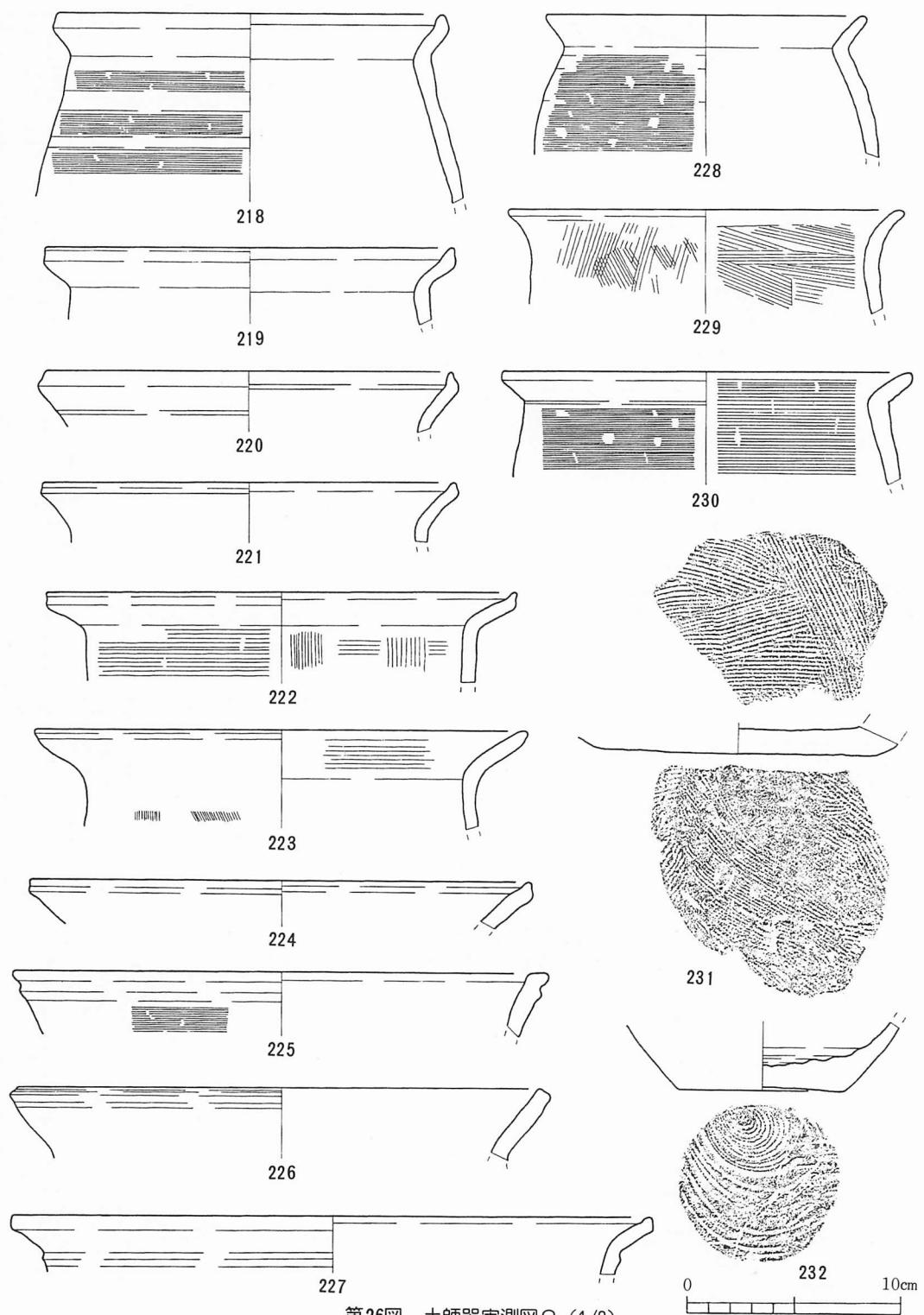
くの字状に外反した口縁から続く口唇部が角ばる形態で、量的には少ない。器肉は厚く、A・B 類に顕著であった胎土中の海綿骨片、雲母を含まない。212 は口縁部外面を横ナデ、内面をハケ目、体部外面を横位のハケ目、内面を斜位のヘラなでつけによる調整が施される大形品である。

#### 黒色赤彩土師器（第27図 233～238・242）

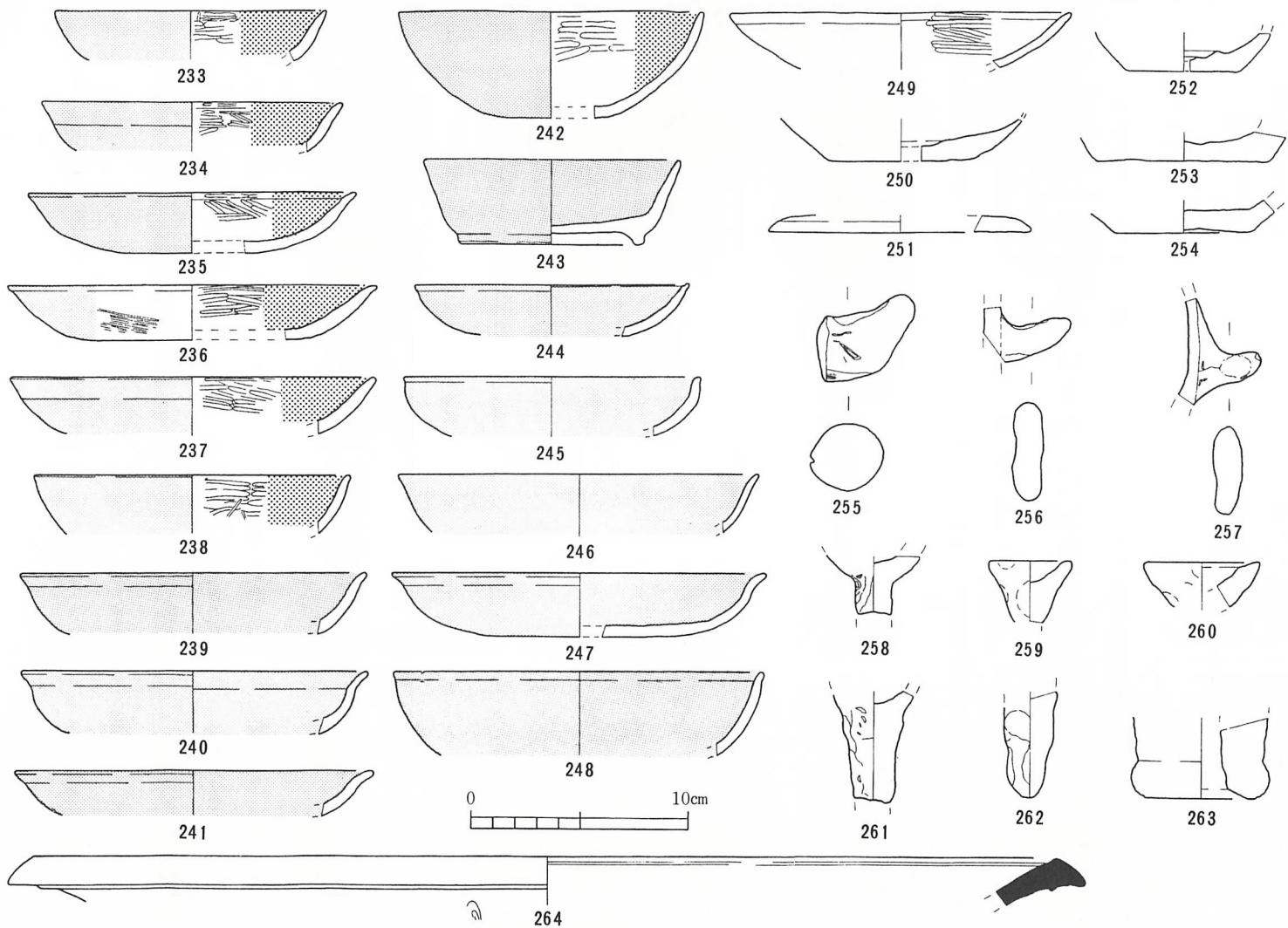
内面を黒色処理、外面赤彩を施した土師器で、口径 14 cm を測る碗の他は、皿状に近い形態を示す壺で占められている。いずれも体部内面には横位あるいは斜位のヘラミガキ調整が明瞭に施される。



第25図 土師器実測図1 (1/3)



第26図 土師器実測図2 (1/3)



第27図 土師器実測図3 (1/3)

## 赤彩土師器（第27図 239～241・243～243）

内外面に赤色顔料を塗布した土師器で、口径 11.9 cm、高台径 8.2 cm、器高 3.9 cm を測る有台坏（243）の他は、口径によって二分される坏であり、黒色赤彩と同様低平な器形をなす。

## (4) その他の遺物

## 製塩土器（第27図 258～262）

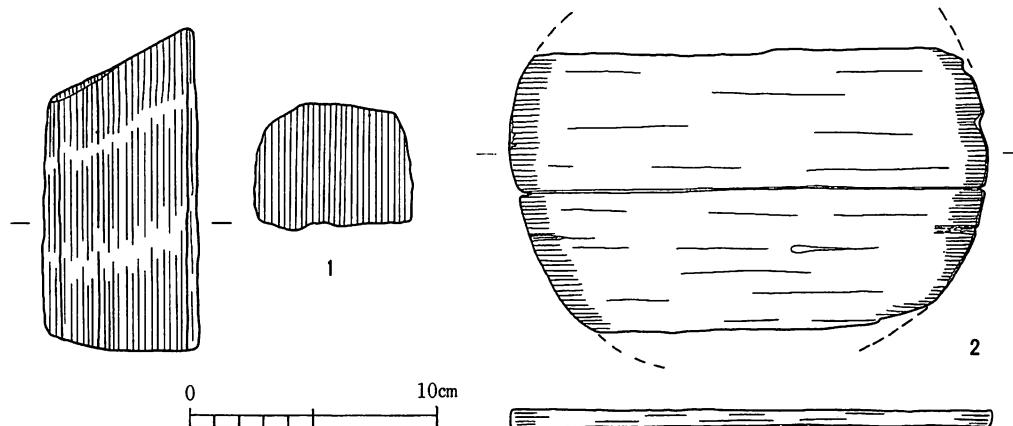
出土点数は少ないが、棒状脚 5 点が認められる。脚部上位の形態については不明であるが、内外面ともに指頭によるナデとオサエ調整痕が残る。胎土は砂粒や海綿骨片を含んでいる。

## フィゴ羽口（第27図 263）

F 5 区の S X 0 1 から出土したもので、全形を知り得る資料ではないが、口径 6.5 cm 前後を測る。外面は高熱のため全体がガラス化している。胎土はワラ状纖維や 2 mm 前後の砂粒を含む粗いものである。現存量 45 g。

## 木製品（第28図 2）

J 5 区包含層から出土した曲物底板の断片で、復元径は 18.8 cm、厚さ 0.7 cm を測る。



第28図 木製品実測図 (1/3)

註 (1) 浜岡賢太郎・嵯峨井 亮・橋本 澄夫・吉岡 康暢「能登鳥屋古窯跡群の調査」『石川考古学研究会会誌』第 9 号 1975

(2) 木立雅朗氏の教示により、本遺跡出土品ほど明瞭な形態を示してはいないが、段状を呈するつまみについては、能美窯跡群・和氣後山谷 2 号窯や加賀市篠原遺跡などに類例が認められることを知った。今後も類例資料の比較等を通じて、本資料の検討を続けて行きたい。

(3) 第 1 主成分では、正の絶対値として高台径・底径・口径が順に大きいことから、横軸には器としての径の大小が、同様に第 2 主成分では、器高・体高の順に絶対値が大きいことから、器の高さが表れていることになる。第 1・2 主成分までの累積寄与率は約 77% であった。

(4) 第 1 主成分で正の絶対値が最も大きいのは底径、負の絶対値が大きいのは器高であった。よって横軸には、底径が大きいと器高が低い、あるいはその逆といった器形が表れ、第 2 主成分では負の絶対値が最も大きい角度によって、縦軸に器形の外傾度の進行が判断できる。

## 第2節 中世から近世の遺物

今回の調査では、二次的な移動によるものと思われる年代幅の広い土器が一括の状態で出土している。ここでは図化できたものを中世と近世に大分し、年代順に報告していきたい。

### 中世（第29図265、第30図285～289）

288は底径5.5cm、底厚0.9cmを測るロクロ系土器無台碗の底部片で、外面には回転糸切り痕が認められる。雲母、長石を含む胎土・焼成は良好で、色調は白黄褐色を呈する。11世紀後半から12世紀代の製品と思われる。

265は1点のみ確認できた輸入陶磁器の染付端反り皿。高台はヘラ削りで、斜めに面が取られている。口径11.4cm、高台径5.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部内外面及び腰部外面には界線が配され、胴部外面に牡丹唐草文、見込には玉取獅子が描かれているようである。コバルトの発色は良好。285は口径56cmを測る珠洲焼の甕。口縁部は玉縁状を呈し、外面には口縁直下から叩き目が横位に施されている。胎土は暗灰色を呈して密である。286も同じく珠洲焼の片口鉢で、口径26cmを測る。口縁部は端面がほぼ水平に面取りされ、直線的に開く体部へと続いている。卸し目は深いが、原体幅は確認できない。287は口径8.4cm、底径4cm、器高1.6cmを測る非ロクロ系の土器皿。ヨコナデ調整を施された口縁部外面から内面全体にかけてタル状の付着物が認められる。289は底径11cmを測る瓦質の火桶底部片。

以上の製品はいずれも14世紀の後半から15世紀にかけてのものと思われる。

### 近世（第29図266～284、第30図290～296）

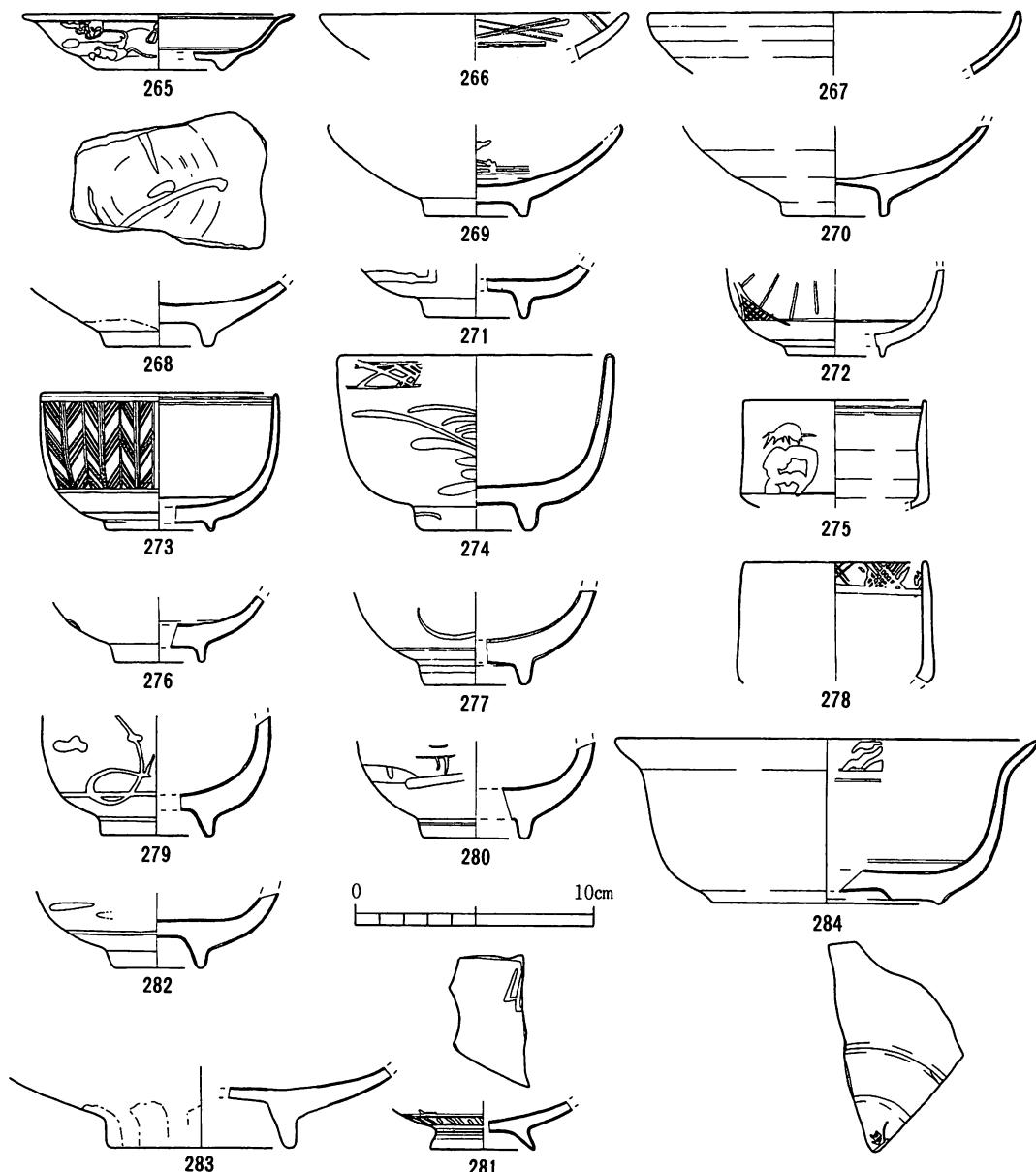
今回出土した近世陶磁器のうち、碗・皿類は肥前系の製品で占められている。図示した271・274・277・279・280・282は陶胎染付碗で、いずれも胎土は灰褐色あるいは黄褐色を呈し、施文は呉須で山水か草花文が描かれているようである。釉調は灰緑色か乳白色で貫入が入る。全形の知られる274は口径11.6cm、高台径4.6cm、器高7.1cmを測り、口縁部外面には斜格子、胴部外面に山水が施文される。272・273・276・281も同じく肥前系染付で、器高の高くない丸茶碗である。いずれも胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈する。文様構成は多様で、273の場合、外面には矢羽根文様が施文され、口縁部内側には大小の二重平行線が施されている。また、見込部分には字銘の一部が観察できる。口径10cm、高台径5.5cm、器高5.7cm。

275・278は半筒形の肥前系染付碗で、どちらも口径7.6cmを測る。なかでも278は外面に青磁釉を、口縁部内面に四方櫛文を施す青磁染付碗である。

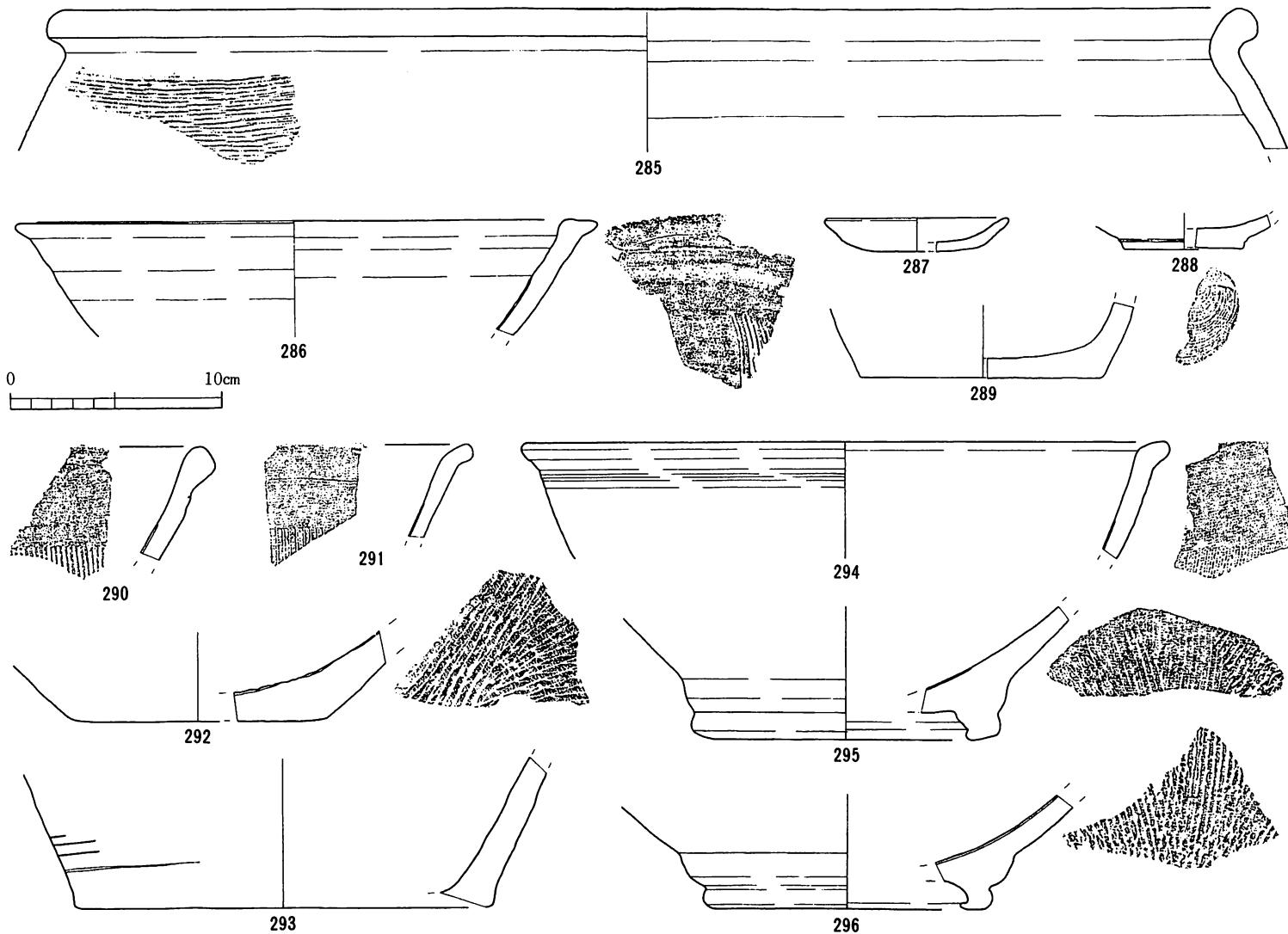
統いて、266～270、283・284は肥前系の皿である。同一個体と思われる266と269は口径13cm、高台径4.4cm、器高3.8cmを測る。胎土は乳白色で精良、釉調は乳青色を呈し、割り筆により斜格子が施文されている。見込部分は蛇ノ目釉ハギである。同じく同一固定の267と270は鉄釉により暗茶色を呈し、見込部分はやはり蛇ノ目釉ハギが施されている。口径15.2cm、高台径4.4cm、器高4cm前後で、胎土は明黄褐色を呈する。284は外面に青磁釉を、内面口縁部と見込部分に施文が施されている端反りの青磁染付皿。口径17.4cm、高台径9.8cm、器高6.8cmを測る。胎土は乳白色で精良、高台は中央部を丸く削り込んだ蛇ノ目凹型高台。

290～296は近世の摺鉢で、越前系の製品と思われる。口縁形態は、そのまま外反させるもの(291)と端部が肥厚し、玉縁状を呈するもの(290・294)とに分かれる。また、底部形態も平底(292・293)と揚げ底の高台(295・296)が認められる。いずれも卸し目は細目で、放射状に引きあげるため、底部内面交差部分が格子目を呈する。胎土は赤茶色で、無釉のものが多いが、口径30cmを測る294には鉄釉が施される。

以上の近世陶磁器は18世紀を中心とした年代が考えられる。



第29図 陶磁器実測図1 (1/3)



第30図 陶磁器実測図2 (1/3)

## 第6章 調査の成果と課題

### 第1節 遺構と遺物の時期

今回の調査で検出できた重複する3棟の掘立柱建物は、主軸規制のうかがわれる配置関係、構造規模の点などから、比較的短期間での建て替えであったと想定される。ここでは建物周辺から多量に出土した遺物のうち、第5章で分類整理した須恵器を傍証資料として建物年代を次の三期に分け、遺跡の変遷を辿ってみた。

**I期** SB01ではすべての柱穴から小片を中心に遺物が出土している。なかでも柱穴イ2・イ4の掘り方からそれぞれ出土した32、29は本遺跡内の先行的要素をもつ一群、坏蓋A類と有台坏A類に該当するものであり、田嶋編年Ⅱ<sub>2</sub>期、7世紀第4四半期に比定される。<sup>(1)</sup> 続いて、柱穴ロ4の柱痕部分から完形のまま出土した26は建物廃棄の時期を示すものと考えている。柱をすべて抜き取られているSB01の各柱穴には埋め戻された土層が堆積していたが、26はその穴底に正位の状態で置かれていたもので、柱の抜き取り直後に土器を埋納する行為が想定される。<sup>(2)</sup> 内面に墨痕が残る26は本遺跡の坏蓋B2類で、田嶋編年Ⅲ期に比定されることから、SB01は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期の幅のなかでとらえられる。

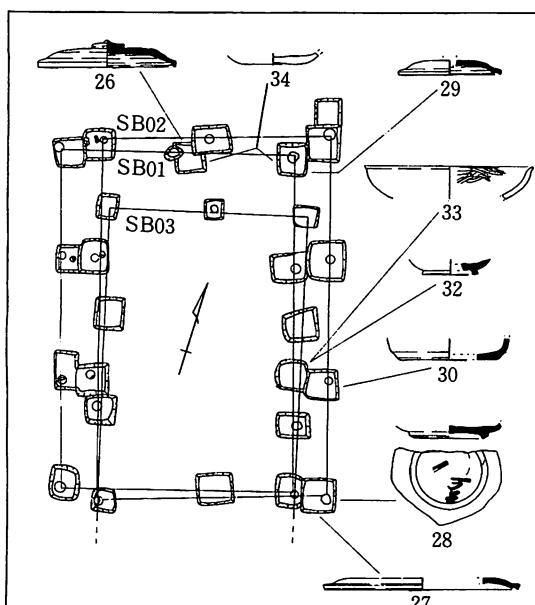
この時期に所属する須恵器としては、坏蓋A類・B1類・有台坏A類・C1類・D1類の一部・F類・G1類・無台坏A類・B類・C類・E類の一部があげられる。坏蓋の内面に返りを有するものと、それが消失し口縁端部が独特の断面三角形を呈するものが共存する時期であり、量的に主体をなしているのは春木3号窯に類品を見いだせる坏蓋B1類を中心とした一群である。<sup>(3)</sup>

**II期** SB02からはSB01と同じくすべての柱穴掘り方から小片を中心として遺物が出土

しているが、柱痕部分からのものは確認できなかった。柱の抜き取りは完全には行われておらず、4本の柱根が残存していた。

加えて、掘り方部分の出土遺物にはモモを中心とした植物遺体も検出されており、SB01とは異なる建物の地鎮及び廃棄状況が認められる。<sup>(4)</sup>

柱根の残る柱穴イ1掘り方から出土した27（坏蓋B1d類）と「・万呂」と読める墨書が記された28（有台坏D類）は田嶋編年でのⅢ期に比定でき、前出26と共に存するものである。このことは、SB01からSB02への建て替えがスムーズに執行されたことを物語っている。時期は8世紀第2四半期を中心とする年代幅のなかでとらえていきたい。所属須恵



第31図 柱穴内土器出土地点図

器には坏蓋B2類・C類・有台坏D類の一部・E類・無台坏D3類・E類がある。

また、SK01もその配置関係と粘土面でまとまって検出された須恵器から同時期に併存したものといえる。

Ⅲ期 SB03からは時期を明確にする遺物の出土はないが、建物廃棄後に調査区内が畑作に関連する畝状遺構（SU01～13）へと変わっている点から、出土須恵器の下限（田嶋編年IV期）をSB03の廃棄段階ととらえ、8世紀第3四半期のものと考えておきたい。この時期には坏蓋D類・E類・有台坏B類・C2類・D類の一部・G2類・無台坏D1類・D2類の須恵器が該当する。

## 第2節 墨書き土器の概要

本遺跡の性格の一端を示しているものが、22点の墨書き土器及びそれに関連する遺物の出土であろう。出土土器全体の個体数や構成比率等の確認は行っていないが、県内他遺跡での墨書き土器出土の状況からすれば、非常に狭小な範囲（200m<sup>2</sup>弱）にもかかわらず点数は多いといえる。

この傾向が遺跡全体のものであるか、今回検出された建物周辺に限定されるものであるかは現段階では判断できない。さらに、墨書きされた文字内容に関しても、遺跡の集落構成とその変遷が明らかにされ、時期別あるいは集落内の分布状況を踏まえた上で問われるべきである。

よってここでは、基礎的な資料として第8表に墨書きの種類や数量などを示し、資料整理の過程で気付いた点を記して報告したい。

今回の調査で確認できた墨書き土器はすべて須恵器（坏・蓋）であり、記載部位は有台坏・無台坏が底部外面に、坏蓋に関してはⅡ期では外面に記されることが多く、Ⅲ期に入ると内面に移行するようである。

第8表 墨書き土器集計表

また、判読できる文字全般の特徴として、複字句がそのほとんどを占める点があげられる。單字句は大きな字体で無台坏底部外面に記載された「秋」が1点であり、その他は二文字以上のものである。Ⅱ期では人名に関わるものと思われる「酒女」や「人」が、Ⅲ期では農耕・祭祀に関する「田地」やその下に吉祥句である「八十」をつけた「田地八十」が認められる。

さらにⅡ期を中心にⅢ期までは男性名と思われる「玉万呂」の出土頻度が高いようである。<sup>(5)</sup>なお、明確にⅠ期のものと判断できる墨書き土器は見いだせなかったが、関連遺物としての円面硯が1点出土しており、

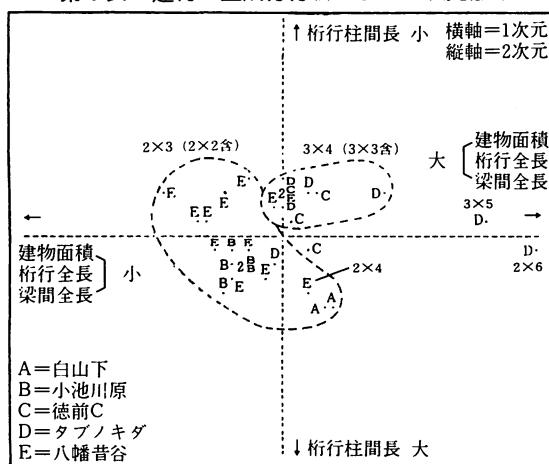
墨書き	点数	蓋		有台坏		無台坏		時期	遺物No.
		外面	内面	底外	部面	底外	部面		
田地	3				1		2	Ⅲ期	(参)2-2 167・180
田地八十	1				1			Ⅲ期	(参)2-3
玉万呂 ・万呂	6	2	1	1		2		Ⅱ～ Ⅲ期	28・100 129・140 147・155
・人	1						1	Ⅱ期	144
秋	1						1	Ⅱ期?	141
酒女	1						1	Ⅱ期	13
(未読： 二文字)	1	1						Ⅱ期	(参)2-1
( 二文字)	1				1			Ⅱ期	20
不明	10	3	3	2		2		Ⅱ～Ⅲ	

<sup>(6)</sup> 型式分類や須恵器との胎土比較によってⅠ期に属するものと考えられる。加えて、図化した須恵器壺・蓋173点のなかには墨痕を残すものが30点(内、明瞭な使用痕も認められるもの8点)あり、転用硯としての使用が考えられる。時期はⅠ期からⅢ期まで全般にわたっている。

こうした遺物の出土状況は墨書が遺跡内で記載されたことを物語るものであり、Ⅰ期の墨書土器の出土も今後予想される。

### 第3節 掘立柱建物の類型

第9表 建物・主成分分析による二次元散布



<sup>(7)</sup> 代を中心とするもので、かつ「一般集落」の性格とは異なり、類似する構造規模の建物が規則性をもって配置されているものである。データ数は30棟で、内訳は鹿島町徳前C遺跡4棟、七尾市八幡昔谷遺跡12棟、七尾市古府タブノキダ遺跡7棟、七尾市小池川原地区遺跡5棟、本遺跡2棟である。入力データは梁間全長・梁間柱間長・桁行全長・桁行柱間長・建物面積・柱穴最大長・建物主軸の7変数、分析方法は主成分分析を用いた。

分析の結果は第9表に二次元散布図としてプロットした。横軸には主な因子である面積・桁行全長・梁間全長が抽出されていることから、建物の規模が表れているものと考えられる。同様に縦軸には主な因子として桁行柱間長が抽出され、構造面が表れているようである。寄与率は第1主成分 54.88 %、第2主成分 19.64 %で累積寄与率は約75%であった。

<sup>(12)</sup> まず、構造的には湯尻修平氏の分類による「中核集落」といった概念で位置づけられている八幡昔谷遺跡、官人居宅地の可能性が指摘されている小池川原地区遺跡と本遺跡が2間×3間の柱間間数を主とするのに対し、同じく「中核集落」とされる徳前C遺跡と庇をもつ面積97m<sup>2</sup>の大型建物を主屋とし、「官衙的性格を有する集落」である古府タブノキダ遺跡では3間×4間の建物が主となっている。

続いて第9表の横軸に表れている建物規模をみると、20m<sup>2</sup>前後に分布する八幡昔谷遺跡、小池川原地区遺跡と30~40m<sup>2</sup>に分布する徳前C遺跡、古府タブノキダ遺跡、本遺跡に分かれるこ

今回の調査では、ほぼ同一地点で主軸規制のとられた同規模の建物が建て替えられていることから、三期にわたる時期別の変遷を想定できた。この建物間の切り合いをもとにした時期区分と軌を同じくして出土須恵器の様相も特徴的な変化を遂げており、時間的な経緯をよく示しているといえよう。

ここでは数量的補足として、邑知地溝帶内で検出されている掘立柱建物の規格の特徴を分析し、比較することでその性格を探ってみたい。

データを援用した遺跡はいずれも奈良時

となる。こうした点から判断すると奈良時代の邑知地溝帯内に造営された掘立柱建物のなかで本遺跡 S B 01・02は構造的に八幡昔谷遺跡、小池川原地区遺跡に近く、規模の点では徳前C遺跡、古府タブノキダ遺跡に近いという独自の形態を取っていたことが読み取れる。

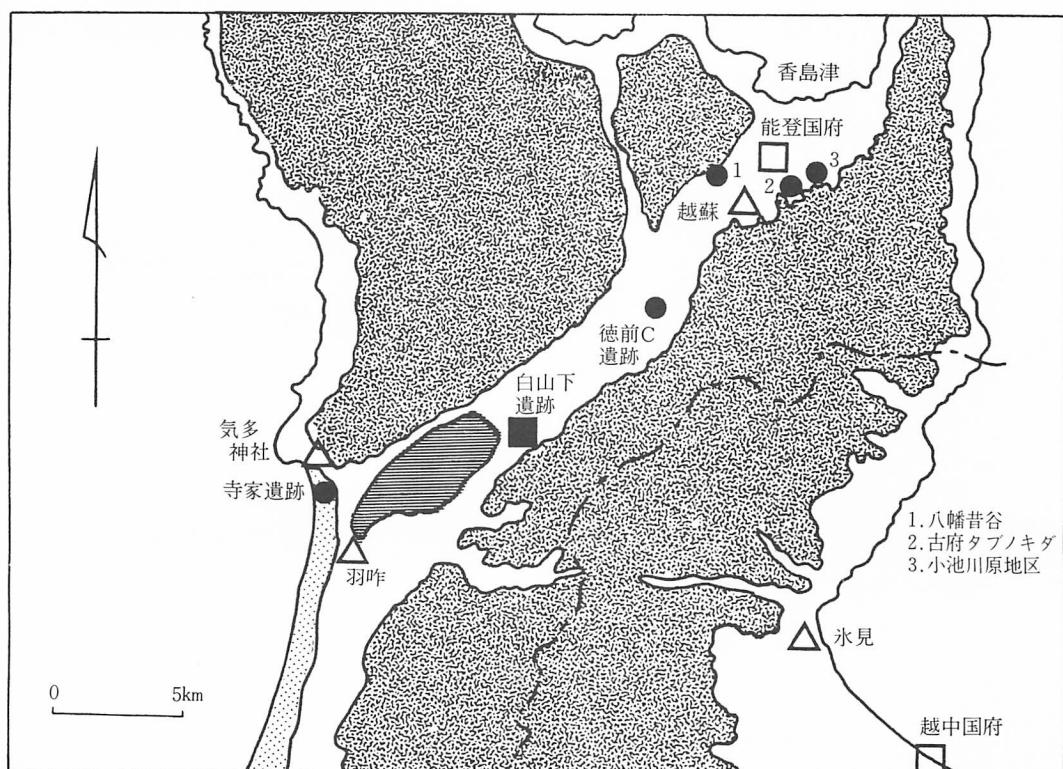
当然のことながら、本遺跡の場合には集落構成の検討作業をぬきにした段階でのデータであり、来年度に予定されている第2次調査や数年後のバイパス建設に伴う大規模な調査によってより正確な成果が期待されるものである。

#### 第4節 まとめにかえて

本遺跡周辺が地理的にも歴史的にも重要な場所に位置していることは、第1章で述べたとおりである。今回の調査では、古代の能登郡与木郷域内の集落跡と思われる遺構が検出され、7世紀第4四半期から8世紀第3四半期にかけて営まれたことが判明した。その間、調査区域内では建て替えによる三期の変遷がみられたが、それは総体として律令体制の実施と発展という歴史の流れと決して無縁ではない。

和銅6年(713)と紀年銘が入り、与木という郷名の初見とされる平城宮出土木簡と本遺跡で建物が造営された時期の間に年代的な矛盾はなく、このことは7世紀末より実施された律令体制下での遺跡の成立の妥当性をより証明しているものである。

こうした観点にたてば、遺跡内での三期にわたる変遷は、養老2年(718)に越前国から独立、



第32図 遺跡の位置概念図 (1/290,000)

天正13年(741)に越中国へ併合、天平勝宝9年(757)に再び独立という能登四郡(能登国)の古代におけるやや複雑な動向を反映したものとも理解される。

また、律令体制下での与木郷の姿を伝えるものとして、文献史料に表れる「撰才駅」・「余喜比古神社」があることは前述したとおりであるが、陸路(駅路)及び海路(邑知潟)の要所という立地条件を備えた本遺跡の考察には、これら古代施設の存在をぬきにすることはできないであろう。

県下で最も古い時期の墨書土器・円面硯・転用硯の出土は、該期の硯使用層と使用の場が特定されていた点を考慮に入れるならば、地方行政区画として機能していた与木郷域内の官人層が使用したものとするのが妥当であろう。また、しっかりとした径70cm前後の方形掘り方をもつ掘立柱建物についても同様の性格付けができる。

現段階では、古代官営施設である「撰才駅」と直接結び付く資料の検出はないが、状況的には駅・神社を含む駅家集落の一部であった可能性も指摘できよう。

ともあれ、本遺跡の調査はまだ端緒についたばかりであり、今後の検討課題は多い。十分な調査体制のなかで、古代の姿を明らかにしていく必要があろう。

註 (1) 本遺跡出土須恵器の胎土は、数点を除き全体的に長石を多く含んでいる点が特徴となっていることから、ほとんどの製品が鳥屋窯産とみられる。また、割れ口断面の観察では、大まかにいって、還元層がある程度の厚みをなすが、内部の酸化層がクリーム色を呈し、しっとりとした質感をもつもの、外面のみが還元層で、内部の酸化層がクリーム色・紫色・赤褐色・縞状を呈するもの、内部まで還元層で灰色・青灰色を呈するものに分かれ、時期的な傾向がうかがわれるようである。本報告ではふれなかったが、今後、胎土を含めた須恵器の検討を期したい。なお、須恵器の年代及び産地の比定に際しては、北野 博司・木立 雅朗・川畠 誠の三氏に実見していただき、指導と助言を得た。記して感謝の意を表したい。

(2) 田嶋 明人「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 金沢市

(3) 北野 博司「掘立柱建物の柱穴内土器埋納について」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1986 金沢市

(4) 浜岡賢太郎・嵯峨井 亮・橋本 澄夫・吉岡 康暢「能登鳥屋古窯址群の調査」『石川考古学研究会会誌』第9号 1975

(5) 墨書文字の分類については、以下の文献を参考にした。吉岡 康暢「墨書土器」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983 及び玉口 時雄「墨書土器」『季刊考古学』第18号 雄山閣 1987 東京

(6) 吉岡 康暢「陶硯」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983

(7) 集落の性格については、註6文献・「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」での湯尻 修平氏の分類に準じている。そのなかで、一般集落とは、面積30m<sup>2</sup>前後で建物の配置に規則性が見いだせない集落に対して用いられている。

(8) 湯尻 修平「徳前C遺跡」『鹿島町史』資料編(続) 1982 鹿島町

(9) 註7文献による。

(10) 垣田 修児・宮下 栄仁・橋本 澄夫『七尾市古府タブノキダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1983 金沢市

(11) 遺跡の概要については、平成2年2月28日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第32回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会の発掘調査成果の発表で、掘立柱建物の細かなデータについては、善端 直・岡田 雅人両氏の教示による。

(12) 註7文献で湯尻氏は、一般集落及び官ガ集落に対する概念規定として使われ、「小地域の郷長クラス」といった用い方もされている。

(13) 註10文献による。

第10表 出土土器観察表 1

捕获No.	器種	器形	調整			胎 土			現存量 ( /24)	計 測 値							遺構 出土地点	備 考			
			口頭部	体 部	底 部	海綿 骨片	赤褐色 色粒	砂 粒		A	B	C	D	E	F	G	H				
2-1	須恵器	壺 蓋	ナ デ	ナ デ	ヘラ削			M3, L2	I	3.6	2.7							採集品	墨書土器、2文字不読		
2-2	〃	無台壺	〃	〃				SM4	III	3	8.0	12.3			3.0	60	〃	〃	「田地」		
2-3	〃	有台壺	〃	〃				SM3	III	18	7.4	9.0	11.9	0.4	3.1	3.5	71	〃	〃	「田地八十」	
7-1	〃	壺 蓋	〃	〃	ヘラ削			SM3	IV	3.4								SU05(I4)	内面墨書(部分)+墨痕 No.152と同一個体		
7-2	〃	〃	〃	〃	〃			M3, L1	II	19		8.0	12.2	0.4	1.7	30	SU04+接	内面墨痕			
7-3	〃	〃	〃	〃	〃			S3	III	7			12.2		1.5	22	SU07	内面全体に墨痕、 外面降灰			
7-4	〃	〃	〃	〃	〃			SM3	III	6		10.2	14.4	0.8	1.7	25	SU04+接	内面墨痕			
7-5	〃	〃	〃	〃	〃			M4	III	4		11.7	15.2	0.4	1.4	32	SU01	内面墨痕			
7-6	〃	〃	〃					SM3	III	2		15.9					SU01				
7-7	〃	無台壺		ナ デ	ヘラ削			S3	I		4.4						SU01	内面降灰			
7-8	〃	有台壺	ナ デ	ナ デ	ナ デ			M2 L2	I	20(20)	5.5	6.6	10.8	0.5	3.2	3.7	62	SU09+接	底部外面タール状の物 付着		
7-9	〃	無台壺	〃	〃	〃			SM3 L1	IV	2(16)		7.0	11.0		3.5	69	SU01+接				
7-10	〃	瓶			ヘラ削			SM4	II	(完)	5.8	9.4					SU01	外面降灰、内面墨痕			
7-11	〃	壺 蓋	ナ デ	ナ デ	〃			SM4	III		2.3	1.9	12.0	15.4	0.8	0.5	1.4	27	P7	内面返り	
7-12	〃	有台壺	〃	〃	ナ デ			SM4	III	18(完)	6.6	6.7	12.2	0.3	4.0	4.3	68	P8			
7-13	〃	無台壺	〃	〃	〃			SM3	II	4(18)		9.4	12.2		2.7	67	SU06+接	底部外面墨書「酒女」 +ヘラ削「—」			
7-14	〃	有台壺						SM4	III	(2)	8.3	8.8		0.4			SU06				
9-15	土師器	高 壺	ナ デ ミガキ	ナ デ ミガキ	削り ミガキ			SM3	S2		6			15.6				SU10	内面黒色、外面赤彩		
9-16	〃	甕	ナ デ					M2 M3			2			17.6	1.7			SU06			
9-17	〃	鉢	ナ デ	ナ デ				SM4 L2	S3		5			17.6				SU10(底部)			
9-18	須恵器	壺 蓋	〃	〃	ヘラ削			SM4	II	4			13.3		1.5	14	SU10	内面墨痕			
9-19	〃	〃	〃	〃	〃			M3	II	10		11.0	14.4	0.8	1.7	24	SU10				
9-20	〃	有台壺	〃	〃	ナ デ			SM3 L1	I	23(完)	8.2	8.8	13.6	0.4	3.8	4.2	68	SU10	底部外面墨書2文字 +ヘラ削「X」		
9-21	〃	無台壺		〃				SM4	II	(3)		10.0					P9				
9-22	〃		〃	〃				M3	IV	(4)		6.0					SB03				
9-23	〃		〃	〃				S4	III								SU01	返り			
9-24	土師器	甕	ナ デ 横ハケ 縦ハケ		S2	M4 L2	S2			13			19.6	21.7	1.8			SU10			
9-25	〃	〃	〃	ハケ目	ハケ目	M4	M2	M4 L3					22.0					SU10	体部上部は横ハケ、 下部は縦ハケ		
10-26	須恵器	壺 蓋	〃	ナ デ	ヘラ削			SM4		完 形	3.4	22.9	10.9	14.5	0.9	0.4	1.6	2.9	35	SB01(口4)	内面墨痕、重量220g
10-27	〃	〃	〃	〃				SM4	II	2			20.5				23	SB02(イ1)	内面 痕		
10-28	〃	有台壺		〃	ナ デ			SM3	III	(10)	8.4	8.8		0.7				SB02(イ1)	底部外面墨書「・万呂」 +墨痕		
10-29	〃	壺 蓋	ナ デ	〃	ヘラ削			S4	II	8			10.9					SB01(イ4)	外面降灰、内面返りで 墨痕		
10-30	〃	無台壺		〃				SM3	III	(5)		10.2					SB02(イ2)				
10-31	〃	有台壺		〃				SM4	I	(1)	5.0	5.7		0.5				SB01(イ2)			
10-32	〃	〃	〃	ナ デ				S2 L1	I	(13)	5.2	6.4		0.6				SB01(ハ3) +接	高台内面墨痕		
10-33	土師器	壺	ナ デ ミガキ					S2			5			18.0				SB01(イ2)	内面黒色、外面赤彩		
10-34	〃	〃			ヘラ削 ナ デ	M2	SM4			(完)		6.6						SB01 (イ4、口4)	両面赤彩		
16-35	須恵器	壺 蓋	ナ デ	ナ デ	ヘラ削			SM3	III	5			9.5	15.0		1.9	42	SK01	内面返り		
16-36	〃	〃	〃	〃	〃			SM4		完 形	3.4	2.8	10.2	14.3	0.5	0.5	1.9	2.9	30	〃	内面墨痕、重量272g

第11表 出土土器観察表2

検出No.	器種	器形	調整			胎 土				現存量 ( /24)	計 测 値								遺構 出土地点	備 考	
			口頸部	体 部	底 部	海綿 骨片	赤褐色 色粒	砂 粒	雲母		A	B	C	D	E	F	G	H	I		
16-37	須恵器	有台环	ナ デ	ナ デ	未調整			M4, L2		I	12(22)	8.8	9.4		13.4	0.4		3.1	3.5	66	SK01
16-38	々	坏 蓋	々	々	ヘラ削			SM4 L2		III	18	2.9	2.6	11.5	15.1	0.6	0	1.5	2.1	27	々
16-39	々	有台环	々	々				M3, L1		IV	7(10)	8.2	10.6		14.0	0.3		3.4	3.7	70	々
16-40	々	坏 蓋	々	々	ヘラ削			SM4		II	8	3.2	2.9	11.4	14.1	0.6		2.1	2.7	22	々
16-41	々	無台环	々	々	ナ デ			M3, L1		I	19(完)			9.0		13.1			2.9	70	々
16-42	々	々	々	々				SM4		III	1				16.6					々	
16-43	々	有台环		ナ デ	ヘラ切 未調整			M4 L1		I	(18)	8.0	8.6			0.3				々	
16-44	々	々	々	々				SM3		III	(5)	8.7	8.9			0.4				々	
16-45	々	々	ナ デ	々				M3		III	1			11.6					々		
18-46	々	坏 蓋	々	ナ デ→ ヘラ削	ヘラ削			M3		I	14	2.3	2.0	11.5	13.0	1.1	0.7	1.1	2.9	22	I4区
18-47	々	々	々	々	々			M3		IV	7			12.4			0.7		35	SX01(F5)	
18-48	々	々	々	ナ デ				M2		III	6			11.0					60	I5区	
18-49	々	々	々	ナ デ→ ヘラ削	ヘラ削			M2		I	16	1.8	1.4	11.0	14.0	1.0	1.0	1.0	3.0	16	SX01(F6)
18-50	々	々	々	々	々			M2		III	6			10.0	12.0		1.3	0.6	55	H6区	
18-51	々	無台环	々	ナ デ	ヘラ削			S3, M3		IV	18(完)		5.3		11.6			4.0		70	F5・G4区 接
18-52	々	坏 蓋			ヘラ削			M2		III		1.6	1.3			1.1					F6区
18-53	々	無台环	ナ デ	ナ デ	ナ デ			M2		III											
18-54	々	坏 蓋	々	々	ヘラ削			SM4		I	11			9.0	13.9		0.5	1.7	33	SX01(F5)	
18-55	々	々	々	々	ヘラ削 →ナ デ			S3 M2		I	2			8.5	14.3			1.6		18	H5区
18-56	々	々	々	々	々			M3		I	6	3.4	2.8	9.0	14.6	0.6	0.6	1.9	3.1	22	G4区
18-57	々	々	々	々	々			S3, M4 S4	I	2	3.8	3.1	10.0	15.5	0.6	0.5	2.0	3.1	21	G3・4・5区接合	
18-58	々	々	々	々	々			SM4	I	3	3.2	2.7	9.9	15.5	0.6	0.7	1.9	3.2	26	H5区	
18-59	々	々	々	々	々			M4 L3	I	2	3.2	2.1	10.3	15.5	0.7	0.7	1.5	2.9	27	F6・G5・6 接合	
18-60	々	々	々	々	々			SM4 L2	I	10	3.6	2.9	10.3	15.1	0.8	0.4	2.0	3.2	30	F4区	
18-61	々	々	々	々	々			S4 M3	I	6			(10)	15.8		(0.3)	2.0		25	F5区	
18-62	々	々	々	々	々			SM4 L1	II	5			10.1	15.2		0.3	1.6		27	G5・H4区 接合	
18-63	々	々	々	々	々			S4, M3	I	4				15.2			1.6		25	I5区	
18-64	々	々	々	々	ヘラ削			S3 ML3	II	12			9.8	14.8		(0.3)	2.1		28	F5区	
18-65	々	有台环		ナ デ				M3	S2	I	(3)	7.8	6.8			0.8				F5区	
18-66	々	々		々	々			M4	I	(6)	6.9	8.2			1.0				C5区		
18-67	々	々		々	々			S3	I	(8)	7.5				0.7				C5区		
18-68	々	々	ナ デ	々	々			M3, L1	I	6(12)	6.0	6.8		10.7	0.3		2.8	3.1	60	H5区	
18-69	々	々	々	々	々			S2	I	9(10)	5.0	6.8		11.1	0.6		3.2	3.8	58	H5区	
18-70	々	坏 蓋	々	々	ヘラ削			SM3 L1	I		3.2	2.4	12.6	20.0	2.2	0	2.6	4.8	25	第11トレンチ	
18-71	々	々	々	々	々			SM4	I	7			(0.5)	16.0			1.7		17	第6トレンチ	
18-72	々	々	々	々	々			M3	IV	4				12.9					25	I5区	
18-73	々	々	々	々	ヘラ削	M3		S4 M3	IV	1			13.7	16.4			1.5		40	F4・G3区 接合	
18-74	々	々	々	々	々			S3	IV	17	2.8	2.0		15.7	0.8	0	2.3	3.1	31	SX01(F6)	
18-75	々	々	々	々	々			SM4	I	2				19.1			(1.0)		25	G5区	
18-76	々	々	々	々	々	ヘラ削		SM4	IV	7	4.5	3.3	18.0	22.0	1.2	1.7	2.3	5.2	35	F4・5・G4・6 接合	
19-77	々	有台环	々	々	ナ デ			M3, L1	II		7.9	8.0		13.1	0.5		3.9	4.4	62	G5区	

第12表 出土土器観察表3

捕获No.	器種	器形	調整		胎 土				現存量 ( /24)	計 测 領								遺構 出土地点	備考				
			口頭部	体部	底 部	海綿 骨片	赤褐色 色粒	砂 粒		畫 纋	断 面	(6)	7.4	8.5	0.8								
19-78	須恵器	有台坏	ナ デ	ナ デ				M4		II	(6)	7.4	8.5						F5区				
19-79		・	・	・	・	ナ デ		M3		I	(12)	7.6	8.0		0.5				SX01(F5)				
19-80		・	・	・	・	・		S3	S2	IV	(11)	8.9	8.6		0.7				F・G5区接合				
19-81		・	・	・	・	・		M4		I	3	7.1	8.6	13.1	0.3	3.6	3.9	68	H5区				
19-82		・	・	・	・	・		M4		IV	12(14)	7.5	8.5	12.9	0.4	3.9	4.3	70	G5区				
19-83		・	・	・	・	・		M4, L1		I	(3)	7.8	8.7	13.2	0.2	4.0	4.2	69	F5区				
19-84		・	・	・	・	・		M4		I	(4)	7.9	8.5		0.5				G5区				
19-85		・	・	・	・	ナ デ		M4		I	(完)	9.3	8.7		0.6				G5区				
19-86		・	・	・	・	・		M3		I	(10)	9.8	9.2		0.5				H4区	蓋付部に蓋口縁部の一部軸着			
19-87		・	・	・	・	・		M3		I	(5)	9.5	9.7		0.8				H4区	体部外面へラ書「/」墨痕?			
19-88		無台坏	ナ デ	・	・			M3		IV	4(10)	6.8		13.3			3.5	56	F5区				
19-89		・	・	・	・	・		M4, L2		III	5(完)	6.6		12.6			3.3	69	包含層一括				
19-90		・	・	・	・	・		S3, M2		III	(6)	7.0							SX01(F6)				
19-91		・	・	ナ デ	・	・		S3L1		III	3(7)	6.6		11.9			3.0	62	・				
19-92		・	・	・	・	・		S3, M3		III	6(14)	7.0		12.9			3.3	64	G5-6区接合				
19-93		・	・	・	・	・		SM3		III			7.2						H5区				
19-94		・	・	ナ デ	・	・		M3, L1		I	2(12)	7.8		11.9			3.4	69	H4区				
19-95		・	・	・	・	・		S4		I	2(3)	10.0		13.8			3.0	68	H5区				
19-96		・	・	・	・	・		M4		III	(7)	7.4							I5区				
19-97		坏 蓋	ナ デ	・	ヘラ削 →ナデ			SM4		I	11	3.0	2.5	9.5	14.6	0.7	0.4	1.8	2.9	23	G5区	外面降灰	
19-98		・	・	・	・			M3	S1	III	14	3.1	2.8	10.1	14.8	0.7	0.6	1.9	3.2	29	H5区	内面へラ書「—」	
19-99		・	・	・	・	・		SM4		I										H6区	外面墨書、不読		
19-100		・	・	・	・	・		SM4		III	14	2.9	2.5	10.0	15.3	0.9	0.6	1.7	3.2	24	F4区	内面墨痕、ヘラ書「キ」	
19-101		・	・	・	・	・		SM3		III		3.8	3.4	10.9		0.6					24	G5-6区接合	外面墨書「・万呂」
19-102		・	・	・	・	鉛いナデ		M3, L1		IV	5			15.8			2.2	40	H-14区接合				
20-103		・	・	・	・	ヘラ削		M4, L1		IV	6	3.1	3.1	12.3	15.0	0.5	0.4	1.0	1.9	25	F・G4区接合		
20-104		・	・	・	・	・		SM4		III	10	3.0	2.8	11.6	15.1	0.6		1.2	1.8	30	G6区		
20-105		・	・	・	・	・		SM4	L1	II	4			14.1			2.2	31	F・G6区接合	内面墨痕			
20-106		・	・	・	・	・		M3	M2	IV	4			14.1						20	14区		
20-107		・	・	・	・	・		SM4		I	5			14.4			2.1	34	H3-5区接合	外面降灰			
20-108		・	・	・	・	・		SM3		I	3			(9.5)	14.6		(0.2)	1.7	25	G5区			
20-109		・	・	・	・	鉛いナデ		M4, L2		III	3			14.7			(2.4)	37	H6区				
20-110		・	無台坏		・	・		S3		III									H4区	底部外面墨書、部分的不読			
20-111		・	坏 蓋	ナ デ	ナ デ	ヘラ削		SM4		III	20	3.1	2.2	9.0	14.8	0.5	0.2	1.5	2.2	21	F5区	内面へラ書「—」	
20-112		・	・	・	・	・		M3		III	1			16.0			1.3	18	G5区				
20-113		・	有台坏	・	・	ナ デ		M4, L2		I	5(完)	8.1	8.5		12.9	0.4		2.9	3.3	67	SX01(F6)		
20-114		・	・	・	・	・		S3, L1		II	2(12)	9.4	9.2		13.5	0.5		3.5	4.0	66	F5区	底部外面墨書、不読	
20-115		・	・	・	・	・		S3, L1		I	(7)	7.6	9.0		0.3						H4区		
20-116		・	・	・	・	・		M3		III	(13)	7.4	8.8		0.5						F4・G5区接合	底部外面へラ書「—」	
20-117		・	・	・	・	・		M2, L1		I	(13)	7.8	8.1		0.5						F4・5接合		
20-118		・	・	・	・	・		M3		II	(8)	8.3	9.6		0.4						G6区		
20-119		・	・	・	・	・		S4, M3		IV	(6)	8.1	8.5		0.5						H3区		
20-120		・	・	・	・	・		M3		III	(6)	7.4	9.0		0						G6・H5・J4接合	底部外面墨書、部分的接	
20-121		・	・	・	・	・		M3	S2	III	(9)	8.0	9.8		0.5						H3区		
20-122		・	・	ナ デ	・	・		M3		III	11(3)	9.8	10.5		14.0	0.3		3.6	3.9	79	F5区		
20-123		・	・	・	・	・		M3, L2	S2	III	10(7)	9.5	11.0		13.8	0.4		3.3	3.7	76	F4・5接合		
20-124		・	・	・	・	・		M3		II	3(7)	9.2	10.2		14.6	0.3		3.3	3.6	65	H5区	底部外面へラ書	
20-125		・	・	・	・	・		M3	S3	II	(4)	8.8	10.9		0.5						G6区		

第13表 出土土器観察表4

持因No	器種	器形	調整			胎 土					現存量 ( /24)	計 测 値							造構 出土地点	備 考			
			口頭部	体部	底部	海綿 骨片	赤褐色 色粒	砂 粒	重 母	断 面		A	B	C	D	E	F	G	H	I			
20-126	須恵器	有台坏		ナ デ	ナ デ			M4		III	(12)	9.1	10.2			0.4				G6区			
20-127	々	々	ナ デ	々	々			M4		I	(7)	8.2	9.8			0.3				I4区	底部外面墨痕		
20-128	々	々		々	々			S3, M2		III	(9)	8.1	9.0			0.4				I4区	々		
21-129	々	坏 蓋	ナ デ	々	ヘラ削			SM4 L2		IV		3.4	3.2		14.4	0.7		2.0	2.7	第10トレンチ	外面墨書「玉万呂」?		
21-130	々	々	々	々	々	S1		SM4 L3		II	21	3.1	2.3	9.3	14.5	0.7	0.7	2.4	3.8	37	I3区	内面ヘラ書「一」 外面坏片軸着	
21-131	々	々	々	々				SM4		III	6				13.8					29	I3区	内面墨痕	
21-132	々	々	々	々	ヘラ削			M3, L2		III	14			7.3	14.2		0.5	1.8	23	F5-6区接合			
21-133	々	々	々	々	々			SM3 L2		II	7			8.6	13.8		0.6	1.9	28	I4区			
21-134	々	々	々	々	ナデ?			SM4		III	4				14.0			1.7		27	H5区	内面墨痕	
21-135	々	々	々	々				S4, M3		II	4				14.0			1.9		26	H6区	外面降灰、内面墨痕	
21-136	々	々	々	々	ナ デ			M3		III	2				13.6					34	H5-6区接合	外面墨書?	
21-137	々	々	々	々	ナデ?			SM4		IV	8				13.7			1.5		24	F4-5区接合	外面降灰	
21-138	々	々	々	々				SM4 L1		IV	4				13.8			1.5		15	第7トレンチ	々	
21-139	々	々	々	々	ヘラ削			M4		III	12			8.5	13.0	0			1.1		18	I5区	外面降灰、内面ヘラ書 「一」、焼きゆがみ
21-140	々	無台坏		々	ナ デ			SM3		III	(6)			9.5							F5区	底部外面墨書「・万呂」 部分	
21-141	々	々		々	々			SM3		III	(6)			8.0							15区	々「秋」	
21-142	々	々		々	々			SM3		I	(7)			9.6							第7トレンチ	底部外面墨書・不読	
21-143	々	々	ナ デ	々	々			M3, L1		II	20(完)			7.6		11.6			2.7		67	H-I5区接合	内面墨痕
21-144	々	々	々	々	々			SM3		I	7(10)			8.0		11.7			2.9		72	I4区	底部外面墨書・2文字 「口人」
21-145	々	々	々	々	々			M3		IV	3(2)			9.6		12.6			2.9		73	H4区	
21-146	々	々	々	々	々			M4		I	1(12)			10.0		13.5			3.1		70	I3-4区接合	
21-147	々	々	々	々	々			SM3		III				10.4							第10トレンチ	底部外面墨書「玉…」	
22-148	々	坏 蓋	々	々	々			SM4		III	4	2.2	2.5		13.0	0.6		2.1	2.7	38		内面墨痕	
22-149	々	々	々	々	々			M4, L3		III	6	2.4	2.1		13.9	0.6		1.6	2.2	32	F4-G4接合		
22-150	々	々	々	々	ヘラ削			SM4 L1		III	16	2.8	2.4	9.0	14.0	1.2		1.7	2.9	31	G6区	内面墨痕、墨書・不読 +「×」	
22-151	々	々	々	々	々			M3 L1		IV	3	2.8	2.4	12.0	18.1	1.5	0.3	1.9	3.7	35	H5-J4区接合	内面墨書・部分的	
22-152	々	々	々	々	(段状)	々		M4		IV	2			13.3	18.0		(1.0)	1.8		29	J-I3-4区接合	内面墨痕	
22-153	々	有台坏		々	ナ デ			M4	S2	I	(4)	10.7	10.5			0.4					G5区		
22-154	々	坏 蓋	ナ デ	々	ヘラ削			M4		I	4			8.2	12.0		0.1	1.2		22	G5区		
22-155	々	々	々	々	々			M3, L2		III		2.4	2.4		12.4	0.8				22	J-I区接合	内面墨書「玉万呂」	
22-156	々	々	々	々	々			M3, L1		IV	6			7.4	10.1		0.6	2.4		58	G5区	外面降灰、内面墨痕	
22-157	々	々	々					M3 L3		III	18	2.2	2.1		11.4	0.7		2.0	2.7	26	H-I-J3-4-5区接合	外面降灰、内面墨痕、 使用痕?	
22-158	々	有台坏	々	ナ デ				M3		III	1(15)	7.0	7.5		10.1	0.7		3.8	4.5	82	H4区	底部外面墨書・不読	
22-159	々	坏 蓋	々	々	ヘラ削			SM4 L2		II	5			9.8	14.4		0.5	2.1		38	H6区		
22-160	々	々	々	々	々			SM4		III	7			8.0	14.6				1.2		18	G4区	内面ヘラ書「一」?の 一部遺存
22-161	々	々	々	々	々			M3	S3	IV	2			11.0	15.0	0.2			1.0		19	I4区	
22-162	々	々	々	々	々			SM4 L2	S3	IV	5			9.6	14.4		0.3	1.8		31	G3-4-5区接合		
22-163	々	々	々	々	々			SM4 L1		IV	4			10.0	14.2				2.2		43	F4区	

第14表 出土土器觀察表5

第15表 出土土器観察表6

掲出No.	器種	器形	調整			胎土			現存量 (/24)	計測値								遺構 出土地点	備考		
			口頸部	体部	底部	海綿 骨片	赤褐色 色粒	砂粒		雲母	断面	A	B	C	D	E	F	G			
25-208	土師器	甕	ナデ	カキ目		S2		SM4,L1			7			15.1	15.9	1.5			F6区		
25-209		・	・	・	ハケ 横ハケ		S3	S1	SM4			3			18.1	1.9				G6区	内面煤付着
25-210		・	・	ナデ	縦ハケ 横ハケ		M4	ML3	SM4			2			21.0	2.5				F6区	
25-211		・	・	ナデ	縦ハケ ハケ→ カキ目		M3	M2	SM4			3			22.8	2.0				H5区	
25-212		・	・	ナデ	横ハケ ハケ目 ヘラ削				SM4	S2		7			23.3	2.8				G4区	内面煤付着
25-213		・	・	ナデ	縦ハケ		S3		M4 L2	S3		18		2.6	20.5	20.1	1.9	28.0	29.9	F5-6区接	
25-214		・	・	ナデ	横ハケ 縦ハケ		S3	S2	S3 L2	S2		4			19.0	2.0				H5区	
25-215		・	・	ナデ	ハケ目		S3	S1	M4	S2		10			13.6	1.5				G6区	
25-216		・	・	・	カキ目		S2		M4, L3	S2		4			21.8	1.9				I4区	
25-217		・	・		ハケ目 ナデ		S3	S2	M4						7.0					G6区	
26-218		・	・	ナデ	ナデ カキ目				M3	S3		3			18.1	2.1				G4区	
26-219		・	・	・					M3	S3		3			19.2	1.9				F4区	外面煤付着
26-220		・	・	・					M3	S2		3			19.0					H4区	
26-221		・	・	・					M4, L1	S2		3			19.2					J5区	
26-222		・	・	・	カキ目 カキ目 ハケ				M3	S3		5			22.0	1.5				J5区	
26-223		・	・	ナデ	縦ハケ				SM4	S2		4			23.0	2.2				F5-6区接	外面煤付着
26-224		・	・	ナデ					M3	S2		2			23.4					J4区	
26-225		・	・	カキ目 ナデ					ML3	S2		2			25.0					H4区	
26-226		・	・	ナデ			S2	M1	M3	S2		2			24.4					I4区	
26-227		・	・	・	ナデ				M4, L3	S3, L1		2			30.0					J5区	
26-228		・	・	ナデ カキ目	・				S4 M2	S3		4			14.9	1.5				I3区	
26-229		・	・	縦ハケ 横ハケ	ハケ目				S3	S4		4			18.3	2.1				G4区	
26-230		・	・	ナデ カキ目	カキ目				M1	M3	S2	5			19.0	1.5				I3-4区	
26-231		・	・	・	ハケ目		S3	S2	SM3			(9)		13.0						H4区	
26-232		・	・	ヘラ削 →ナデ	糸切り 痕				M3 L1	S2		(完)		7.7						H5区	
27-233		・	・	ナデ ミガキ	ミガキ				S2	S2		2			12.6					I3区	内面黒色外面赤彩
27-234		・	・	・	・		S2		S2			2			14.0					F5区	・
27-235		・	・	ナデ ミガキ			S2		S2			6			15.2					H5区	・
27-236		・	・	・	ハケ目 ミガキ		S2		S2			4			17.0					G6区	・
27-237		・	・	・	ミガキ ナデ		S2		S2			2			17.0					I5区	
27-238		・	・	・	ミガキ ナデ				S2	S2		3			14.6					J5区	・

第16表 出土土器観察表7

捕获No.	器種	器形	調整			胎土			現存量 ( /24)	計測値							追構 出土地点	備考	
			口頭部	体部	底部	海綿骨片	赤褐色粒	砂粒		雲母	断面	A	B	C	D	E	F		
27-239	土師器	壺	ナデ	ナデ			S3	S3		2					14.6			G6区	両面赤彩
27-240	々	々	ミガキ	ミガキ			S4	S2		2					16.0			G5区	々
27-241	々	々	ナデ・ ミガキ	々			S3	S3		2					16.6			G5区	々
27-242	々	壺	ナデ・ ミガキ	々		S4	S2		6						14.0			I4区	内面黒色外面赤彩
27-243	々	有台壺	ナデ	ナデ	ヘラ削 ナデ		S3	S3		8.2	8.6		11.9	0.5				I4区	両面赤彩
27-244	々	壺	々	々	S2	M3	S2		2						12.6			F5区	々
27-245	々	々	ナデ・ ハケ目	々	S2	M3	S2		3						13.6			G5区	々
27-246	々	々	々	々		S3	S2		3						16.6			H5区	々
27-247	々	々	ナデ	々		S3	S3		2	9.0		17.2				3.0		F6区	々
27-248	々	々	ナデ	々	S2	S3			3						17.0			I4区	々
27-249	々	々	ナデ	ナデ		S2			3									I5区	
27-250	々	甕	ナデ	S2	M2	M3			(11)	6.6								I4区	
27-251	々	壺		ナデ	M2	S1	S2		(8)	12.0								F4区	外面赤彩
27-252	々	々	ナデ			M3, L2	S2		(8)	5.0								G5区	
27-253	々	甕			M2	SM4			(9)	7.8								I4区	
27-254	々	々	ナデ			M4			(16)	6.4								I4区	
27-255	々	把手			M2	S3												G5区	
27-256	々	々			S2	S1	M4											I3区	
27-257	々	々			S2		M4											H3区	
27-258	々	棒状脚			S2	SM4 L1												G4区	製塙土器
27-259	々	々			S2	M4												G5区	々
27-260	々	々			S2	M4												F4区	
27-261	々	々			S3	SM3												G4区	製塙土器
27-262	々	々			S4	M4												G4区	々
27-264	須恵器	甕				SM4		II	1			57.0						G6区	内外面降灰、波状文

観察表中、〔調整〕については、各部位外面、内面の順に記入した。分記していない場合は内外面共通の調整手法であることを表している。

〔胎土〕は海綿骨片・赤褐色粒・雲母・石英・長石・岩石粒の形状、大きさ、含有量を裸眼で観察した。そのうち、石英・長石・岩石粒などは、ほとんどの土器が共通の傾向を示していたので、表中では砂粒として表記した。量は主観的にみて、通有量と思われるものを判断基準に3とし、以下5：非常に多い・4：多い・2：少ない・1：非常に少ないと表記した。また、断面とは、須恵器のみに行ったもので、安里 進「須恵器の断面色層と六世紀の焼成技術」『考古学研究』を参考に、酸化焰焼成によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、還元焰焼成によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層をI類、内外表面のみ還元層で、内部は全面的に酸化層が残るものをII類、還示層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをIII類、内外表面から芯まで完全に還元層のものをIV類、その他変則的な色層をなすものをV類として分類、表記した。

〔現存量〕については、基本的に口縁部の残存率を24分割法で、さらに状況に応じて（ ）内に

底部の残存を表した

【計測値】については、A：高台径、B：底径、C：口縁部ヨコナデ幅の直径あるいは体部最大径、D：口径、E：口縁部ヨコナデ幅あるいは口縁部高、F：Eに対する体部下半の高さ、G：体高、H：器高、I：体部の最も張り出した所から口唇部端へ直線を引いて計測した角度をそれぞれ表記した。

# 図 版



遺跡周辺の航空写真(昭和22年撮影)



(1)遺跡遠景(北から)



(2)バックホーによる荒掘り(東から)



(1)調査風景(南から)



(2)畝状溝掘り下げ作業(南から)



(1)掘りあがった畝状溝(北から)



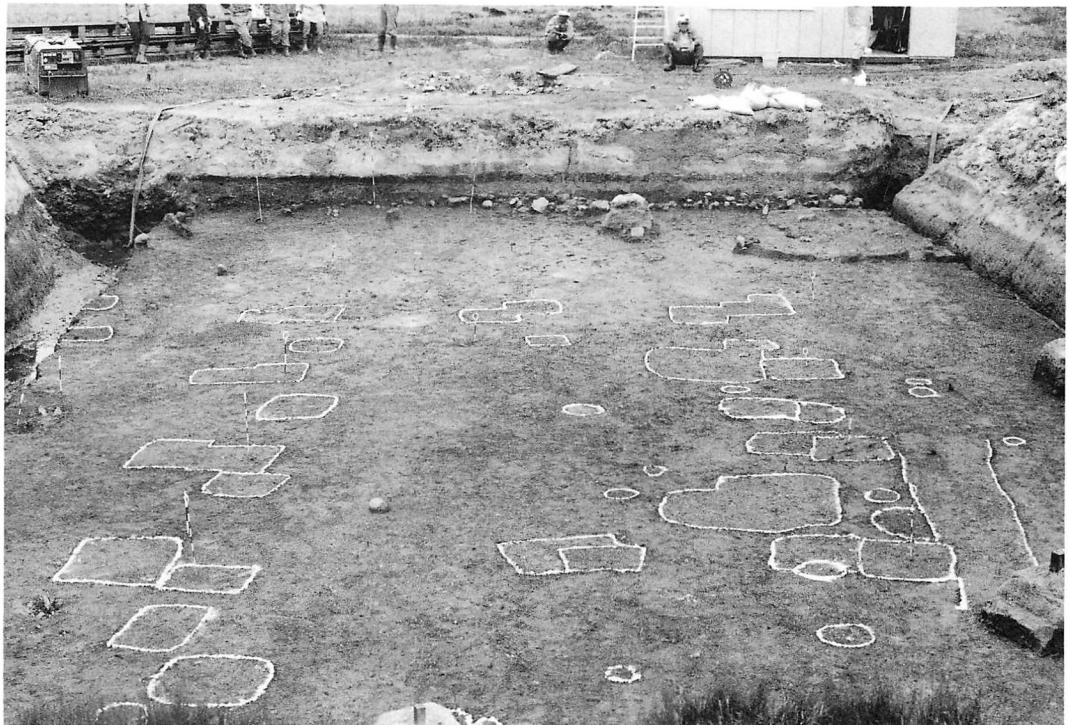
(2)掘りあがった畝状溝(南から)



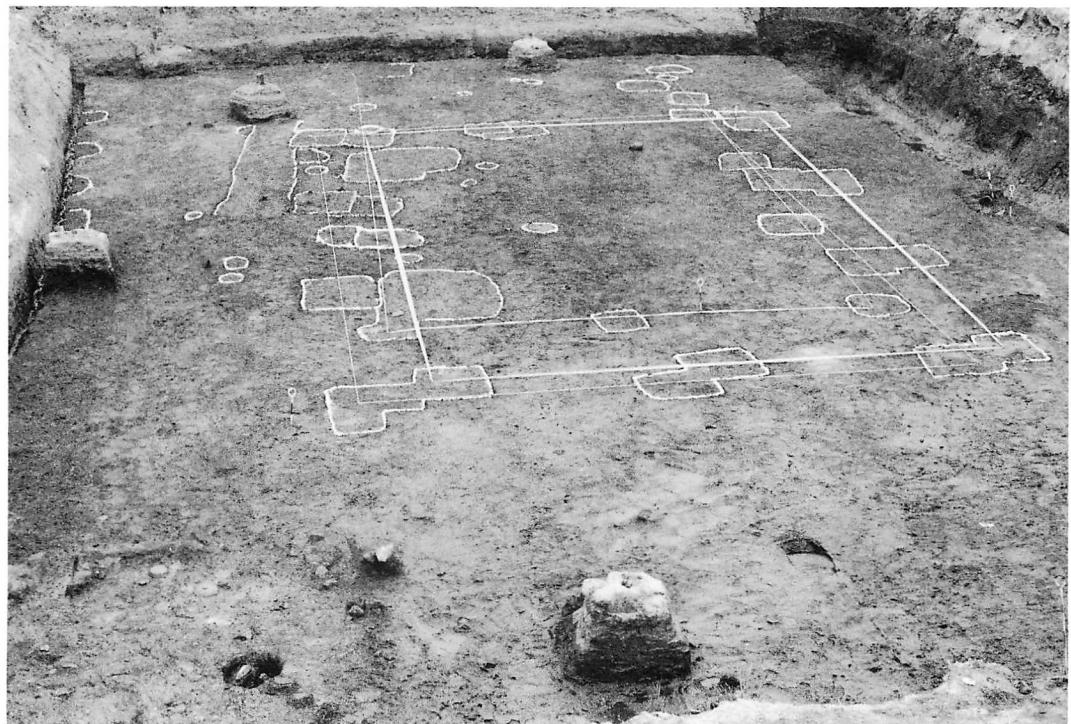
(1)掘りあがったSU10(南から)



(2)SU10内土器検出状況(東から)



(1)調査区全体遺構検出状況(南から)



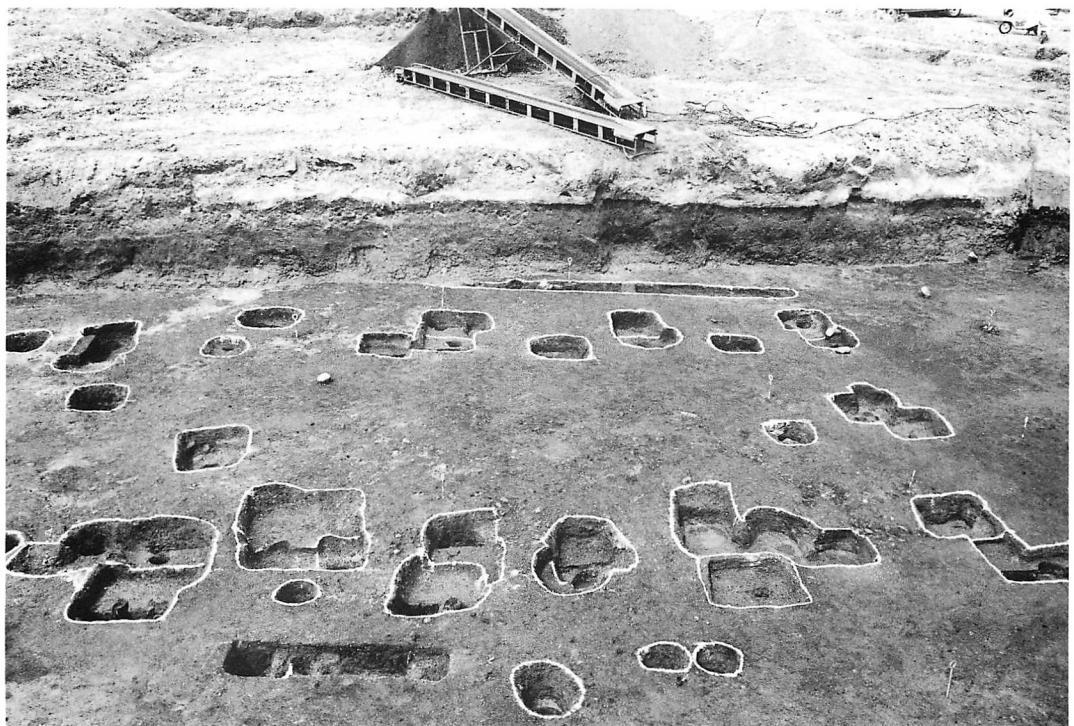
(2)調査区全体遺構検出状況(北から)



(1)掘りあがった調査区全景(南から)



(2)掘りあがった調査区全景(北から)



(1)掘りあがったSB01~03(東から)



(2)SB01・02柱穴切り合い状況(北から)



(1)柱根が残る柱列(北から)



イ 1



イ 2



イ 3



ハ 1

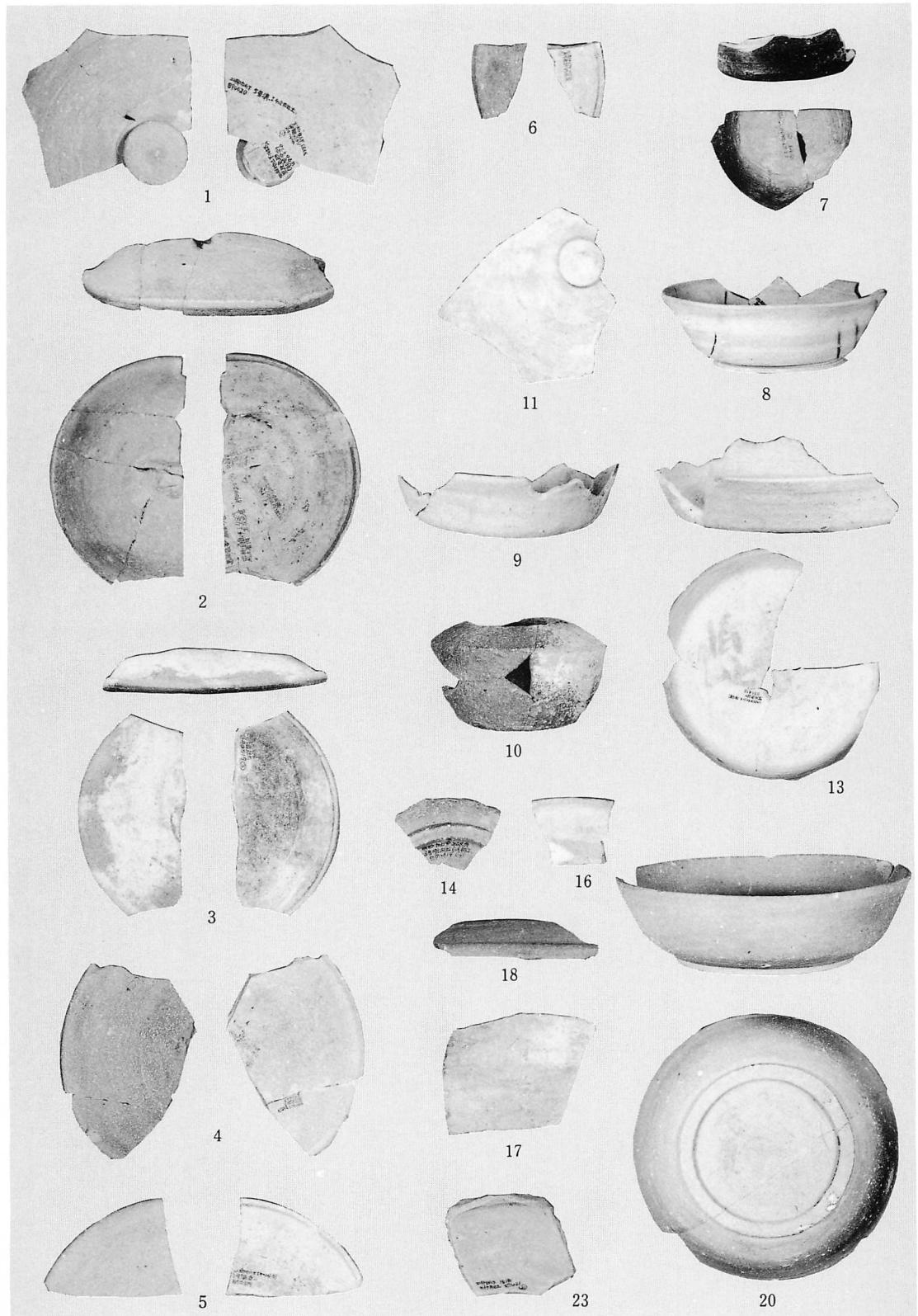
(2)柱根検出状況(南から)



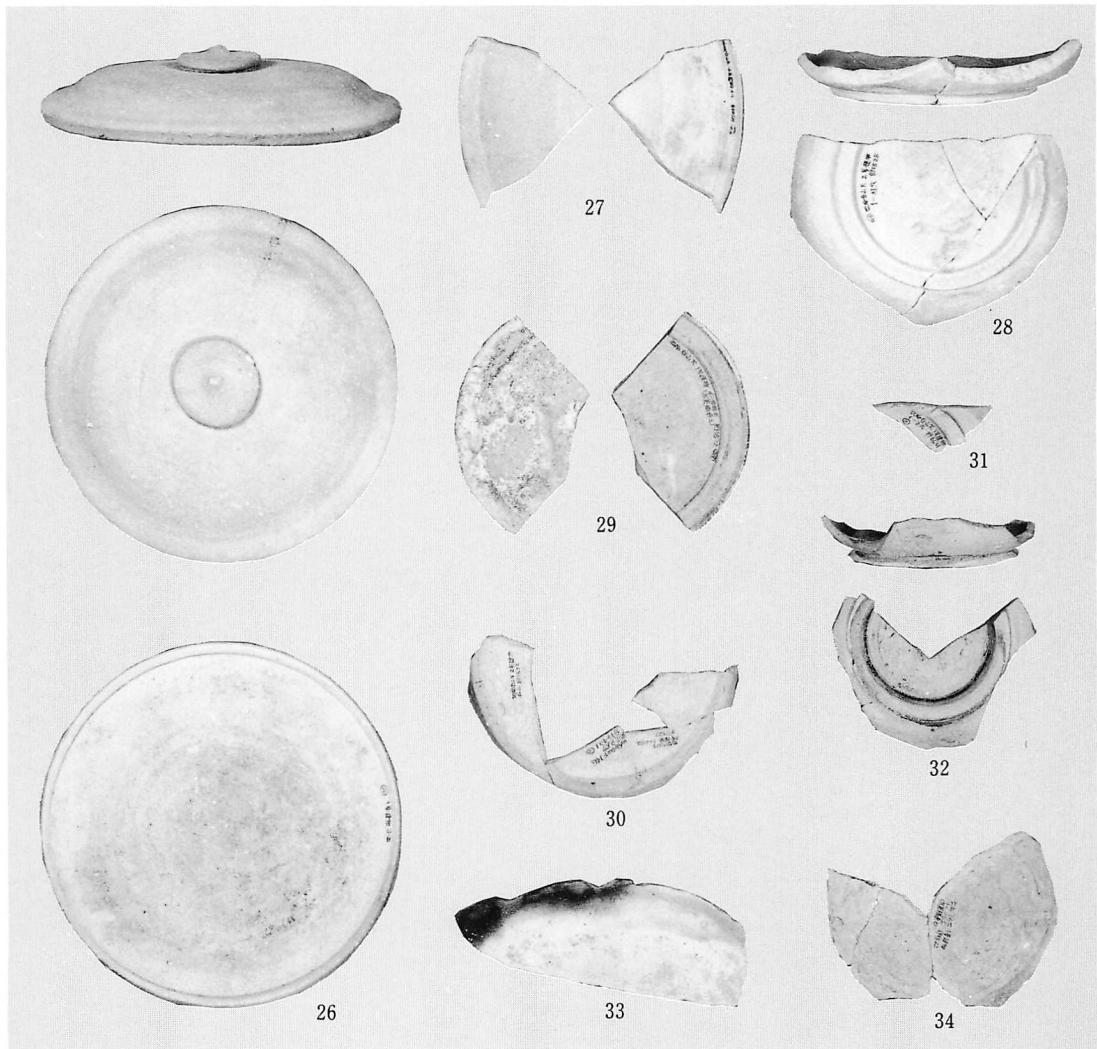
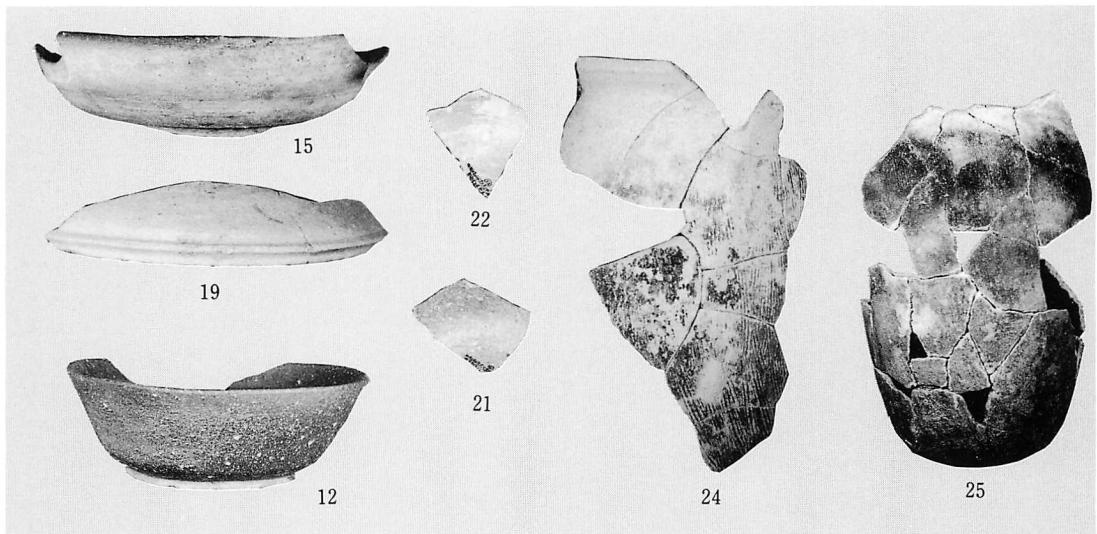
(1)SK01・SX01検出状況(南から)



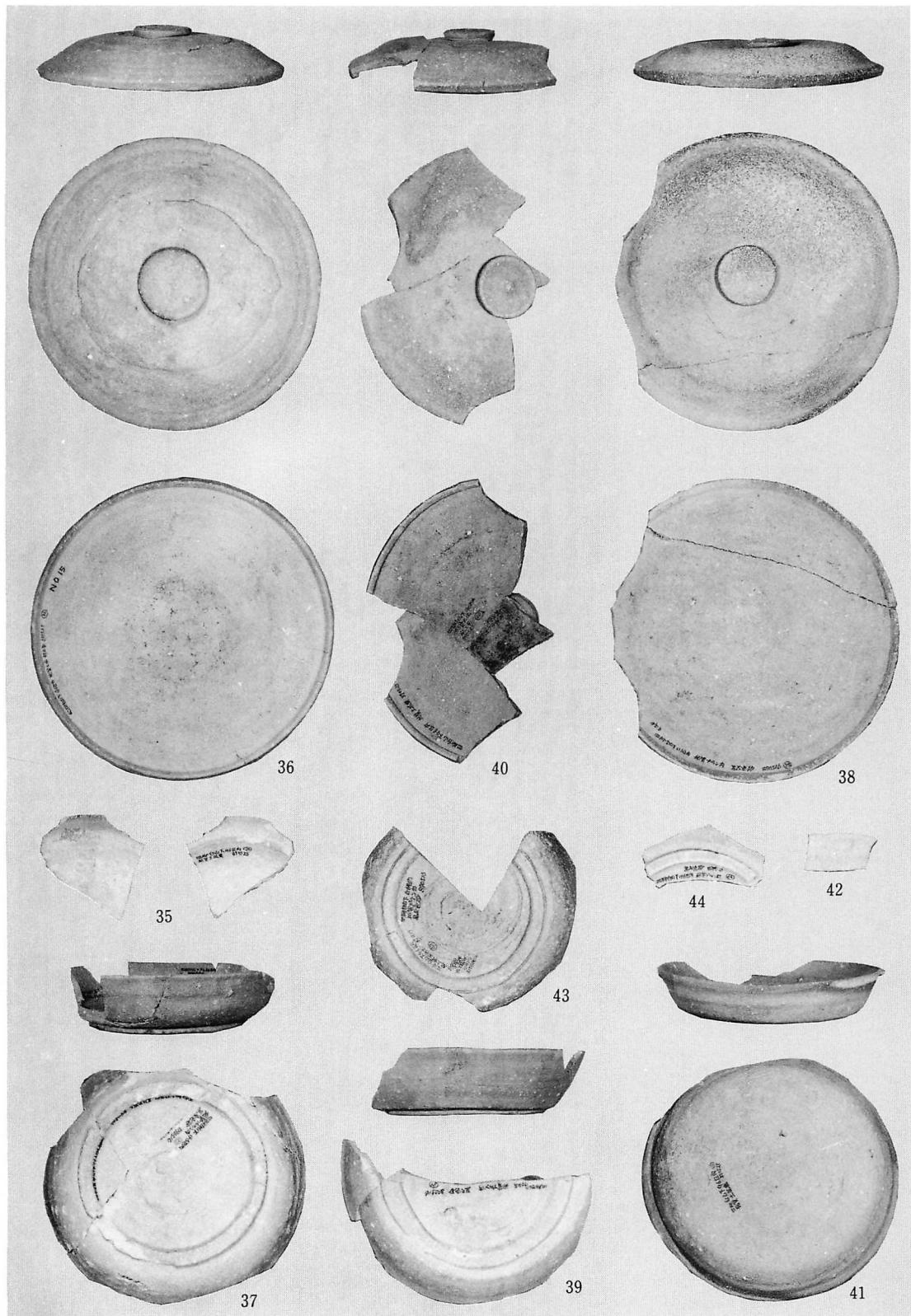
(2)掘りあがったSK01(北から)



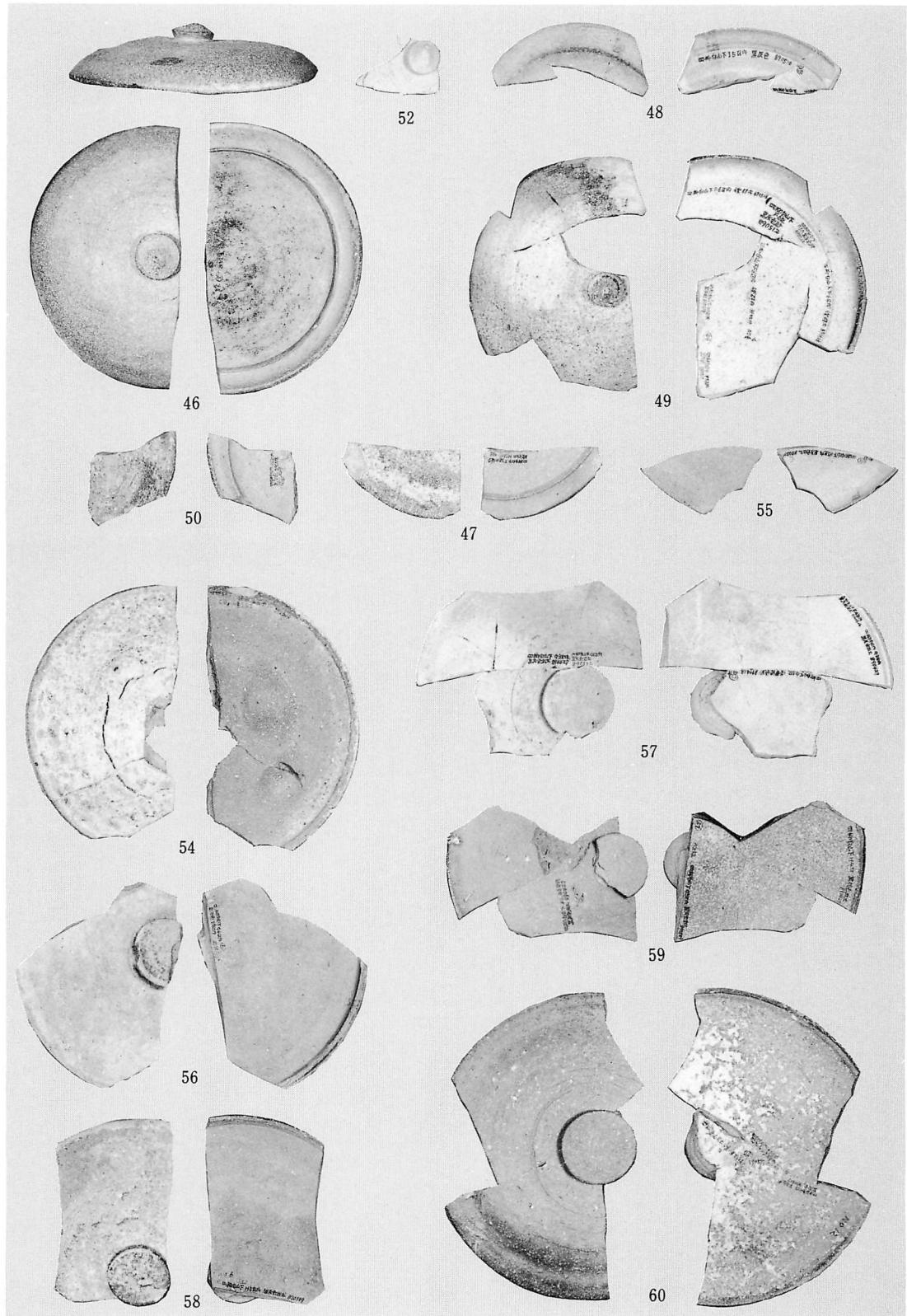
SU01~13出土土器(第7・9図)



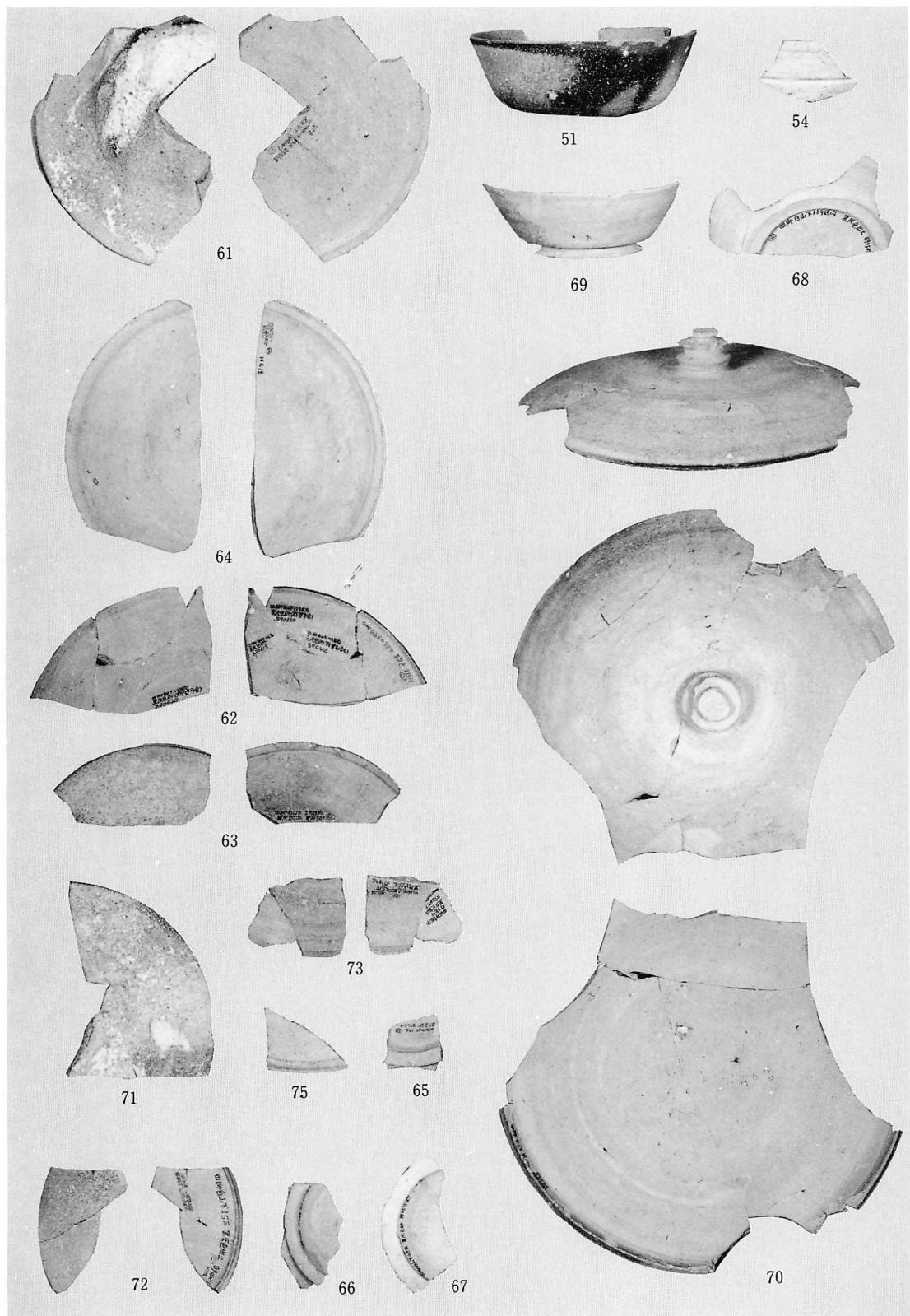
SU01～13出土土器(上-第9図)、SB01・02柱穴内出土土器(下-第10図)



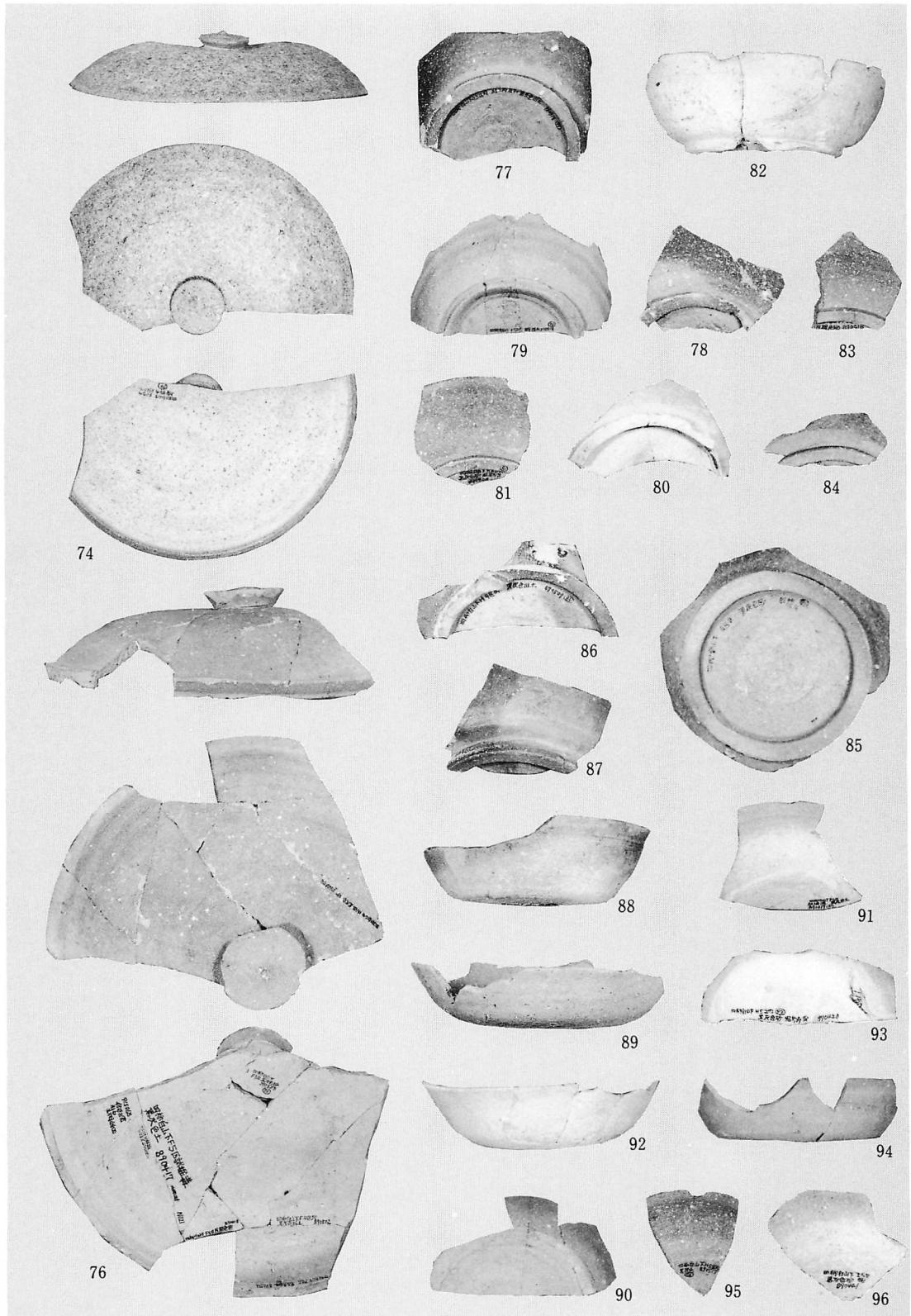
SK01出土土器(第16図)



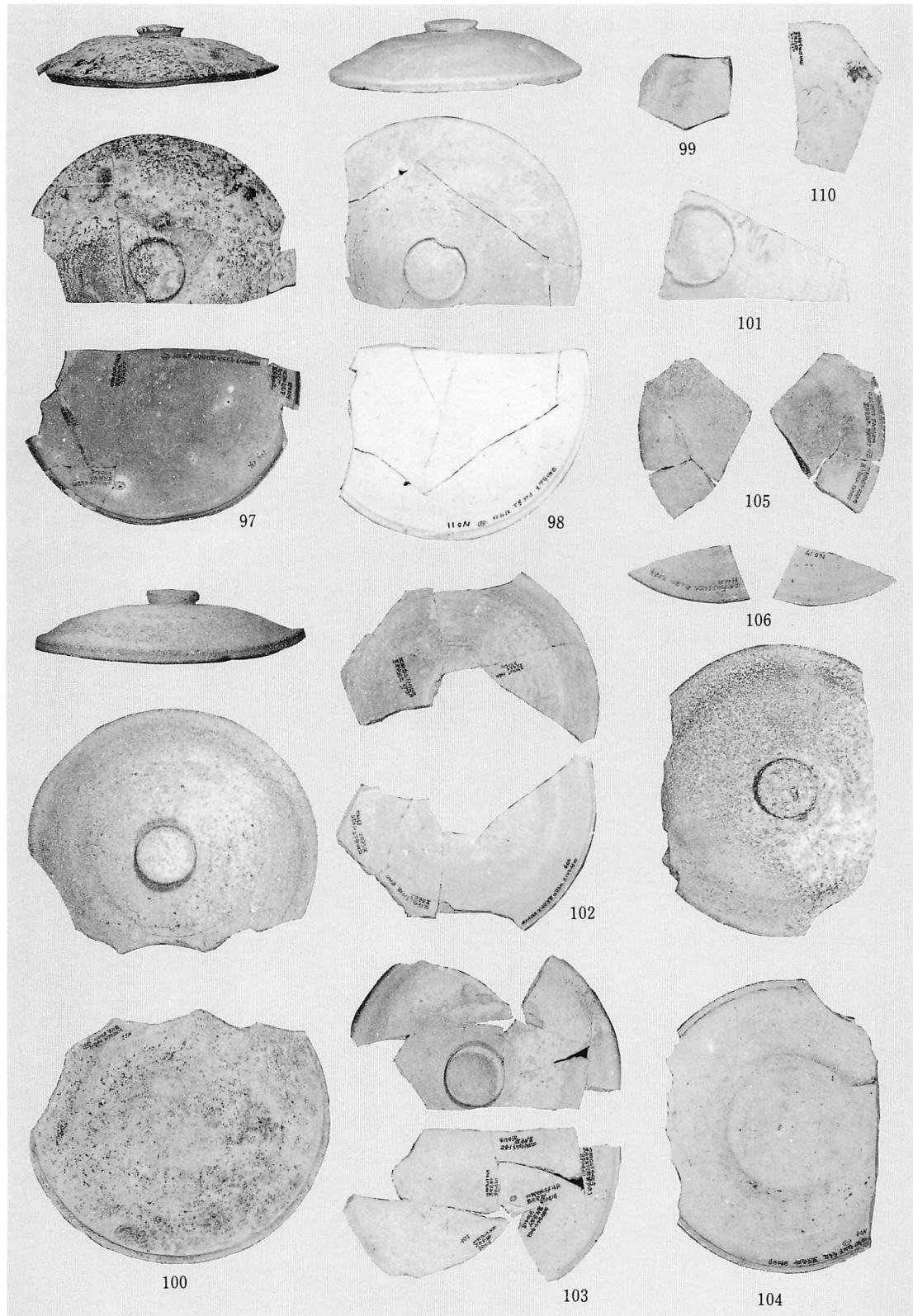
須恵器(第18図)



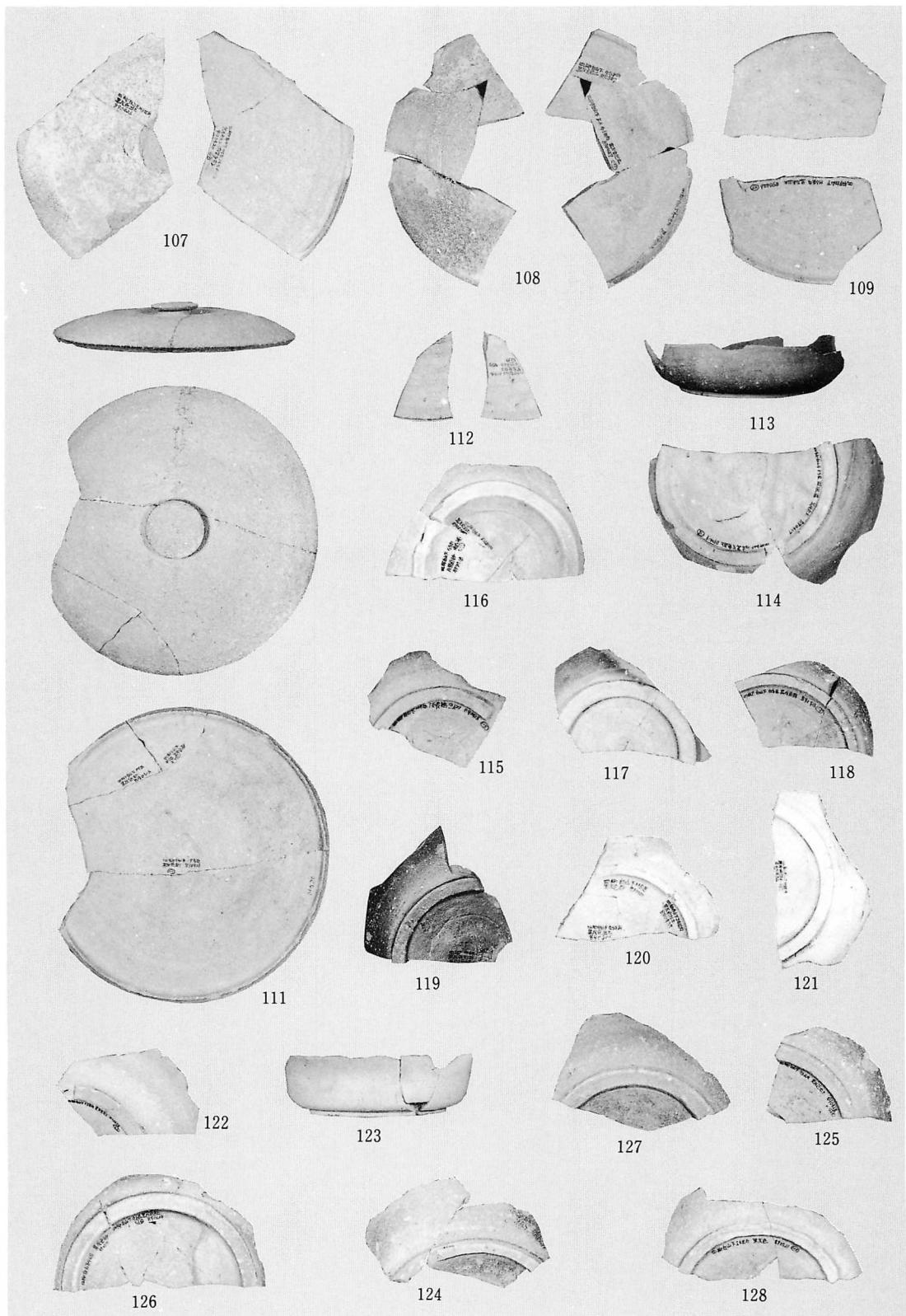
須恵器(第18図)



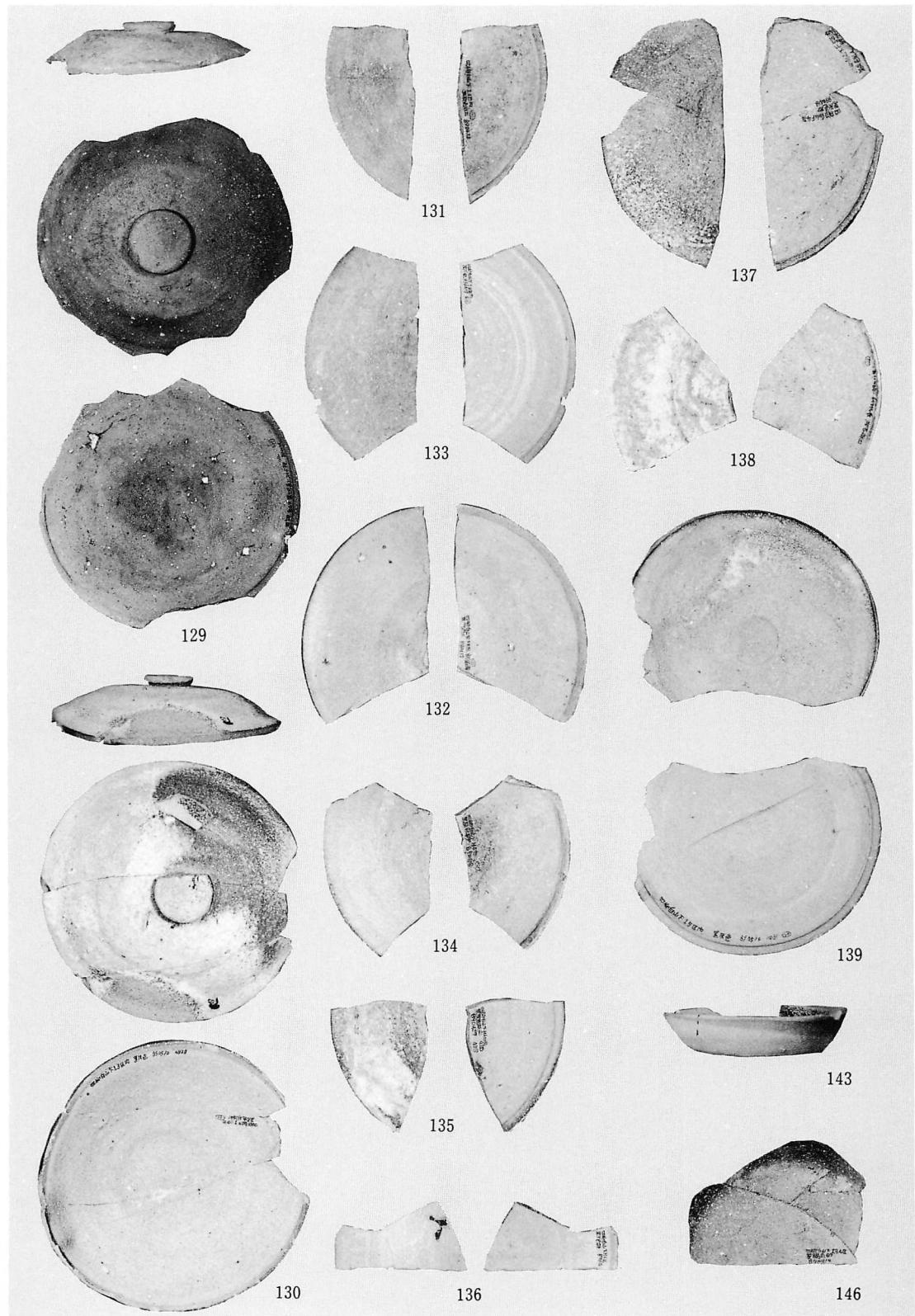
須恵器(第18・19図)



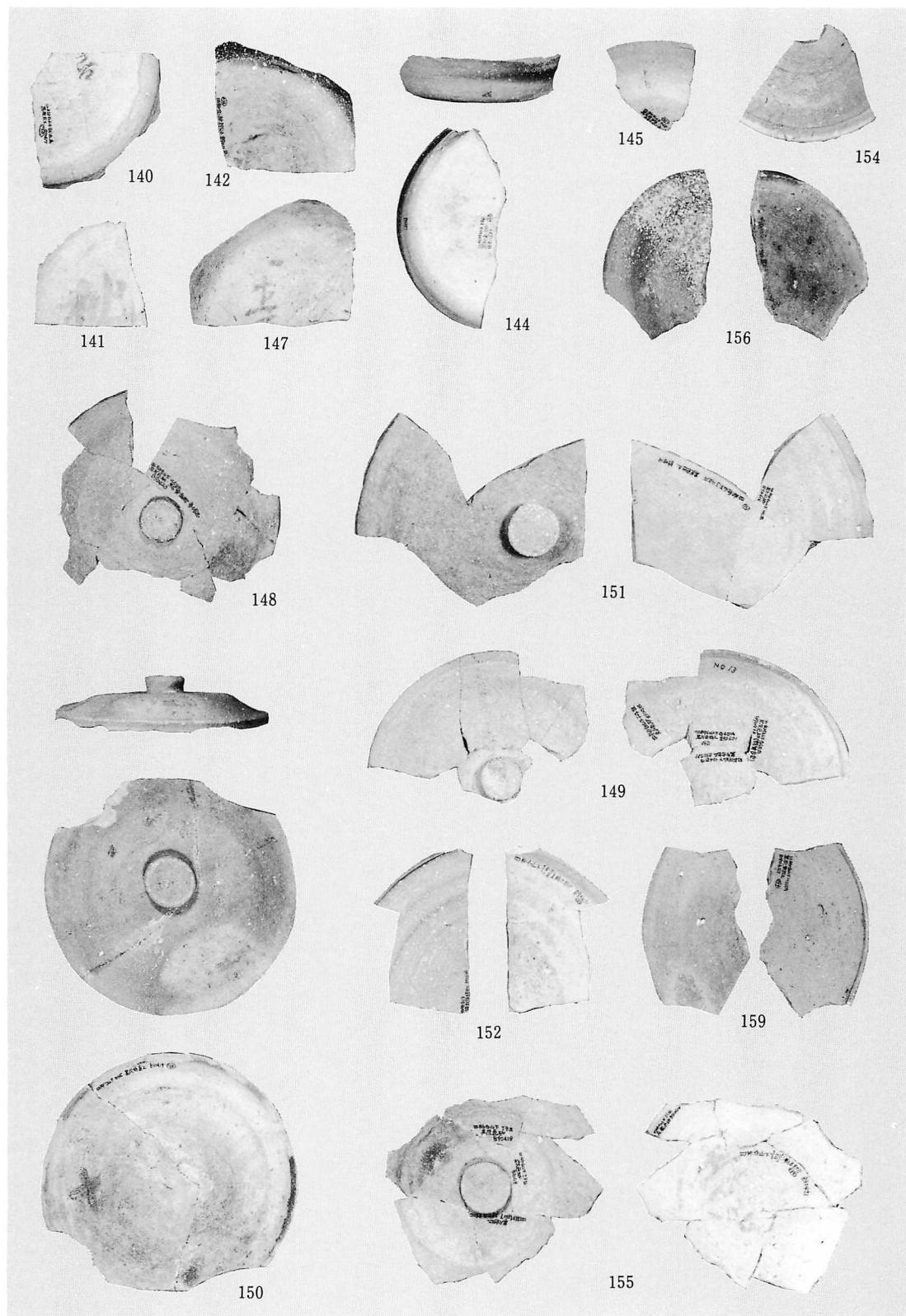
須恵器(第19・20図)



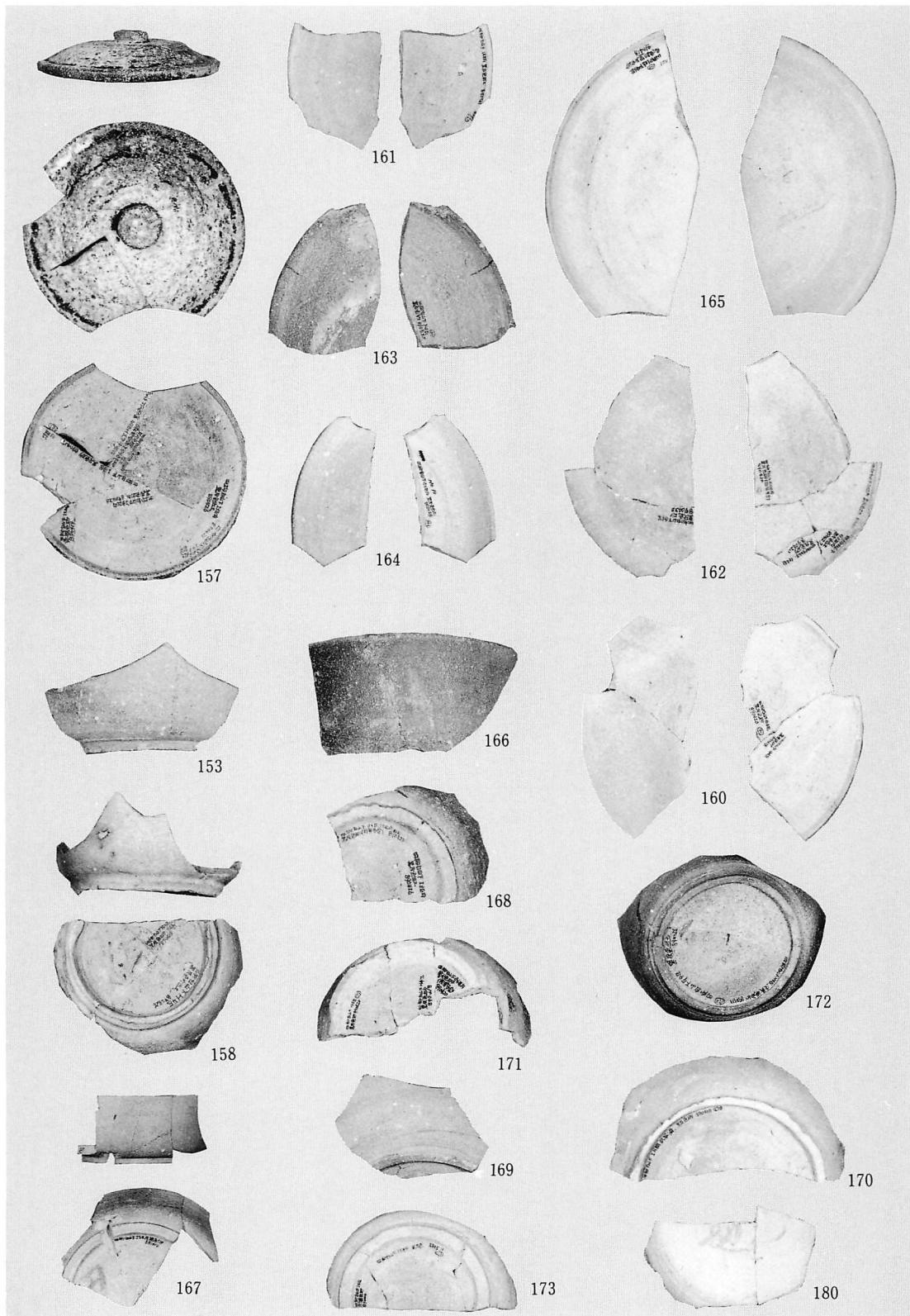
須恵器(第20図)



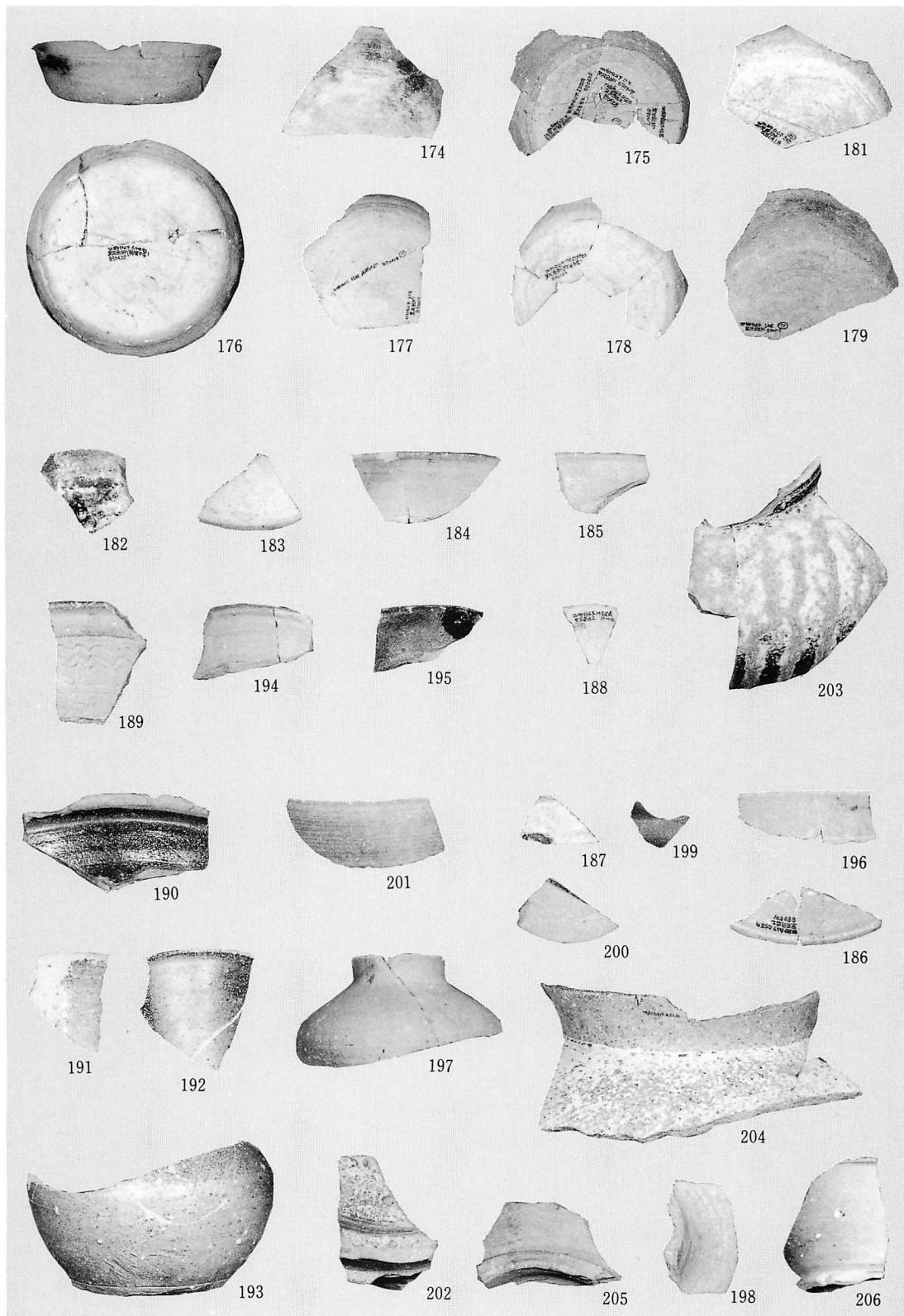
須恵器(第21図)



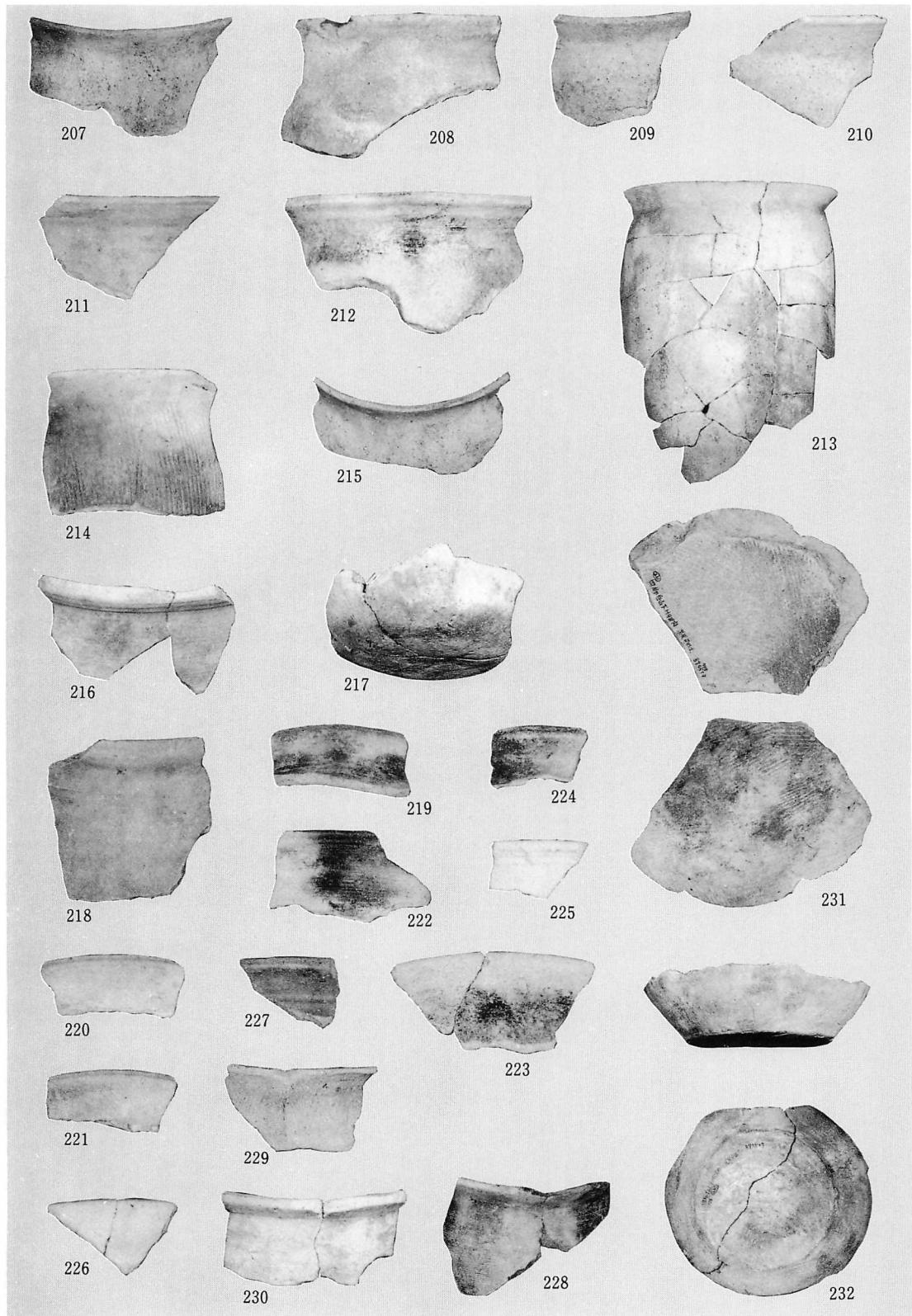
須恵器(第21・22図)



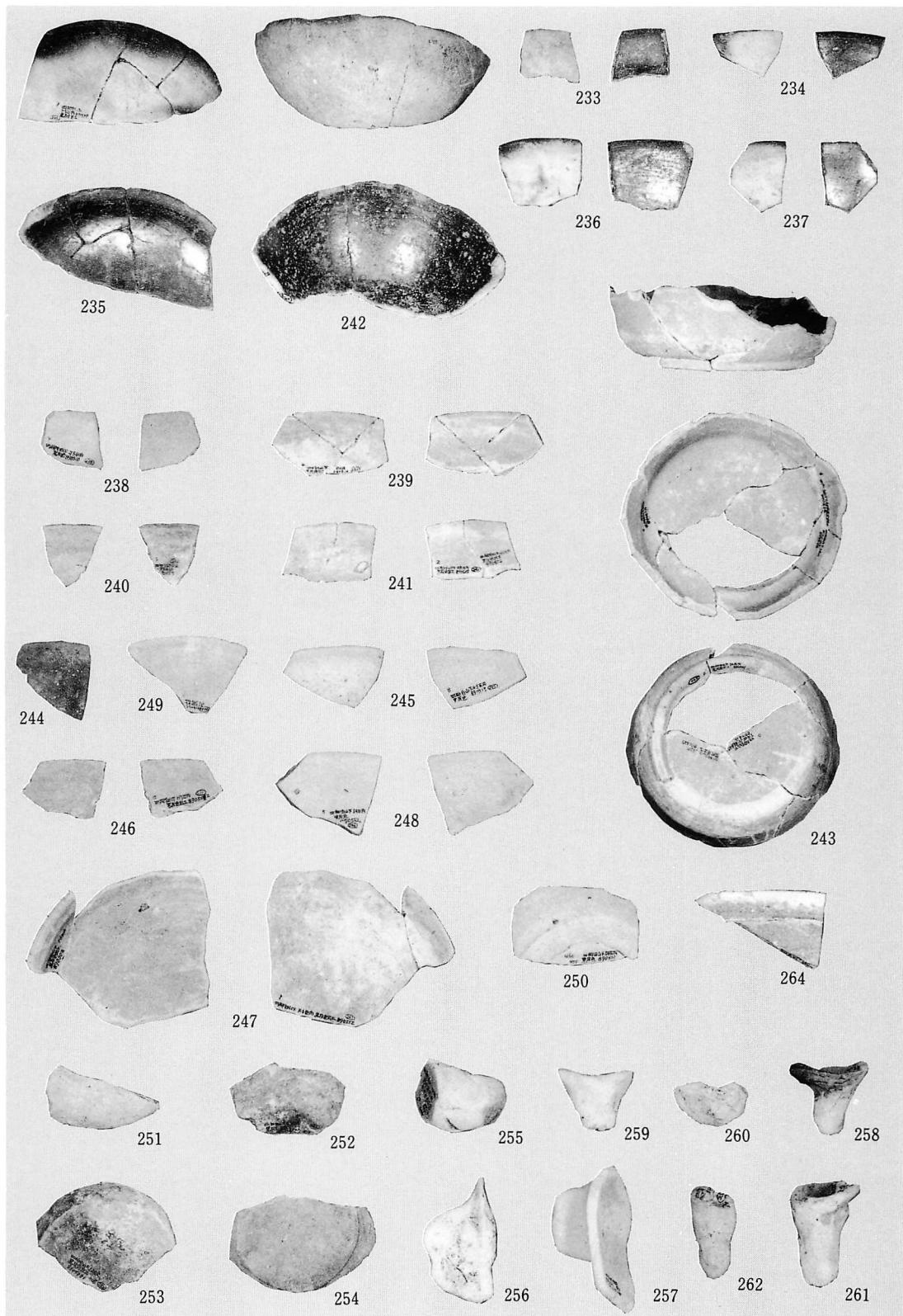
須恵器(第22・23図)



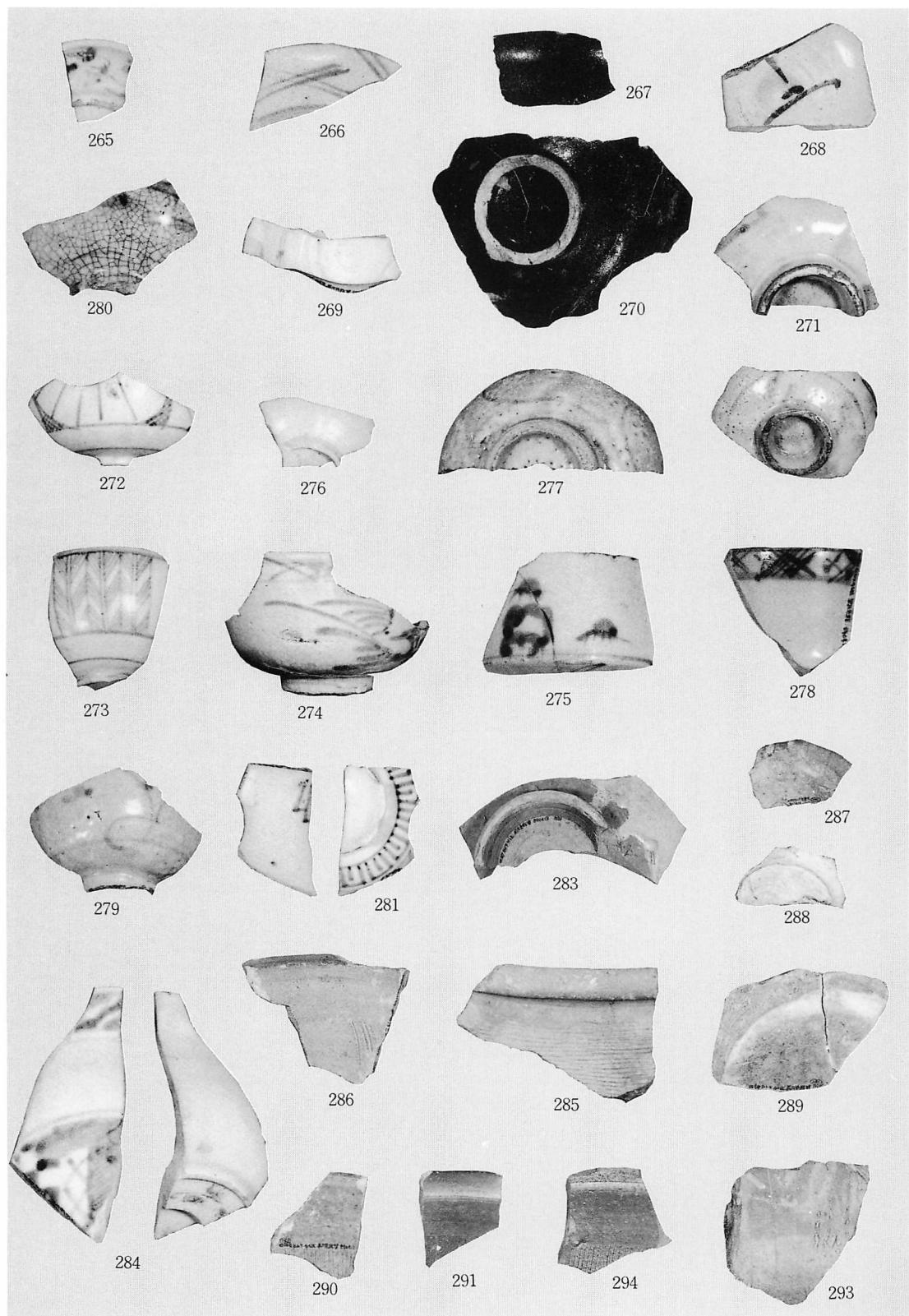
須恵器(第23・24図)



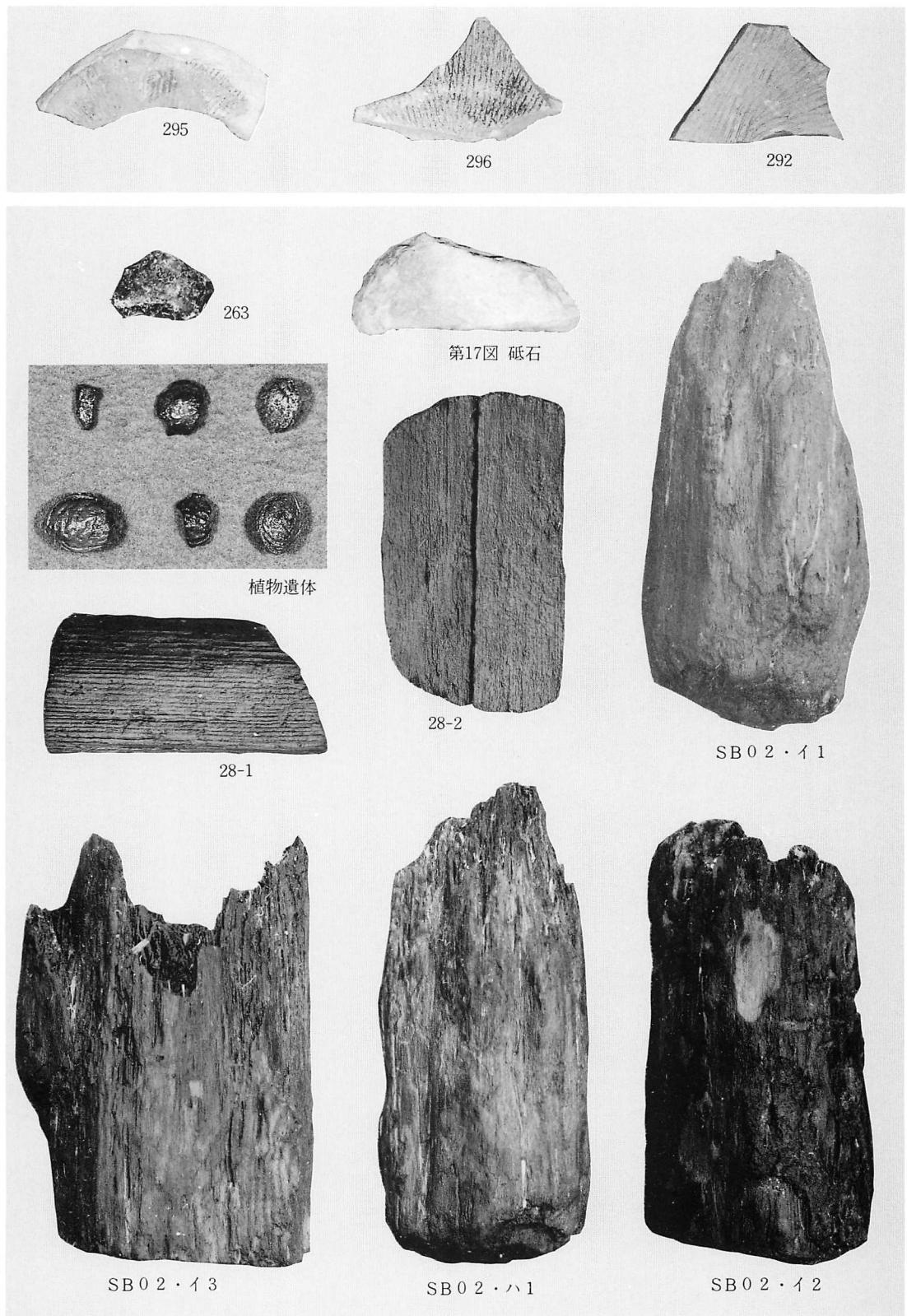
土師器(第25・26図)



土師器(第27図)



陶磁器(第29・30図)



陶磁器(上-第30図)、その他の遺物(第13・14・17・27・28図)



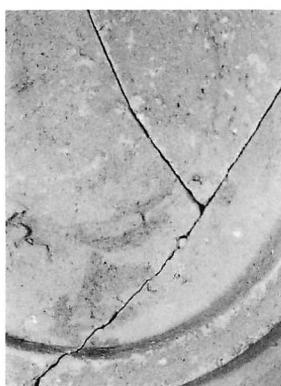
147



155



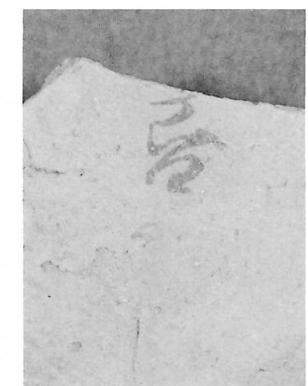
101



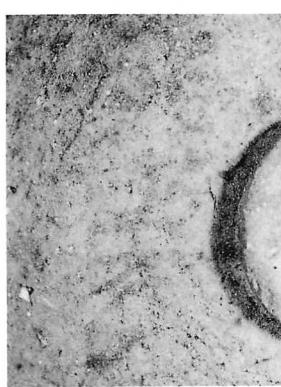
28



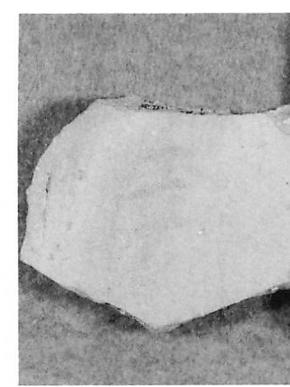
152



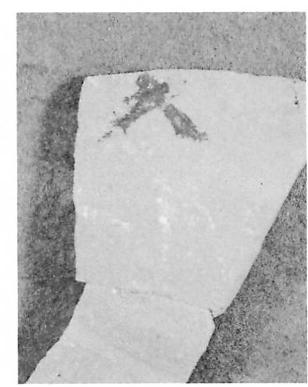
140



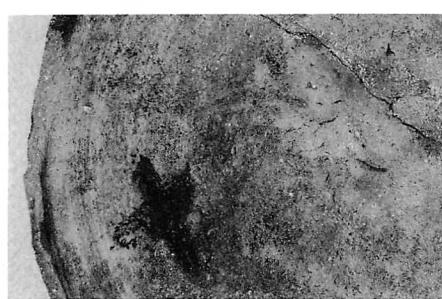
129



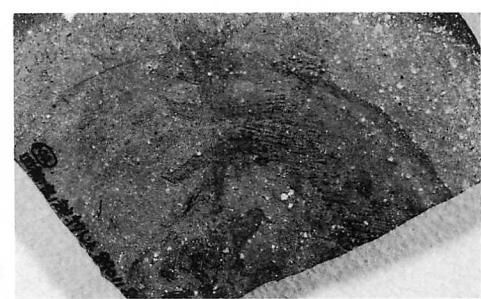
99



136



150



142

墨書文字 1



(参)2-3



(参)2-2



(参)2-1



144



20



13



167



114



141



180



110

墨書文字 2



【調査参加者】

坂井 俊次 坂井 晶子 宮田 光男 宮田ときの 松柳 清枝 上田 正則  
初谷 昌美 藤田 清 松島よしの 島田きよの 國田吉次郎 (以上、四柳町)  
今井 勇 浜田 誉 木前 明光 浜田 穂 大島とみ子 (以上、大町)  
北井よし子 砂田さわ子 (以上、酒井町)

---

四柳白山下遺跡 I

発行日 平成 2 年 3 月 31 日

発行者 羽咋市教育委員会

羽咋市旭町ア- 200 番地

印刷所 北陸コロタイプ印刷

羽咋郡志雄町子浦甲60

---